

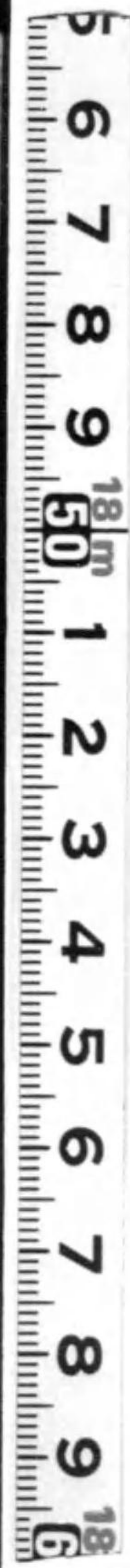
大久保利通

白柳秀湖著



289-0542ウ
1200500732280

289
72



始



428

289
0.542

大久保利通

白柳秀湖著



976
139

序

古來大政治家を以て稱せらるゝもの、理念の上に明哲透徹であれば實行力に乏しく、實行力の強靱遒勁を以て鳴るものあれば、往々にして私行の方直謹嚴を缺く。大久保利通は維新三傑の中、その實行力の強靱遒勁を以て鳴り、維新の創業殆どその大部分が、かれの牽引力と推進力とによつて成つたといふも敢て過言でないほどだ。しかもその身を持つる謹嚴、人格の高潔、氣品の卓犖、眞に一代の模範たるに足る大政治家であつた。本書はそれらの點に重きを置き、その特に維新外交の難局に處し、米・英・が内に怨讐の業火を包蔵しつゝも、表面全くその歩調を一にするものゝ如き態を裝ひ、それぞれの立場から、若き日本の上に恐るべき侵略の爪牙を加へんとして迫り來れる複雑極まりなき時局に處し、剛毅果斷、よく外交の重責を一身に負ひ、皇謨を翼賛し、國威を宣揚して、叡慮を安んじ奉れる曠古の偉勳を紀傳したものである。

されば、本書に於いて著者の特に意を用ひた點は、幕末・明初の交、大久保が挺身して、まだ完全

じ、それら強國の利益を土臺として世界の要所々々につちりと打込まれて来た國際秩序安定の留釘が罷廢して、こゝにもそこにも舊秩序の破綻が生じて來るといふ現代の政治は、もはや平和時代の旅客機ではなくして戦争の劫火と暴風とを衝いて大空を縦横に馳廻る重爆撃機でもあり、戦闘機でもあべき筈だ。その推進力に歴倒的な強靱性と持久性との要求せらるゝことはいふまでもない。

殊に世界に大を成すほどの國家・民族であれば、その發展途上、必ず幾たびかの段階に於いて遭遇しなければならぬ内憂と外患とは、本來一如のものであつて、必ず時を同じうして迫り來るべきものであるにも拘らず、一般には從來全然別個のもので、日を異にして迫り來るものと思惟されて來た。これは大變な間違ひである。

すなはち、或る國家・民族が、その内部に堆積した廢殘物によつて、その進歩と發展とに必要な機能を阻碍せられ、これを清掃してその若返り法を實施するのぞなければ、坐してその老衰死滅を待つの外ないといふ「生命の節」に到達した際には、必ずその國家・民族のまだ遭遇したことのないほどの大きい國難が、たとへば絶壁を滑り落ちる雪崩の如き勢ひで押し被さつて來て、外部からその國內改革を促迫するものであるのだ。すなはち、國內的大改革は、歴倒的外敵の來迫によつて促進せられるものであり、歴倒的外敵の來迫は國內に政治的・社會的・廢殘物が堆積して、その進歩と

込ませられて來た西郷・木戸・兩傑のほんとに偉かつたところ、大きかつたところが、はつきりとよく呑込めたといつてくれる人があつたら、著者の本書に對して費した労苦は、すなはち酬いられたわけだ。

昭和十八年七月

白柳秀湖

本書に對する讀後の御感想、若しくは御氣付になつた記述上・印刷上・の誤謬は、遠慮なく東京都品川區大井瀧王子町四・五〇三番地、著者宛に御教示を願土げます。それこそ著者にとつて最も大きい仕合せの一つであります。

目次

第一篇 人物素描

第一章 時艱にして行實の英雄を思ふ……………一

國難を克服する政治の推進力―長短相補つた維新三傑の個性―暗殺された朝偶然遺した明治維新三段の經綸―大久保の偉大な推進力を物語る慘澹悲壯の最期

第二章 藩閥政治と大久保利通……………一七

芋蔓關係から超脱して居た大久保利通―親分子分の關係を通じて見た長州人と薩州人との相違―新橋・柳橋・は大久保が死んでから繁昌した

第三章 説話 一束……………二四

井上馨大醉を借りて大久保を面罵す―大久保が登壇すると役所が墓場のやうに静まり返つた―佐々木高行と福地源一郎の大久保觀―高島綱之助・千坂高雅・鮫島武之助・の語る大久保の印象―冷徹でしかもよく人言を聞いた大久保―旅に出て話せば大久保にも慈父のやうな温情があつた―渡邊國武を留めて慈母の如く諭した大久保

第二篇 島津家と近衛家

第一章 薩摩國の歴史……………三九

縦の官職層と横の身分層—門閥制度を親の敵と喝破した福澤諭吉—唯一つの例外であつた薩摩藩の身分層制度—傳説の讒に包まれた島津家の鼻祖・惟宗忠久の素性—鎌倉以來日本唯一の封建的治外法權國であつた薩摩國

第二章 薩摩藩の内部組織……………五〇

薩摩藩に於ける三つの身分層—薩摩藩で上士層の特權であつた八層の官職—初對面で劈頭勝に一喝された西郷隆盛—薩藩の下士は何故長藩及び土藩の下士と反が合はなかつたか

第三章 薩摩藩内部組織の革新運動から日本國内部組織の革新運動へ……………五九

徳川時代に頻發した御家騒動中の最大傑作—島津家に於ける革新派と現状維持派との經濟政策上並に思想闘争上の對立—島津家・近衛家及び徳川家の血統的三角關係

第三篇 西郷・大久保・兩雄の生立及びその維新史への登場

第一章 大久保家の格式及び甲東の少年時代……………六七

鹿兒島城下なる甲突川東岸一劃の下士長屋—加治屋町の三崎章—大久保甲東の素養—齊彬の襲封と筑前候の兩章推薦—南州出仕直後の過失、甲東最初の出遊—島津家御家騒動の再燃—大久保持重して有村・西郷の勧誘に應ぜず

第二章 大久保の青年時代……………七九

大久保を中心とする革新派青年の脱藩聯盟成る—誓紙にもひとしき藩主側の慰留書—久光の斷呼たる決意を看破した大久保の聰明

第四篇 文久維新と大久保利通

第一章 南洲・甲東の兩雄駢馳して維新史に登場……………八五

久光譎然島津將曹一派の現状維持派を卻く—南洲三たび徳之島に流され、甲東初めて京都に入る—和宮親子内親王の關東御降嫁—長藩の重役層を代表する永井雅樂の策動—南洲、久光の公・武・合體主義的經綸に失望—甲東兵庫の濱に南洲を待受け耦死せんとす—三箇條から成る文久維新の勅策と大久保の獻替—水野越前守が天保改革で企畫した參觀交代制度の釐正—長・土・兩藩の提携で根柢から覆された薩藩中心の文久維新—大久保重役層の下位に班す

第二章 薩・長・土・三藩下士階層聯盟の由來並にその勤王倒幕運動……………一〇六

麻布の長州空屋敷で三藩勤王志士の密會―武市半平太歸國して勤王倒幕の同志を募る―武市一派の吉田東洋暗殺、長藩下士階層政權との聯携―長藩重役層の代表・長井雅樂の公・武・合體主義運動―生麥事件と大久保利通―英國東洋艦隊の鹿兒島砲撃と大久保等の思想的轉向―薩・長・兩藩の正面衝突、京都御所九門の兇變―南洲の赦免運動に於ける甲東の立場―第一次征長役に於ける南洲の殊勳―坂本龍馬・中岡慎太郎の登場―薩・長・聯盟の成立と際といふ佐藩の立場―後藤のべてん立を寛假した小松・大久保の包容力

第三章 維新前夜に於ける大久保利通……………一三二

第二次征長役に於ける大久保の殊勳―大久保甲東、閑老・坂倉勝靜を譚弄して出兵を拒む―將軍徳川慶喜の大政奉還―僅々數十日間で覆へされた慶應維新―大久保甲東と岩倉具視との通謀

第五篇 明治維新と大久保利通

第一章 新體制草創期に於ける大久保の三大功業……………一四

戊辰戦役の兵火を約束した大久保の強硬意見―小御所會議に於ける岩倉・大久保の

立場―辭官・納地・問題の本質―鳥羽・伏見の戦火―維新創業の五大案件と大久保の推進力―政體樹立のこと―三職の分課を定めること―列候召集會盟のこと―條約國に對し政體の變革を宣揚すること―徳川慶喜問罪のこと―有栖川宮に拜謁して征東の擧と大阪遷都の急務を言上―大阪遷都の建白書―遷都問題で大久保と久我との對決―二條城(太政官)に於ける征東の御前會議―江戸では西郷が徳川氏の城府接收―京都では大久保が新政府の外交問題に執掌―大阪行幸の決行とその眞意義・朝府自體の革新―大久保諸藩の士に率先して明治天皇に拜謁仰付けらる―東京遷都

第二章 版籍奉還・廢藩置縣で木戸の經綸を推進した大久保利通……………一七一

西郷と大久保とは何時から仲違ひしたか―初對面から肝膽相照らした木戸と大久保―木戸は理念の雄・大久保は行實の雄・西郷は仁徳の雄―由利公正の財政策に辛く當り散らした長州派―西郷は東北の軍旅にありても極力由利の財政策を支持した―維新創業五大案件の三を大久保が實行し二を木戸が遂行した―木戸孝允版籍奉還の大義を具して毛利敬親を説く―木戸版籍奉還の秘策を先づ大久保に告ぐ―廢藩置縣を斷行する準備として中央に陸海軍兵力の集結―木戸・大久保の苦心を物語る維新戦争・主政復古・二本立の論功行賞―二本立の論功行賞にも全國に熾然たる批難―西郷隆盛の賞典辭退―西郷隆盛位階をも拜辭せんとす―三度目の勅使で漸く召命を拜受した島津久光と西郷隆盛―一躍して西郷・木戸・板垣と肩を並べた參議・大隅重信―難局收拾の爲に大保のした前後兩度の美しい推讓

第六篇 征韓論及び西南戦役

六

第一章 維新政府に於ける國權擴張派と内治先決派との對立……………二〇五

大久保安政の不平等屈辱條約改正の爲岩倉・木戸・と携へて歐・米・各國に赴任―三條留守内閣の施政に對する木戸・大久保の懸念―條約改正問題に對して示された米國の對日親善態度―對日親善主義の假面に隠れた米國の對英敵本主義外交―大久保、大使一行と別れて先づ歸朝―三條留守内閣によつて着手された近代國家の四大仕上工作―封建的正規兵と過渡期に於ける壯兵との衝突―山縣有朋によつて創設された全國徵兵制度―全國を反革命的暴動の渦中に投込んだ地租改正法と徵兵令

第二章 近代的自主國家の生起に必伴する大陸進出主義……………二二九

征韓論の世界史的意義―征韓論の埋火を掻立てた草梁館事件―征韓論の破裂―佐賀の亂、大久保挺身して戡定に赴く

第三章 征蕃役と大久保利通……………二三八

理念一本槍の木戸と實効重點主義の大久保―征蕃の大詔渙發せらる―征蕃役を煽動した米國及び米國人―征蕃役に臨み初めて對立した木戸・大久保の兩雄―西郷都督自ら海賊脱徒と號して出征―大久保非常の勇斷を以て西郷都督出征後の善後措置―

蕃社悉く皇威に靡く―總理衙門に於ける大久保の強硬談判

第四章 西南戦争と大久保利通……………二五四

木戸と西郷との間に立ち情誼の板挟みとなつて舌んだ大久保―大久保鹿兒島縣政の改革を企てて成らず―鹿兒島私學校黨の火藥庫掠奪事件―今尙ほ解けぬ鹿兒島密偵事件の謎―大久保はどこまで密偵事件に干與したか―大久保明鏡に對して己を語る―大事すでに去り、西郷起つ―西郷救出の策全く盡く―西郷曰く『われは陸軍大將なり、縦令全國の兵を率ゆるとも』―西郷に對しては木戸最も冷厳

第一篇 人物素描

第一章 時艱にして行實の英雄を思ふ

國難を克服する政治の推進力

政治に推進力の必要であるのは、人體に心臓、汽車・汽船・自動車・もしくは飛行機・に内燃機關の必要であるのと同じだ。

世界の秩序が、或る壓倒的強國の富と力によつて保持せられ、各國家・各民族・が齊しくその節度に服従し、その命令を遵奉する代償として、それ／＼その存立に必要な資源の分配に與つて居る世界安定の時代にあつても、推進力はいづれの國の政治にも必要缺くべからざるものである。況んや舊來、世界幾十億人類の死命を制する經濟的支配權を把握して來た壓倒的強國の事情に著しい變化が生

に封建の外殻を擺脫しきらぬ、幼弱な日本の爲に、肉を殺ぎ、骨を削る苦心で善處した外交の難局である。當時米は、英に對して内に包蔵する獨立戰爭以來の激しい怨讐の業火をおくびにも現はさず、日・英・間に外交上の難問題が生起する毎に、巧妙な謀略で日本を焚きつけ、日本に恩を賣つて、日本から特權の報償を得ようとして居た。たとへば維新勿々の不平等通商條約改正問題がそれである。征蕃問題がそれである。この複雑怪奇極まりなき維新外交の局面に對し、英の恫喝に屈せず、米の僞瞞に陥擠せらるゝことなく、よく事の表裏を察し、時の大勢に順つて、皇國二千幾百年來の傳統である自主外交の鐵則を堅持し、維新の皇謨を磐石の固きに置いたものは大久保であつた。

本書はこれまで公表された大久保利通傳中、大久保の骨格と相貌とを傳へた最も眞に近い肖像畫の一であると信ずる。しかし、肖像畫には二様ある。その一はたゞ骨格・相貌・だけの眞を傳へるものと、他の一は骨格・相貌・の眞を傳へた上に、その人の内容、すなはち性格の躍動するものを盛上げたものである。著者は及ばずとも本書を第二の肖像畫にちかひものであらしめようとして最善の努力を拂つた。その爲には、ひとり大久保利通その人の性格を畫面に盛上げたばかりでなく、西郷隆盛、木戸孝允・兩傑の性格をも同じ手法によつて表現する他日の製作を期し、そのデッサンを大久保との對照に於いて左右に掲げ聯ねて居る。本書を讀んだ後で、これまでたゞ偉い人とはかり、ぼんやり思

發展とが全く行詰り状態に達した時に生起して來るものであるのだ。

これをわが國に於ける過去の歴史に徴するに、大化新政の場合に於ける大唐朝の殺到の如きがその一例であつたし、明治維新の場合に於ける英・米・佛・露・蘭・等資本主義先進國家の來迫の如きもその一例であつた。明治維新の際には、薩に西郷隆盛・大久保利通・があり、それと並んで、長に木戸孝允があり、その上に、鎌足以來の梟雄で、世のいはゆる「公卿惡」の典型的なものともいはれて居る岩倉具視があつて、よく三傑の急所を把り、且つそれ／＼の垂縁によつて三傑の下に配置されて居た各藩の俊秀及び幕府の逸材を總攬することにより、よく維新の皇謨を翼賛し、近代國家・日本の創業を達成し得たものだ。

長短相補つた維新三傑の個性

西郷・大久保・及び木戸三傑の中、西郷は人情味に於て他の二傑にまさるところがあり、群雄が慈父の如くその徳に懐いて居た。木戸は維新の皇謨を推進して行く理念に明かであり、その前後施設するところの矛盾と背馳とによつて、苟も國民をしてその適従するところに惑はせるやうな失態なからしめんとして夙夜憂衷して居た點で、他の二傑にまさるところがあつた。しかしながら前古未曾有の

外難と、それによつて促迫される國內的大改革とに當面した維新の政治は人情と理念とだけで完成を期することの出来なかつたこともちろんである。すなはち西郷・木戸・兩傑の缺けたところを補つて、維新政府の政治力となり、その新たに施設するところの文物・制度・を、ゴレムの如く、またタンクの如く、有らゆる障礙物を凌夷して推進させたものは大久保利通であつた。

大久保利通は、西南戦争が終局を告げて、全国各地に分布して居た一切の反革新的勢力の餘燼がまつたく鎮熄をみるに垂んとしつゝあつた明治十一年五月十四日の朝、參朝の途次、麴町紀尾井坂に差掛からうとしたところを、路傍に待ちうけて居た石川縣士族・島田一良をはじめ四・五・人の反動主義者に襲はれ、無慙な最期を遂げた。この時の斬られ方はいかにも殘酷をきはめたもので、いまこゝにこれを筆にするさへ忍びぬ心持がするほどのものであつた。

筆者は、明治史を讀んで、大久保の無慙な最期に及ぶ毎に、顧みて大久保の明治新體制のために致した推進力のいかに強く大きいものであつたかを想はざるを得ぬのだ。凡そ或る國家・民族・が振古未曾有の外難に當面して國內的大改革を斷行し、その若返り手術によつて當面の難局を突破しようとして乗出した際、誰にも憎まれぬ、誰にも受けのよい、いひかへれば、有らゆる既成勢力に氣受けがよく、しかも國民一般から歡迎せられるといふ政治は、斷じてあり得ぬのだ。

明治維新が、あれだけの赫々業々たる成果を擧げるまでには、随分惜しむべき多くの人材を犠牲として、正視するに忍びぬ幾多の慘澹たる悲劇を賭したものであつた。

維新以前のことは姑く措くとし、維新以後でも、西郷隆盛は城山で腹を切り、大久保利通は紀尾井坂でずたずたに斬られて横死し、木戸孝允は國家の前途を憂衷するのあまり心身疲憊、殆ど癡人の如くなつて斃れて居る。またよく三傑の急所を把握して曠古の皇謨を翼賛する上に殊勳のあつた岩倉具視も、一夕反動主義者のために襲はれ、赤坂喰違の濠の中に身を浸し、息を殺して難を免れたこともあつたのだ。

凡そ國家がその興廢を賭して行ふ國內的大改革の場合に於て、憎まれぬ政治、憎みどころのない、いひかへれば、尻をもつて行きどころのない政治といふものは、斷じてあり得ないかと思はれる。大化新體制の場合にしても、明治新體制の場合にしても、それによつて常職を解かれ、恒産を失つた失業者の猛烈な反動的崛起を見るべきはむしろ當然のことである。不祥事そのことは、もちろん望ましいことではなく、もし避け得られるならば、これを避けるに越したことはない。

或る國家・民族・がその新體制樹立の非常な改革に臨むに當り、その大政輔弼の責に任ずるものが用意百端、自肅自戒、率先躬行して範を萬民の前に示し、それで大不祥事の突發を未然に防止し得た

とすれば、その改革こそ全世界を光被し、全人類を跪拜せしむるに足る赫々業々の新體制であるに相違ないが、それと結果が似て、舊體制から醜醜爆發すべき忿懣の持ちかけどころがなく、瞋恚の持ちかけどころがないやうな政治は、困りものだ。これは戦闘機・重爆撃機・が内燃機関を置き忘れて来たやうな形のものではないか。それでないにしても、内燃機関の性能に由々しい缺陷のあるのにも比すべきものではないか。凡そ國家の興廢を賭して行はれる非常の大改革に際して、推進力を缺く政治の歸趨ほど悲惨なものはあるまい。殷鑑遠からずして、フランスの斷末魔にありだ。深く考へなければならぬ。

暗殺された朝、偶然遭した明治維新三段の經綸

大久保利通が清水谷で膽たまの如く斬られて横死した明治十一年五月十四日の早朝、麴町區三年町なるその私邸の玄關口に恭しく刺を通じ、諷をもとめた一人の男があつた。その時、大久保はすでに參朝の支度をととのへ、まさに玄關に出ようとして居るところであつた。玄關の前には二頭立の馬車が横付けにされて、主人の出仕を待つて居た。取次のものが玄關にあらはれると、訪問の件の男は、すでに參朝の用意のととのつて居る有様を見て、ひどく恐縮したらしい調子で、取次の者に名刺を差出した。

た。

「參議はもうおでましのやうでありますから、また更めてお伺ひすることといたしませう。私は福島縣令でございますが、閣下によりしくお取次を願ひます。おでましのお妨げをいたしては相済みませぬから、いづれまた更めてお伺ひすることといたします。」

大久保の訓練がよく行届いて居たか、取次の男はそのまま福島縣令と名のる男を立去らせようとはしなかつた。

「只今御出仕になるばかりのところではございますが、少々お待ち下さいまし。何と仰せられますか、とにかくお取次して見ますから……」

といつて奥に消えたが、やがて玄關に引返して来て、

「いま出掛けるばかりのところではありますが、ぜひ申上げたいことがあるから、ほんの立話のつもりでお目にかゝらうとのことでございます。」

と傳へた。その男はいよゝゝ恐縮の體で、

「それはなんともはや恐縮の次第で……」

と幾たびも取次の男に會釋をした。

福島縣令・山吉盛典は、やがて支關協の應接間に通された。接待の茶の運ばれるのを待つまでもなく、大久保は參朝の支度をととのへてそこにあらはれた。山吉は椅子を立つて、一と足後ろに引下ると、

「はつ、これは閣下で……。どうも早朝罷出ました上に、御出仕のお邪魔を仕りまして恐入ります。」

「なんの、その遠慮には及ばぬ。わしの方にもちき／＼によく頼んでおきたいと思ふことがあるのぢや。」

「はう。」

「もう役所の方の御用はお済みかな。」

「はい、會議が終りましたから、いろ／＼本省の方と打合せの用向などもいたしましたして、只今まで滞在いたしました、いよ／＼それも一段落となりましたので、二・三・日中に歸任いたしましたと存じ、ぜひ一度閣下に御目通りを得て、ちき／＼御訓辭を仰ぎたいと心得まして、罷出ました次第でございます。」

こゝに會議といふのは、明治十一年四月一日に招集された第二回地方官會議のことである。そもそ

も地方官會議は、明治七年五月の詔勅に基き、同年九月十日を期して東京に開催される豫定であつたものが、征蕃役その他事情に妨げられて果さず、明治八年六月二十日、はじめてその第一回會議が東京に開催せられた。しかるにその翌年（明治九年）は、東北御巡幸のことなどがあつて中止となり、翌年（明治十年）も西南戦役のために妨げられて果さなかつた。西南戦役平定後の政府は、大久保一人天下の觀があり、隨つて民間にはその威望の赫々たるを妬むものもあつて、明治八年四月十四日の大詔（元老院・大審院・及び地方長官・設置に關する詔勅）も御取止になるだらうなどの風説がもつばら行はれて居たほどであつた。

しかるに政府は、明治十一年三月に至り、斷然地方官會議を開催するの議を決し、四月一日、これを東京に招集した。大久保の眞意を誤解して居た一部民間の人士は、政府のこの措置を見て、ひどく事の意外に驚いたが、いよ／＼四月五日から地方官會議の開催となり、政府の提出した議案が案外にも改革の精神に満ち、殊にこれによつて、少數識者の多年翹望して居た地方代議制確立の日が近きにあることも知られ、一層驚嘆の眼を瞠つたのであつた。さうしてこの地方官會議の終了を告げたのは大久保の殺される十一日前、すなはち五月三日のことであつた。

大久保は、山吉が席に復するのを待つて、徐ろにいつた。

「さうか、それはよく来てくれた。今後の施設方針に關するわしの考へは、過日地方官會議の席上でも詳しく申上げて置いたことぢやが、なほ十分に盡さぬところもあつたやうに思ふ。そこで折角あんたが訪ねて来て下さつたのを幸ひ、こゝでその時申落したと思ふことを補つて置かう。わしにとつてもちやうど好い機會ぢや。」

「はゞ。」

「わしは、この維新の仕事といふものは、はじめから少とも、三十年はかゝるものと見て居たのぢや。いまこの三十年を三期に分けて見ると、明治元年から、明治十年までが第一期に當るのぢや。しかるにこの第一期といふものは、實に内外多事、兵馬倥傯の間に過ぎて、内治の上には殆ど何ほどのこともして居なかつたのぢや。これは主としてその方面を擔當して來たわしどもの責任で、特にわしは心にその無能を深く愧ぢて居るのぢや。しかるにいまはその第一期が過ぎて、今年から第二期に入らうとして居る。各地の暴動も漸くにして熄み、人心もどうやら落着いて來たやうぢや。諸般の文物・制度・を完整し、維新のはじめに庶幾した國家の基礎を固めるのはこれからぢや。これからが諸君の御盡力に俟たんけりやならぬところぢや。さうして諸般の文物・制度・が備はり、日本國の基礎が定まつたところで、第三期がやつてきよる。第三期は、第二期

の仕事を繼承し、潤色する時代ぢや。これはわしどもの仕事ぢやない。後人の中に自らそれを引受けてくれる人があらう。わしが特にこれからあんた方の援助に俟たうとするのは、かやうな次第ぢや。」

「閣下、思召の程はよく解りました。かほどの深い御考へとも知らず、世間にはなほ閣下のことをかれこれと申して居るものが少くありません。實に心外千萬のことでございます。」

「世間の申すことなどは棄て、お置きなさい。歸つたらそのことを縣の役人たちにもよく傳へて十分に勉強してもらはんけりやなりません。」

「委細承知しました。」

福島縣令・山吉盛典が、大久保の嚴肅な態度と、その血の滲むやうな、腸から絞り出されるやうな眞摯な意見に打たれて、感激の色を滿面に湛へつゝ、鞠躬如としてその邸を辭し去つたのち、幾許もなく轢轆たる車輪の響きと、憂々たる馬蹄の響きとが相交つて、一輛の馬車が邸の門を出た。その日の午前八時を少し過ぎた頃である。

大久保の偉大な推進力を物語る慘澹悲壯の最期

大久保が福島縣令・山吉に告げた明治新體制に臨む肚構へは、それから十數分も経たぬ内に、この明治新體制の推進力そのものである英雄の遺言となり果せたのであつた。それにしてもなんと意味の深い、示唆に富んだ遺言であつたか。誰か昭和維新のこの超非常時局に當面し、大久保が維新の大業を三段に分けてその責任を自負して居たやうな眞摯な態度をもつて、それ／＼の職務に任じて居るものがあるか。

筆路がこゝに立至つた上は、敘述が何程か前後する嫌ひはあつても、この英雄が明治新體制の樹立に對する強く逞ましい信念を吐露した十數分の後にして遭遇した慘澹たる最期を物語つて置くことが當然の順序となつて來た。なぜかといへば、大久保のこれを筆にするに忍びぬほどの悲惨な最期は、たとひそれが大政治家の生涯を閉づる最終の舞臺面としてむしろあり勝ちのこととはいへ、その度を越した深刻さと残忍さとが、やがてかれの政治家としての推進力の拔群を物語るものであるからだ。馬車が三年町なる大久保邸の門を出で、いまでも清水谷から紀尾井坂に差掛からうとする時であつた。

當時、皇居は赤坂離宮に遷されて居た。それは明治六年五月五日、皇居炎上のことがあり、赤坂離宮へ遷御、明治二十二年一月十一日、御造營が成つて還幸遊ばされるまで足掛け十七年間、赤坂離宮

が御座所となつて居たからであつた。

この時、路傍を書生體の男が四・五人、女郎花を手にして散歩して居るやうに見えたが、その中の一人（島田の獄中談によると長連豪であらう）が、傍の叢の中から一振りの太刀を取出すよと見る間に、咄嗟、一方の馬の前脚を拂つた。馬は驚きながらもなほ四・五・間ほど走り続けた。

すると他の一人（脇田巧一）が、これも長刀を振り翳して、馬の前額部に二の太刀を浴せかけた。馬は堪らずして、どうとその場に倒れた。一方の馬が倒れたので、他の一方の馬も立ち竦んでしまつた。この時、馭者・中村太郎は、

『うぬ、なにをするかッ！』

と鞭をあげて、馬の前額部に斬りつけた脇田巧一を打つた。脇田は返す刀で、いまでも馭者臺から飛び降りようとする中村の肩先から肋にかけて一と太刀大袈裟に浴せた。中村は『あつ』と叫びもあへず血煙立て、大地に倒れた。

これを見て、馬丁の芳藏は、素破こそ一大事と身を翻して、分署のある方に走出した。この時、大久保は、車中で政務に關する書類を査閲して居たが、兇漢の襲撃と見るや、

『待てっ！』

と一と聲叱りつけておいて、件の書類を靜かに御用箱の中に納め、馬車の戸を排して外に出ようとした。

この時遅く、刺客の一人、島田一良は、その左手を以て大久保の右腕を扼し、強く馬車の中に押込んだ後、右手にもつた刀を揮つて二突きまでこれを突刺した。大久保は

「無禮もの！」

と大喝して、さも無念さうに刺客の顔を睨みつけた。その時の參議の顔の物凄さは「苦痛故か無念故か、なんともいはれぬ恐ろしさで、いまに忘れることが出来ぬ」と、事件の後、當の下手人である島田が、獄中で同囚のものに物語つたといふことである。

大久保が、島田の二突きに怯んで車中に倒れたところを、他の五人の刺客も左右の窓に飛びついて滅茶々に突き刺した。さうして刺客らは、まったく抵抗力を失つた大久保を、無慙にも馬車の中から引摺り出した。それでも大久保はなほひろくと七・八・歩歩いた。これはまったく氣の張つて居たせゐであらう。(島田一良談)

それを刺客らは左右からさんぐに斬りつけ、止めまで刺して、完全にその目的を達したが、今日でさへ人通りの少い清水谷の邊、その頃は左右が淋しい茶畑で、往來の人は絶えてなく、さしも曠世

の英雄も、兇徒の兇刃に臉の如く斬りさいまれて、路上にその骸を横たへた。この時、刺客らはいづれも聲が嘎れ、咽喉が渴いて、動悸が激しく、殆どその場に昏倒せんばかりであつたので、その中の一人が路傍の溝に這ひ寄り、一掬の水に渴を醫するのを見ると、他の五人もみな腹這つて溝の水を飲み辛うじて氣を取り直した。(島田一良談)

刺客らはてんでに持つた太刀を拔身のまゝ馬車の中に投込んで、それからひたすらに皇居の方に途を急いだ。

刺客らは間もなく宮内省の門前に至り、門衛に向つて大聲に、

「われ／＼は只今途上にて國賊、大久保利通を誅戮して參つたものだ。この上は逃げも隠れも致

さぬ。御法の如く御處分を望む。」

と、豫て用意の斬奸状を取出して自訴した。門衛が見ると六人の男、いづれも二十歳から三十歳ぐらゐまでの青年で、多くは木綿の紋附に白の小倉の袴を穿ち、一人だけ絹羽二重の羽織を着て居るのは首魁らしく、島田一良と名告りをあげた。この騒ぎに同省では直に近衛兵を出して、兇徒の一團を包圍させ、第二分署の巡查に命じて、一同を警視廳第三課へ送致させた。折柄、地方官會議の後を承け、府縣會の實施を前に控へて、内務卿の地位は非常に重要なものであつたので、參議、伊藤博文は

即日後任内務卿の辭令を拜し、大久保參議の遺して行つた府縣會實施の大事業に當ることとなつた。自訴して出た刺客は、左の六人であつた。

石川縣士族	島田一良
同	長連豪
同	杉本乙菊
同 平民	脇田巧一
同 士族	杉村文一
島根縣士族	淺井壽篤

この時兇徒の差出した斬奸状は、有名な漢文くづしの大文章で、同縣の士族陸義猶の筆に成るものであつた。その訴ふところは、大部分誤解に基いたものであることいふまでもないが、當時、強く逞ましい大久保の政治的推進力が、明治新體制の落伍者や、それによる失業者の間に、どんな印象を與へて居たかを知るに足る究竟の資料である。

第二章 藩閥政治と大久保利通

芋蔓關係から超脱して居た大久保利通

明治十年の西南戦役で封建社會の廢殘物、特に封建的正規兵(武士士族)及び過渡期の國民兵(壯兵)清掃作業は一段落を告げた。後に残つた最も著しい封建社會の廢殘物は、何であつたかといへばそれは誰でも、長閑とか薩閑とかいふ名で呼ばれた政界の親分子分關係であつたと答へるだらう。しかしその親分子分關係が、すべて封建社會の廢殘物であつたといふわけではない。

親分子分の關係も、人間の麗しい情味の一端である。人間にして存する限り、社會にして續く限り、親分子分の關係は減びるものでなからう。問題は、親分子分の關係がその時代に行はれる經濟制度・政治組織・いひかへれば、その時代を律する倫理關係と相順應するものであるか、それとも相剋するものであるかが問題である。

西南戦役の後、政界に根を張つて居た封建的親分子分關係で何が一番甚だしかつたかといへば、そ

れは薩人のいはゆる『芋蔓關係』で、その中でも北海道開拓使だの警視廳だのいふところは、廢藩置縣後の日本には断じてあるべからざる封建的割據の場所であつた。だが、かやうな薩人の封建的割據を誰の罪とすべきであるかといふことになる、著者は明治の閥族打倒論者よりも、幾分いはゆる藩閥の徒に對して寛大であるかも知れぬ。薩人の芋蔓關係は黒田清隆をその大本として擧ぐべきでもなく、また小西郷をその大本として擧ぐべきでもない。それは薩摩といふ國に特有の一つの風習が明治政府に移植されただけのもので、特に或る一人の大親分があつて、計畫的に根を張り蔓をひろげたわけのものではなかつた。黒田清隆にしても、川路利良にしても、個人的にはなか／＼美しい性情の持主であつた。況んや圓轉滑脱、機械油そのものともいふべき小西郷に於いてをやだ。

しかも本文の主人公・大久保利通にいたつては、前來述べて來たやうな薩藩特有の風習を超越した一個の儼然たる近代政治家の典型であつた。

親分子分の關係を通じて見た長州人と薩州人との相違

長藩は薩藩に比べると、なんといつても近代적であつた。最も早く封建制度の外殻を擺脫し、徵兵制度（奇兵隊）による下士階層維新（俗論黨征伐）を成し遂げて居たほどあつて、西南戰役後に遺つ

た親分子分關係も、薩藩ほど露骨で且つ激しくはなかつた。

伊藤が親分子分の私的從屬關係に最も淡泊であつたことは人のよく知るところであるが、井上とて持前の痢癩玉は痢癩玉として、幕臣その他各藩の俊才を登用してこれを使ひこなすことは、伊藤にまけずよく努めて居る。山縣は伊藤・井上と少しく流儀を異にし、一たび自分と親分子分の關係を結んだものは、どんなことがあつてもそれを自分の手許から離さうとはせぬ。そこに幾分國家のためにするといふよりも、自分のためにするといふ影が濃厚でないとはいへない。しかしそれとて物の道理はよく分つて居た。晩年の山縣がその權勢の爲に、周圍の阿諛者からどんなに自分を腐蝕させられて居たにしても、既に普く人に知られて居るやうに、かれは過渡期壯兵によつて編制された御親兵の中に遺つて居た封建的親分子分關係を排斥して、國家本位の國民軍を建設した殊勳者である。もちろん山縣の先輩には高杉晋作があり、大村益二郎があり、この兩人の中どちらかが達者で生き残つて居たならば、かれも明治・大正の『大御所』ではあり得なかつたかも知れぬ。しかし、かれにも高杉・大村の企て及ばぬ長所はあつたのだ。その長所は、すでに長州に於ける下士階層維新に際して明かに發揮されて居る。その徵兵制度の創設に當つては、全智全能を擧げて、西郷を中心とする全國の封建的正規兵主義者と闘つたけれども、一方でかれはよくその胸襟を披いて小西郷と協力し、大山巖の

才能を十分働かせて居る。晩年、閥族政治の總本山として政黨政治家から目差されたのに對して、財界・政界・官界・學界・に張りめぐらされた親分子分網を總動員して、自ら守るに急であつた形があつたのも、畢竟はかれの性格の問題であつて、薩人が警視廳に割據し、北海道廳を占領し、三菱と提携して、大藏省・日本銀行・横濱正金銀行・第十五銀行・に枝を張つて居たやうな芋蔓式のことをしたのとは少しく意味がちがふ。

そこに、長州人には長州人を一貫する流儀があつた。いひかへれば、親分振りがあつた。

その點は、薩州人の方と同様である。薩州人の封建的割據思想は必ずしも黒田・小西郷・松方等の罪ではない。これらの人にも個人としてはそれ／＼美しい性情があり、すゝぶん芋蔓式の非難を打消すに足るやうな人間味に富んだ挿話も少くない。しかし薩州人としての大體の傾向を見ると、そこに個人の意圖にも計畫にも關係のない一つの傾向といふものはある。その傾向といふものは本人には分るものでない。本人は第一の心で物事を考へ、それに従つて行動して居る。しかし人間には第一の心の外に第二の心がある。人間はその第二の心で、しつかりと自分を世の中の或る流れに結付けて居るのだ。

大久保にも、黒田にも、小西郷にも、松方にも、薩州人としての相通するところはあつた。しかし

その中で大久保は薩州人としての嶄然たる異色であつた。大久保とまつたく人間の型を異にして相對するものに西郷隆盛があり、これが生粹の薩摩の精神、薩摩の傳統を代表して居た。大多數の薩摩人は西郷の流れに屬した。

それなら大久保は、薩摩人の中で孤立であつたかといふに、必ずしもさうでない。大久保の流れに屬するものに小松帯刀があつた。この人は大久保から見ると大先輩であつて、大久保の出世は、この人の推挽輔導によるところが少くなかつたのだ。薩州人ではないが、大隈重信の如きも、死ぬまで小松帯刀のことを恩に着て居た。さうして口を極めてその爲人を推稱して居たものだ。實際、西郷と大久保とが相携へて王政復古の大舞臺に立ち、あれだけの業績を擧げることが出来たのは、小松帯刀の力であつたといつても決して故障は起るまい。大久保は薩州人としてこの小松帯刀の流れを汲んだものともいへる。

大久保の下に、五代友厚・寺島宗則・などいふ人があり、その中、五代は完全に薩摩人としての殻を脱ぎきつて居なかつたにしても、少くともその主義・理念の上ではまつたく大久保に一致する人であつた。また五代・寺島の下に、森有禮・吉田清成・吉原重俊などがあり、就中、森有禮となると、まつたく薩摩人ばなれがして、むしろ福澤諭吉・神田孝平・などといふ人とよく話が合つた。

の大久保と森とが描ひも描つて兎徒の兎刃に伏して居る。薩摩人と全日本人とを結付けて居た強いしつかりとした絆が一旦そこで切斷された。

新橋・柳橋・は大久保が死んでから繁昌した

黒田清隆は亂暴者であつたが、青竹を割つたやうなさばくとした美しい性情の持主であつた。だから、かれには修飾といふことが出来ない。薩摩人だから、薩摩人との間に貴族のあるのは當然のことだ。仕事をするには自分の信するものを使はねばならぬ。薩摩人が薩摩人を子分として使ふに何の不可がある。これがかれの一本槍であつた。

大久保は、黒田のやうに單純ではなかつた。大久保は廣く人材を天下に募り、適材を適所に置いて働かせようといふ考へをもつて居た。だから薩摩人にはひどく憎まれて居た。薩摩人ならば馬鹿でも愚鈍でも或は幾分氣違ひじみたものでも何でも許容するといふ流儀ではない。その態度が特に頑固な中世紀封建思想で固まつて居る一般薩摩人にはまつたく理解されなかつた。大久保が兎徒の兎刃に伏した明治十一年五月十四日の朝六時といふまだきに引見して、懇々と囁んで含めるやうに自分の政治的理想と實際的經綸とを説聽かせた福島縣令・山吉盛典は、もと米澤藩士であつた。山吉の後に福島

縣令となり、河野廣中の獄を惹起した三島通庸は薩摩人であつたが、あれも大久保が生きて居たら起らなかつたかも知れぬ。

山吉は米澤の藩士で、漢學の素養もあり、詩歌・文章・にも達して居た。大久保がどれほど山吉を信じ且つ用ひて居たかは確かでないが、あの時大久保の態度の親切であつたこと、眞面目であつたことから考へて、大久保が人を用ひる上にどんなに規範的であつたかといふことはよく分る。もし廢藩置縣以後に於ける政治家の合法的親分振りを示せといふことであれば、著者はまづ指を木戸と大久保とに屈したい。木戸亡き後の官界では、大久保が最もよくその模範を示して居る。

もちろん、大久保も薩摩人であつた。その政治家としての理想及び行實の上にはいふところがなかつたにしても、その性癖の上にはなほ幾多のいふべき點があつたものらしい。それは長州人のやうに打寬いで軽くさばけることの出来ぬ點であつた。常に莊重で、常に嚴肅で、相接する人を煙たがらせた。横濱の富貴樓が榮えたのは、横濱の外國商館の關係もあつたに違ひないが、東京には岩倉・大久保・が端然として控へて居り、京都の賀茂川縁や島原で、風流三昧を盡して來た長州の苦勞人たちが放心して遊ぶことが出来なかつたからだといふ觀察も成り立ち得る。もとより、花柳界の歴史など著者の畑ではないが、さういはれてみると、大久保が殺され、岩倉が薨じて後、横濱に榮えた大官・紳

商・のハレムが新橋に移された形もある。してみると、大久保は新橋・柳橋・の鬼門にあたつて居た人かも知れぬ。

第三章 説話 一束

井上馨大醉を借りて大久保を面罵す

大久保のどことなくさげぬ態度、野暮な不粹な態度は、やがて薩摩人特有のものであつた。しかもそれが一般には傲慢不遜と見えた。政治の上では徒らに中央の文飾を盛んにし、政府の威幅を張るものと誤解された。遊澤榮一の話に、大久保が岩倉に従つて外國に出掛ける時であつたか、歸つて来た時であつたか、とにかく大久保の邸で宴會があつて、大藏省の主なる役人が、みなその席に招ばれた。するとその席で井上が大醉を借りて大いに大久保を面罵した。

「なにか知らんが、あなたのやうに威張つて、つんどばかりして居るものに何が出来るものでない。仕事をしようと思つたら、その威張ることだけはおやめにしなければ駄目です。」

井上の官はその時大藏大輔で、大久保の次官であつたが、大醉を借りてひどく大久保を罵倒した。その威張るといふことは面白いことで、親分子分の関係を合理的に、規範的にしようとする型の人はずべてその部下から威張るといふ批評を受ける。會社の會計を胡麻化して部下にこつそり御馳走をしたり、規則にも先例にも頓着なく部下の御機嫌取りを専一としてその地位を保つて居る人は、決して威張るといふ批評を受けぬ。

諸君の會社、諸君のお店はどうですか。

大久保が登壇すると役所が墓場のやうに静まり返つた

大久保は、その容貌風采の上からも、人の近づき難い何ともいへぬ威嚴を具へて居た。體軀は痩せて鶴の如く、口髭も頬髭も漆のやうに黒かつた。殊にその左右に分れた美しい頬髭と、炯々として人を射る炬のやうな兩眼とは接するものに一見してその常人でないことを思はせるに十分であつた。口数は極めて少く、容易に可否の判断を下さなかつた。一たび口を開くと、言語簡勁にして莊重、對者の腹の底にまでも滲みわたるやうで、何人も自然に頭の下るのを覺えなかつたものだ。その役所の椅子に倚り、端然として事務を執つて居ると、廳内肅然として聲なく、さながら夜の墓地のやうに感ぜ

られた。大久保の馬車の響きは、當該役所の全吏員に對する何とも知れぬ一種の壓力であつた。大久保の馬車の轍が構内の砂利を噛み、その憂々たる靴の音が玄關に聞えると、屬僚たちは直にその雑談をやめ、笑聲を消し、廳内さながら水を打つた如く鎮まり返つた。

その頃、諸外國の公使達が何かの案件について日本政府に交渉があると、大方は威嚇と恫喝とで事を解決したものだ。しかしかれらの慣用手段も大久保に對してはまつたく無効であつた。かれらは大久保の室に通されて、その凜然たる風采態度に接すると、まづ自然の威嚴にうたれて、豫て胸中に描いて來た談判の趣意を半ば喪失してしまふのが常であつた。その時大久保から森嚴そのもののやうな中音で、

「どういふ御用ですか。」

と聽かれると、大抵のものは參つてしまつた。さうして用談もそこ／＼にして歸るのが常であつたさうだ。

佐々木高行と福地源一郎の大久保觀

佐々木高行が會て大久保の人となりの評して「大久保の官房にあつた煙草盆は、常に清潔を保つて

居た。これは訪問者が大久保の前で長話をしなかつた證である」といつた。さすがに面白いところに眼を着けたものである。何人も大久保の前に出ては長話をするものがなかつた。また煙草を喫むほどに打寛ぐことの出来るものもなかつた。「水清くして魚棲ます」といふが、大久保はたしかに涌立ての清冽な水のやうな性格の人であつた。

福地源一郎（櫻痴）が會て大久保の人物を評して「冷血」といつたのは、福地自身の爲人と對照して頗る面白い。福地はいつた「大久保侯は渾身これ政治家なり。凡そ政治家の資格として必要なる冷血を、多量にその脈管にたゝへたる、余は未だ侯の如きを視ざるなり。侯の顔色を望み、風采を仰ぐ毎に、余は恰も北洋の氷塊に遇ふが如き思ひをなしたれば、このことを鹽田三郎・小松齋治・君らに告げたるに、諸氏も亦同じ思ひをなすものなりといへり。その平常沈黙にして言語舉動を慎重にし、容易には笑顔を見せられたることなかりき。故に余は侯に用ひられ、侯に咫尺せること殆ど一年半の長きに涉れるに拘らず、よく侯の性情を洞察すること能はず。たま／＼伊藤伯の物語に依つてこれを推知するに止まりたるなり。且つや氣稟の相異なる、侯は常に余を冷眼視せられ、余も亦敢て勉めて侯の知を求めんとはせず、長・屬・の間にありながら、宛然疎遠の狀にてその日を送りたり」と。これで大久保のその部下に對して執つた態度、部下の大久保から受けた感じがどんなものであつたか

がよく分る。大久保は、公器を濫用し、官費を濫施して、親分子分の私的從屬關係に資さうとするやうな出來合の親分ではなかつた。

大久保はその内務卿であつた時、地方官を更迭せぬことを以てその施政上の原則とした。しかし大久保は、そのいづれの地方官に對しても同様に嚴肅であり、苟も愛憎好惡の情をその面にあらはさなかつた。福地の懐いて居たやうな冷たい氷塊といふ感じは、侯に接するすべての人が懐いたものだ。福地は江戸つ子ではないが幕臣で、江戸はかれの第二の故郷であり、その交遊は江戸人との間に多かつた。大久保とは正反對の通人であり粹人である。その大久保と氣の合はなかつたのも道理である。

高島鞆之助・千坂高雅・鮫島武之助の語る大久保の印象

大久保と同じ薩州人である高島鞆之助も、大久保に對して同じやうな所感を述べて居る。

「南州翁を訪うてその警咳に接した時には、心持がさつぱりとして胸が開け、何とも知れず愉快な心持になる。去つて甲東と話してみると、これはまた南洲と正反對に何とも知れぬ嚴肅な心持になる、さうして今まで楽しかつた春のやうな氣分も、忽ち消失せて寒嚴骨に徹する冬の思ひがする。」

これではいはゆる子分なるものは出來ぬ。大久保もまた子分をこしらへようとは微塵毛頭も考へて居なかつた。世の中にはいはゆる子分がなければ大きい仕事は出來ぬやうにいふ人もあるが、それは嘘だ。王政復古の仕事らしい仕事は、あましまし木戸と大久保とでやつてのけた。子分の多くつくやうな型の人は、何かしらするだらう。しかしその仕上げた仕事、遣したものが、必ずしも永く國家・社會を益するとはいへまい。

千坂高雅も大久保の人となりに關して面白いことをいつて居る。千坂は米澤藩の家老の子で、明治四年、藩主上杉氏に從つて英國に遊學し、六年歸朝して内務省に出仕し、大久保の下に使はれて居たものである。七年には内務省の權少書記官で居た。

「大久保の威望の高かつたことは、實に前代未聞といつてよかつた。われ／＼が内務省に出て見ると、卿が出て居られるか居られぬかなど尋ねて見る必要は少しもない。卿が居れば廳内がひっそり閑として水を打つたやうであるから、直ぐにそれと分つた。」

薩州人の鮫島武之助も同じやうなことをいつて居る。

「森有禮さんが公使として赴任を命ぜられた時のことであつた。築地の自邸に別離の宴が催されて、當時の顯官達が大抵その席に列した。時刻が近付くと客が追々に集まつて來て、話が自然女

遊びのことに及び、お互ひに素つ破抜きだの皮肉だのが出て興が漸く熟して來た。そこへ大久保さんが見えて上座に着かれると、今まで沸き返つて居た宴席は忽ちひつそりとして、如何にも眞面目なしんみりとした別宴となつた。自分はその頃年少でたま／＼森家に居合はせたが、この光景を見て、偉人の威力といふものはかやうなものかと深く感激した。その時のことを想ひ起すと未だに大久保さんに對する畏敬の念を新しくせずには居られぬ。』

冷厳でしかもよく人言を聞いた大久保

大久保は謹嚴で莊重で、長官として容易に可否の答へをしなかつた。部下の中にはそれで自分のいふことが果して大久保に分つたのか分らなかつたかを疑ふものも少くなかつた。しかし明治の政治家の中で、大久保ほど部下のいふことをよく聞いたものはなかつた。熊本の安場保和は、大久保に用ひられて、大藏省に居たことのある人である。横井小楠の門人で、由利の系統に屬して居たから、大藏省ではひどく井上・澁澤の一派と衝突した。この安場が大久保を評して、

『大久保さんに接してその端嚴な莊重な威容と、そのよく人言を傾聴して倦まなかつた熱心さを見ると、まるで大久保さんが二人居るやうであつた。一人の大久保さんは威儀端然たる大久保

さんで、他の一人の大久保さんは謙遜で、敬虔で、よく人言に耳を傾ける大久保さん、私はこの二人の大久保さんを見た。』

この安場保和の爲人を澁澤が批評したのを聴くと、漢學趣味の頑固一徹で、少しも話が分らなかつたもののやうにもあるが、大久保の二重人格を評したところなど、なか／＼近代風なところもあつたと察せられる。

板垣退助の遭難で世に知られた岐阜縣の縣令小崎利準が大久保を訪ねて、縣下の事情に關し熱心に具申するところがあつた時のことだ。大久保は威儀端然として傾聴し、時々頷いて見せるだけで、少しも可否の意見を挟まなかつたので、小崎たるもの張合ひのないこと一通りでない。一體大久保さんは、自分のいつたことをよく聴いてくれたのかどうかを疑はずには居られなかつた。翌日内務省に出頭して見ると、書記官がやつて來て一冊の覺書を小崎に渡し、

『小崎さん、昨日あなたから内務卿へお話になりましたことは、この要領でよろしうございませうか。一應御覽を願つて置けとのことでござりました。』

といつた。小崎が冊子を繰つて見ると、驚くべし、昨日自分が内務卿に具申したことの要領が一言一句の間違ひもなく正確に記述されて居る。小崎はまつたく驚いてしまつた。大久保の勉強、大久保

の慎重、概ねこの類であつた。

旅に出て話せば大久保にも慈父のやうな温情があつた

かくいふと、大久保は血も涙もない、まつたくの冷血動物であつたかのやうにも考へられるが、決してさうではなかつた。かれは國家の公署をもつてわが家とし、國家の公俸をもつてわが財としなかつたといふだけで、公務をほかにして對すれば、さながら慈父の如き態度をもつて諄々と處世の道を説き、公人としての心掛けを教へ、娓娓として倦むところを知らなかつた。大久保にも親分氣質はあつた。しかしその親分氣質は、まつたく規範的のものであつた。合法的なものであつた。星亨や、原敬や、もつとその下の層にころ／＼轉つて居るいはゆる親分ではなかつた。少しく大久保の合法的親分振りを書いてみることにしよう。

これは大久保が岩倉大使の副として歐米に差遣せられた時のことである。福地源一郎(櫻痴)も大久保に従つて洋行し、ロンドンの客舎に在りてその職務を辨じて居た。明治六年二月といへば、もう大久保の歸朝する直前である。福地は公務で大久保の室へ伺候し、職務を了へて後、少しく雑談に耽つた。その時、どういふ機みであつたか、福地が大久保に向つていつた。

「私は、あなたが私を信じて下さらぬといふことをよく知つて居ます。私はあなたとまつたく正反對の氣質である。私は物事に行當ると直に自分の意見を吐く。あなたのやうに深思熟慮の後にその意見を發表するといふことをしません。即智をもつて自分の得意と致して居ります。あなたが私を信じて下さらぬのは、この私の得意とする即智があなたにお氣に召さぬからであります。私はあなたのお氣に入るやうにする骨をよく心得て居ります。公務を處理するに當つては、まづあなたの御意見を伺ひ、あなたから御諮問のあるのを待つて、初めて自分の意見を申上げるやうにすればそれでよいのです。かやうにしてあなたと私の意見の合致することが數回にも及びますれば、あなたも必ず私を信じて下さるに相違ありません。」

福地といふ男もなか／＼の才物で、大久保の肚の裡を見透したやうなことをいつた。おれはお前とは天性うまが合はぬのだ。おれはお前のやうな人に強つて用ひて貰はずともよい。だが、どうすればお前の氣に入るかぐらゐのことは分らぬおれでないぞといふところを見せたのだ。旅といふものはよいものだ。人間は旅に出ると一種何とも知れぬ打ち寛いだ氣分になる。福地も大久保が本省の椅子に端然として腰を下して居る時にこれだけのことがいへたかどうか、それは疑問である。深窓の令嬢も温泉宿に泊まれば、平氣で男と混浴する氣になる。思量することの出來ぬものは旅の氣分だ、旅の功

徳だ。大久保はにつこり笑つた。この笑ひがまだ背て見られなかつた笑ひだ。

『まったくその通りだ。お前はそれほどよくわしの心持を知つて居ながら、どうしてわしの氣に入るやうにせぬのだ。』

福地はこゝぞと昂然といつてのけた。

『そこです。即智は私の天性です。私はこの天から與へられた性質を枉げてまでも、あなたのお氣に召すやうにしようとは思ひません。』

福地がかくいつた時、大久保ははじめて襟を正して平生の大久保に復つた。さうしていつた。

『それはいかん、天性必ずしも正しいものではない。天性を矯め直し、鍛へ上げてこそ人間だ。君はすでに政治家として立つべく官途に足を踏み入れて居る。君が官途に望みを絶つならば別問題ぢやが、苟も官途に入つて政治家となるつもりならば、屬僚の分としてその長官の信用を得るといふことを第一として心掛けねばならぬ。それも道理に背き、正義に悖つてまでも長官に媚び諂へといふのではない。道理に従つて自分を矯め、正義に基いて自分を鍛へるに何の疚しいところがあるか。君は年も若く前途の多い人ぢや。今から才に誇り、智に驕るの弊を矯めて、深思熟慮の習慣を養ふがよい。それでないと、國家の器となることは難かしい。あたら才氣をもちなが

ら、一生を轡轡不遇に終るであらう、戒しむべきぢや。』

大久保は懇々として説いた。福地は深く大久保の親切に感じた。公務の上では氷塊のやうに冷たい人であるが、私交の上では慈父のやうに温かい人であると、心からその人物に推服した。しかし、かれは大久保の忠告に従つて、その才を誇り、能に任することを慎しんだかどうか、晩年はひどく淋しいものであつた。

渡邊國武を留めて慈母の如く諭した大久保内務卿

渡邊國武も、大久保の私人としての温情を深く感じて居た一人であつた。名東縣(阿波)を廢して高知縣に合併した時、渡邊國武が縣令として赴任する前、大久保に會つて、元來土佐と阿波とは四國の脊梁山脈によつて隔てられ、人情も風俗もまるで違つて居る。この兩國を合して一縣とし、同じ管轄の下に置くといふことは、そも／＼政府の方針が間違つて居ると説いて、その不可を論じてみたが、大久保は辭色冷然として少しく動く様子がない。

『それはさうかも知れぬが、一旦御發表になつたことであるから、とても御評議にはなりませんま

大久保が、それは御評議になりますまい、といつたらそれこそ最後の決答で、何人の力をもつてしてもそれを動かすことは難かしい。渡邊は誰よりもその呼吸をよく容込んで居たので、それ以上無意義に大久保を説かうとはしなかつた。かれは直にその陣形を建直していつた。

『よろしうございます。それなら私はこれから赴任して、難かしいことではあるが、土佐と阿波との統一といふことを目標として政治を進めます。しかし元來が無理なことであるから、必ず近い内に猛烈な分離運動が起りませう。それで政府の御評議が變つて突然分離といふことになりましては私は立つ瀬がありません。もし分離になりますやうならば、何人よりも先に私へお漏らし下さい。少くとも一年か半年か前に私にお洩らし願ひたい。』

大久保はその時、その面にはじめて微かな會心の色を湛へて、

『よろしい。よく分りました。如何なる場合でも、あなたと御相談なしには断じて分離いたしません。』

大久保のこの一諾は、實に千鈞の重みがあつた。その點では地方官がみな大久保を信じて居た。冷たい、取りつき難い人ではあるが、一旦承知したとなると、どんな事情が起つても、前約を無視してその部下に熱湯を吞ませるやうなことはしなかつた。生きて居る間は、威張るとか、専斷的だとか、

種々の非難もあつたが、死んでみると、誰にも彼にも沁々大久保の有難さが分つた。渡邊がいよいよ赴任しようとする、大久保は一夕渡邊を留めて、慈母のその愛兒を持つやうな温かさでいつた。

『今度土佐の縣令には肥後の大田黒をはじめ二・三・のの人に話してみたが、みな危んで行かうといふものがない。それをあなたが引受けて行つてくれるといふのは有難い。實に國家の幸ひだ。しかしあなたはまだ三十になるかならぬかの血氣盛りだ。縣令として赴任した上は、その血氣を慎んで、よほど重厚な態度をとらぬといくまい。私などもあなたぐらゐの年には、すむぶん無法突飛なことばかりやつて來たものだが、世間の人といふものは、また實に途法もないことをいふものだ。英艦が鹿兒島を砲撃した時のことだが、私は偵察のため倉の屋根に登つて沖合を見て居ると、折柄の雨で足を滑らし、どうと尻餅をついて轉がつた。するとそれを見て居た人たちは、大久保は平生過激突飛な議論をするが、いざとなると意氣地がない。イギリスの軍艦を見て腰を抜かしたといひ觸らしたものだ。私はそれでたいへん迷惑をしたことがある。世間といふものはさうしたものだ。何事も深沈重厚の態度をとつて、縣民の依頼心を一身に集めるやうにしなればならぬ。』

打ち寛ぐと、大久保は誰に對してもこんな優しい態度で接した。大久保の時代には政黨といふもの

がなく、地方官や属僚を上手に統御して、それ／＼その能を發揮させることが、政治家の務めであつた。立憲制以前の日本では、大久保が合法的な大親分の標本的なものであつたといつてよい。

第二篇 島津家と近衛家

第一章 薩摩國の歴史

縦の官職層と横の身分層

よく世間の人が、大久保利通は西郷隆盛と一緒に薩摩藩の下士層から出たといふことを口にす。それに相違ない。しかしその下士層といふことを厳密に穿鑿立して行くと、事がさほど容易でなくなる。成る程大久保の家も西郷の家も薩摩藩の士分としては下層に班するものであつたことに相違はないが、その下層といふのは、官職上の階層を意味し、身分上の階層を意味したのではなかつた。徳川時代、二百六十餘大名といはれたうち、大藩には大抵「下士」と呼ばれたものがあつて、「上士」との間に嚴重な身分の壁を隔てて居たものだ。その下士層の發生した原因及び稱呼となると、各藩の間

に多少の相違はあつたが、概していへば同じものであつた。

これを實際に即していふと、土佐藩では下士層を『下士』とも『輕格』ともいひ、上士層のことを『上士』とも『士格』とも呼び、一般には『遠州附』などいふ呼名も行はれて居た。長藩にも『仲間』と呼ばれる下士層があり『士分』と截然その身分を異にして居た。すなはち封建時代は、一概に『階級制度の世の中』であるといはれて居るが、その階級制度に二つの種類があつたことは、苟も深く立入つて維新史を研究しようとするほどの人であれば、はつきりと辨別して置く必要がある。すなはち一つの階層は官職の序列であり、他の一つの階層は身分の差別である。いま假に官職の階層を縦の階層とするならば、身分の階層は横の階層にあたる性質のものである。縦の階層、すなはち官職の階層とは何であるか。これを一つの會社に譬へていふならば、上は社長から下は小使・雑仕婦・に至るまでそれ／＼の職分があり、配屬があつて、整然たる序列を作つて居る。これと同じやうに、徳川時代に於ける各藩にも官職の階層があつて、上は一門・家老・から下は徒士・與力・の輩に至るまで統屬するところがあり、整然たる序列を作つて居たものだ。しかしながら、この官職上の階層に縦の序列であつて、徳川氏の封建制度といふものが、各藩の場合にしても、中央政府の場合にしても、若しこの縦の序列だけで成立つて居るものであつたならば、今日の社會制度と何の相違もなかつたわけである。世

の中がどんなに進歩しても、またどんなに發展しても、人々の才智・技能・に應ずる官職上の階層の抹殺されることは斷じてあり得べきでない。世の中が若し完全に官職上の階層だけで成立つて居るものであるならば、給仕・雑役夫・の如き低き地位に置かれたものも、その才智・力量・に應じ、或は勉強・努力・により課長・局長・の高きに拔擢せられ、時に或は社長にまで出世することも出来るわけだ。ところが、徳川時代には、各藩にも、中央政府にも、縦の階層すなはち官職上の階層のほかに横の階層すなはち身分上の階層が儼存して、身分上の下士として班せられたものは、如何に才智・力備・があつても、また如何に勉強・努力・の功を積んでも、上士の世襲に屬する官職の序列に入ることは斷じて許されなかつた。そこに封建時代と明治以降の御代との間に根本的の相違が横つて居るわけだ。

門閥制度を親の敵と喝破した福澤諭吉

この身分層の制度は舊中津藩(奥平家)のやうな比較的由緒の新しい小藩にもかなり嚴重に行はれて居たものと見え、福澤諭吉は、その不朽の名著と評價されて居る『福翁自傳』一卷を通じ、最も力強くその不合理を衝いて居る。『福翁自傳』の素晴しさは、これを單なる自傳文學として見ても立派な

世界的文獻の一つであることは確かだ。この自傳が世界的文獻の一つとして讀へられるまでに多くの讀者を惹きつけることの出來た強い力は何であるか。それこそは著者・福澤の封建的身分層に對する熱烈なる反抗の意氣と精神とである。すなはち全卷が『私は毎度此事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して、獨り泣くことがあります。私の爲めに門閥制度は親の敵で御座る』の精神を以て一貫されて居るからだ。讀者は『福翁自傳』により、徳川時代を通じ、各藩の内部組織として行はれて居た身分層制度が、どんなに無慈悲な、またどんなに不合理なものであつたかを如實に知ることが出来る。しかしそれが官職の序列でなく、身分の差別であつたといふことを學問的に知るためには、同じ著者の『舊藩情』に據ることを必要とする。福澤論吉の『舊藩情』の中には、どういふことが書いてあるかといふと、福澤自身の出身地である舊中津藩に於いて、藩士が上下二つの身分層に分れて居たことを事實について詳細に説明したものである。福澤は、その身分層が何に由來するものであるかといふところまでは、考證の筆を及ぼして居らぬけれども、この層が嚴重な身分の相違に基いて定められた世襲的差別待遇であることを明かにし、立身出世もその身分の範圍内に於いては許されたけれども、身分の牆を越えては許されなかつたといふことを、格式とか、俸祿とか、言語・風俗・とかいふ部門について手に取る如く明瞭に解説して居る。

そればかりでない。福澤は、かやうな上士と下士との間に於ける身分の甚だしい懸隔は、ひとり中津藩ばかりでなく、各藩ともに齊しくあつたことで、上士層の下士層に對する必要を越えた理由なき侮辱と凌虐とは、産業の進歩とともに下士層の經濟的實力が加はつて行くにつれて、上士層に對する反抗となつて現はれて居たことまでも説明して居る。

唯一つの例外であつた薩摩藩の身分層制度

しからば、徳川時代に於ける各藩のかやうな身分層制度が何に由來して居るかを考へて見るに、その大部分が室町幕府の末期に始まつて慶長・元和の統一に至る前後約五十年の久しきに亙る戦亂によつて生じたためまぐるしい大名淘汰を経て、その存立を全うすることを得た各藩が、或は征服され、或は撃滅されて滅亡した諸侯の亡命者を吸収して、嚴重な身分的差別待遇の下に、その家臣の列に並したことに始まるといつて差支へなからう。

東西古今を問はず、征服した民族は征服された民族を政治的に、また經濟的に支配する鍵を握る。だから征服した民族、すなはち勝利者は血統上(身分上)の貴族であると同時に、政治上・經濟上・の貴族でもある。ところが、日本のやうに建國以來一度も異民族の征服を受けたことのない民族とな

ると、千年或は二千年といふ悠久な歳月を経る間に、その身分の本質が上下ともに幾たびも變つてしまふ。それでは身分上の差別なるものは全然消滅するかといふに、決してさうでない。國內に政治的權力の大移動が起ると、そのたび毎に次から次へと新しい身分層が発生して行く。將來永久に發生して行くものかどうかは斷言出来ぬが、少くともこれまでのところは發生して居る。もちろん、國內に於ける政權の移動に基く新身分層の發生は、異民族間の征服關係によつて生起するものほど深刻なものではない。しかし、官職上の序列ほどゆるやかなものでないことは、前掲福澤の自傳を讀んで見ても、また『舊藩情』を讀んで見てもよく分ることだ。

この新しい身分層制度は源頼朝の統一事業によつても生じて居るし、室町幕府末期の亂離状態に對して行はれた織・豊・徳・三氏の統一事業によつても生じて居る。しかも、さうした政治的變動によつて生じた新しい支配者の身分が、大陸諸國の歴史に於いて見るやうな異民族間の恐ろしい虐殺と凌辱との渦卷の中から發生した身分ほどに深刻なものでなかつたことはいふまでもない。しかし、大臣と次官、次官と局長、局長と課長との間に見るほど寛大なものであり得なかつたことも確かだ。すでに述べた如く、徳川時代に於ける各藩の身分層すなはち上士と下士との差別は、この著者の研究に従へば、その大部分が室町幕府末期の亂離状態から、慶長・元和の統一に至る凡そ百五十年間の大名淘

汰によつて生じたものだ。しからは、全國各藩に於ける身分層發生の原因が全部それであつたかといふに、必ずしもさうでない。或る特殊の事情によつてその發生の原因がもつと遠く且つ深い所にあるものもあつた。その最も著しいものが本傳の主人公・大久保利通を生んだ薩摩藩の事情である。薩摩藩に身分層の發生したのは、遠く鎌倉時代の初期にあつたことが確かである。各藩の身分層制度が室町幕府末期の亂離状態から、慶長・元和の統一に至る約百五十年間の大名淘汰に基因して居るのに、薩摩藩に於ける身分層制度の發生は、それよりも更に二百八・九・十年を遡る鎌倉幕府の初期にあつた。これだけでも薩摩藩が日本で特殊の國であつたといふことがよく分る。

傳説の霧に包まれた島津家の鼻祖・惟宗・忠久の素性

すなはち、薩摩藩が徳川幕府の支配下に於いて占めて居た政治上・經濟上の特種地位を知るには、遠く鎌倉幕府草創の時代に遡り、島津家の鼻祖・島津忠久の入國事情から研究してかゝる必要がある。島津忠久と源頼朝との關係・島津忠久と近衛基通との關係は、全く傳説の霧に包まれた世界のことであつて、如何なる歴史家もはつきりとその真相を掴むことは出来ない。その傳説によると、島津忠久は源頼朝の庶出子である。頼朝に七人の男兒があつて、その中の一人（一説に二人、その長が忠久と

ある)が比企判官能員の妹・丹後の局の産むところであつたとある。初め丹後の局が身籠つた時、頼朝が深く嫡室・政子の妬忌を懼れ、治承三年、兄・能員に旨を含め、丹後の局を縦たなちて難を京都に避けさせた。傳説によると、局は鎌倉を去つて行く／＼攝津の國なる住吉神社のほとりに達した時、日が暮れて、宿を附近の民家に乞ひ求めたけれども許されなかつた。已むを得ず社側によりて一夜を明かすうちに、俄かに産氣づき、産み落したのが後に薩摩・大隅・日向・三箇國の太守となつた島津忠久であつたとある。

傳説は更に語る。忠久が住吉神社のほとりで呱呱の聲を揚げた翌朝、たま／＼近衛基通の同社參詣のことがあり、母子の難遊する様を見て深くこれを憐み、京都に具し歸つてくはしくその素姓を訊ねた後、直にその顛末を具し、鎌倉なる頼朝の許に知らせた。頼朝すなはち、使を遣はして基通にその好意を謝し、且つ生兒に三郎と命名した。丹後の局は忠久を産み落した後、八文字民部大輔・惟宗廣言に嫁した。三郎も隨つて養はれて惟宗氏を冒した。

この邊から漸く傳説の霧が霽れて、歴史の領域となる。文治元年六月、三郎七歳にして鎌倉に下り、頼朝に初めて鶴ヶ岡に謁見した。畠山重忠が頼朝の命を受けて元服を加へ、忠久と名乗らせ、左兵衛少尉に補し、鳩作りの刀を授け、伊勢國須賀の御庄・波出御厨のの地頭職に任じた。同年八月には島

津御庄の下司職に任ぜられ、翌文治二年一月には信濃國鹽田の庄の地頭職に補し、ついで島津御庄の總地頭職に陞あめられた。こゝに島津の御庄といふは、日向國北諸縣郡都城附近の諸村を本地とする日・隅・薩・三州に散在の屬地數千町歩を併せた墾田の名稱である。事は後一條天皇の萬壽中、平季基が無主の荒蕪地を開墾して、これを宇治關白・藤原頼通に寄進し、請うてその庄衛を設け、自らその庄司に任じ、公家の權勢・威望・を負うて私福を専らにしたのに始まる。この頃から惟宗忠久は島津氏を稱するやうになつた。

源頼朝が鎌倉幕府の草創に際し、最も苦心したことは、從來藤原政權及び六波羅政權(平民)を支持した最も主要な財源であつた坊ノ津を咽喉とする西海一圓の唐物税及び島津御庄によつて代表せられるやうな九州に於ける大莊園の所有權を、どうして平穩裡に手際よく接收するかといふことにあつたに相違ない。その庶出子・島津忠久を島津の御庄に封じ、薩・隅・日・三箇國の守護職に補したのは、九州に於ける如上重要な經濟力を鎌倉幕府の手に接收するために費したかれの苦心が尋常一様のものでなかつたことを證し得て餘りあるものだ。

文治二年八月、忠久は薩摩國に入り、出水郡山門院に木牟禮城を築いてこれに據り、幾許もなく關東から畠山重忠の女を迎へて正室とした。翌三年九月には更めて薩摩・大隅・日向・三箇國の守護職

に補せられ、十文字の家紋・十文字の刀・等を授けられた。

文治五年二月、頼朝が奥州の藤原泰衡を討伐した時、忠久も畠山重忠とともにその先鋒を承つて居る。この時頼朝は重忠に書を下し、陣ヶ原に宿營して、忠久の保護に當らせて居る。奥・羽・が平定した後、忠久は更に若狭國の守護職をも命ぜられ、建仁三年九月には比企能員の事に坐して、一旦薩・隅・日・三箇國の守護職を罷められたが、幾もなく舊に復した。建暦三年五月、和田義盛が叛いた時には、忠久九州から馳せ參じて軍功があり、五月、甲斐國波賀利の新庄を加増されて居る。建保六年、薩摩國滿家院に花尾權現社を建てて、父・頼朝・母・丹後の局を祀つた。承久三年五月には忠久更に信濃國太田庄の地頭職に兼補せられ、六月、正式に惟宗氏を改めて藤原氏を稱した。七月、また越前の守護職を拜し、二男・忠綱を守護代として差遣した。嘉祿元年、大夫判官に補し、從五位下に敘し、ついで豊後守に任ぜられた。安貞元年六月十八日、四十九歳で鎌倉にみまかつた。

鎌倉以來日本唯一の封建的治外法權國であつた薩摩國

前項に述べた紀傳の如き、近衛家と島津家との思料し難い親密な關係を何とかして正史と結付けて説明しようとしたもので、まだ／＼罪の軽い方だ。甚だしいのになると、住吉祠畔の場面に狐が登場

したり、島津忠久が實は近衛基通の落胤であつたりする。もとより取るに足らぬ俗説ではあるが、これで、古來近衛家と島津家との間に結ばれて來た、殆ど大びらな、しかも尋常以上の親善關係を、何とか學者めかして説明しようとした徳川時代の歴史家の苦心がしのばれるわけだ。

頼朝殞落の後、源氏の政權は幾もなく北條氏の手に移つた。北條氏の政權は九代の後、足利氏に移つた。足利氏の政權は更に十五代の後、織田氏の手に移つた。織田氏勤王の大業が中道にして挫折した後は、豊臣氏がその志を繼いで立つたが、その殞落とともに、政權は更に徳川氏の手に歸した。かやうに頼朝に始まつた武門政權は、鹽廻しにどし／＼各氏の間之交委されて行つたけれども、如何なる政權の支配下にありても、島津家の地位に變動はなく、また近衛家の地位にも異狀は起らず、近衛家と島津家との親密な關係は、依然忠久對基通以來の舊誼を持續して、今日に至るまで聊かの渝るところを見ない。これは日本歴史の上で頗る重大な研究問題だ。この投出された國史上の一大懸案に對して、われ／＼のまづ考へなければならぬことは、歴代の武門政權にとつて九州の治安がその死活を決する最も重大案件であつたといふことだ。九州の治安に失敗しては、如何なる政權もその生命の永續を期し難い。平氏も九州に遁れてその陣容を建直さうとしたが、範頼のために途を遮られて、壇ノ浦に族滅した。平氏没落の後、頼朝の最も苦心した仕事は、九州の整理であつた。殊にその新たに設

置すべき守護・地頭・と攝家との關係であつた。その頼朝の政治を手本とし、頼朝の遺徳を一身に負うて起つた足利氏も、一旦九州に通込んでその陣容を建直すことに成功した。秀吉の苦心も九州を蕩平してその徳を島津家の上に遺すことにあつた。ついで興つた徳川政權の鬼門も九州であつた。他の諸大名と公卿との關係には、江戸幕府の眼も、京都所司代の眼も、隨分鋭敏に働いたものであるが、近衛家と島津家との關係に對しては、全く見て見ぬ振りであつた。それは維新史をよく讀んで見れば誰にもよく分ることだ。安政の大獄から文久維新にかけて、徳川幕府が諸大名と諸公家との關係に對して執つた監察振りを、島津家と近衛家との關係に對して執つた監察振りと比べて見れば、誰でも直ぐに氣づくことだ。

第二章 薩摩藩の内部組織

薩摩藩に於ける三つの身分層

以上述べ來つたところによつて明かである如く、日本全國二百六十餘藩の制度・組織・が大部分室

町幕府の末期から徳川幕府の初期(慶長・元和・)にかけて生成發展しつゝあつた近代的貨幣經濟の基礎の上に置かれて居たにも拘らず、たゞ薩摩一藩だけはその制度・組織・が鎌倉時代の莊園經濟の上に置かれて居たわけだ。莊園經濟、いひかへれば土地及びその土地に附いた農奴を土臺として生成した原始的(地方分権的)封建制度である。隨つて二百六十餘の多きを數ふる全國各藩の制度・組織・と、薩摩藩の制度・組織・との間には、歴史の上で約四・五・百年の距りがあつたわけだ。だから、一概に明治維新は各藩下土層の仕事であつたといはれて居るが、薩摩藩の下土層と、薩摩藩を除く全國各藩の下土層との間には本質的の相違があつた。

織・豊・時代を経て徳川時代に入ると、全國各藩は、漸次新しく興つた貨幣經濟に應ずる政治組織を整へ、凡そ武士といふ武士は、高きも低きも擧げて藩主の城下に集中せられ、その主人から分配を受けた領土及び領土に附いた農民とは殆ど何等の利害關係もない、一種の俸給生活者と化し去つて居たにも拘らず、薩摩一藩だけは、依然鎌倉時代の莊園經濟に應ずる社會制度及び政治組織を維持し、曾て守護・地頭・と呼ばれた時代の土著制度が殆どそのままに行はれて居た。

薩摩藩はかやうな鎌倉時代の莊園經濟、すなはち武士の土著制度を土臺として、その家來を三つの身分層に分けてた。次の三者がそれである。

(一) 城下の士

(二) 城外の士(外城の士と稱へ、また外城を都城につくる)

(三) 卒及び陪臣

さて、しからば薩摩藩に、どうしてこの三つの身分層が生成したかといふに、これは多分、前に述べた島津氏の入國に際し、鎌倉から譜第の家來として島津氏に隨身して來たものと、島津氏の入國以前から薩摩・大隅・日向・三箇國に蟠居して居た豪族で、長い激しい闘争を経た後、島津氏に屈服歸順したものとの相違に基くのではなかつたかと想像せられる。諸書の傳ふところを綜合していふと、前記三箇國に互り、その各地方に割據した豪族中、最も優勢であつたものが、梅北氏・肝屬氏・仁禮氏・矢上氏・北原氏・税所氏・などであつたらしい。城下の士と城外の士との身分の相違は、この邊から起つたものではないかと考へられる。さすれば、たとひ島津氏入國の初期には、大きい距りがあつたにしても、その身分層の發生した由來は、土佐藩に於ける遠州附(上士層)と長曾我部黨(下士層)との關係に全く同じであつたわけだ。しかも、薩藩城外の士の生活様式に鎌倉時代の色彩の著しく濃厚であるのは、その島津氏との從屬關係が鎌倉時代に始まつて居るものではなくして何であらう。次に薩藩に於ける上掲三つの身分層がどういふ生活様式をとつて居たかといふことのざつと

した説明をして置くことが必要だ。

(一) 城下の士 この階層に屬する士流は、その總數凡そ六千人ほどで、みな鹿兒島の城下に居住し、直接藩主の任命をうけてそれらの職務に従事して居た。同じく城下の士と呼ばれたもの間にも、その身分に上・下・貴・賤の差別のあつたことはもちろんであるが、その藩主に直屬し、その身分・家柄に應じて、それらの職務に従事して居たところを見ると、これが島津氏譜第の家來であつたといふことは容易に判斷せられる。

(二) 城外の士 城外の士は外城の士ともいひ、また都城の士にもつくる。總數凡そ六萬二千人、一つの外城に約三百人づつ聚落して農業に従事して居た。その藩主から承認をうけた土地とともに、土地に著いて居る百姓すなはち農奴を私有し、平素は自らも犁・鋤をとつて農業に従事して居るが、一旦事あるの日は、藩主の催促に應じ、武装して鹿兒島の城下に馳せ參じた。この生活様式は『いざ鎌倉』といふ言葉が今も遺つて居るのでよく分る一般鎌倉武士の士著生活と全く同じであつた。

(三) 卒及び陪臣 これは三階層の中で身分の最も卑しいものに屬した。その士著の生活様式は城外の士と全く同じで、平素は農を業とし、一旦事あるの日は足輕として各自の主人に付き、島津氏に對しては陪臣の關係に立つて、戦場の部署に就いたものである。總數凡そ三萬餘人と稱へられた。

かやうに薩藩の士流は大體に於いて三つの身分層に分れて居たが、その各階層が更に幾つもの官職層に分れ、幕末に及ぶと、その間に頗る複雑な利害關係が発生し、随つて或は思想問題の形式により、或は主家の繼嗣問題を中心とし、或はまた尊王か佐幕かの論議をめぐつて、火の出るやうな黨争を續けて居たものだ。

薩摩藩で上士層の特權であつた八層の官職

前掲三種の身分層中、鹿兒島の城下に居住し、その官職（多くの場合世襲）に應じてそれらの部署に就き、直接藩公に奉仕することの出来たものは、第一階層に屬する『城下の士』のみであつた。すなはち薩藩に於ける上・下・一切の官職は、悉く第一階層すなはち城下の士の特權に屬して居たものである。

薩藩に於ける官職層は、概して八つに分れて居た。但しこの分け方は薩藩に限つた分け方であつてたとひその本質は同じであつたにしても、全國各藩それ／＼その範疇と稱呼とを異にして居た。いま薩藩に於ける八つの官職層を表示すると、次の如きものとなる。

城下の士（島津氏の譜第）

(1)	一	門
(2)	一	所
(3)	寄	合
(4)	小	番
(5)	新	番
(6)	小	組
(7)	興	力
(8)	興	力

王政維新の隨一の功臣として推され、その賞典に於いて藩主の上に置かれた西郷隆盛は、この八階層の中の第七階層、すなはち、小姓組の家から出たものであつた。小姓組は幕臣の範疇からいふと、いはゆる徒士で、士の末流に位するものであつた。西郷と並んで薩藩の雙璧と呼ばれ、明治政府草創の元勳として、威望赫々たりし本篇の主人公・大久保利通も、また西郷と同じ小姓組の出で、西郷の家とは一・二・町距てた鹿兒島城下の加治屋町に生れたものである。さうして有村俊齋（海江田信義）、吉井幸輔（友實）、伊地知龍右衛門（正治）、税所長藏（篤）、大山格之助（綱良）、等、薩藩に於ける尊王討幕運動の中堅として奮起した同志は、概して西郷・大久保・兩人と同じく上士層末班の出であつた。

初對面て劈頭勝に一喝せられた西郷隆盛

前にも述べた通り、明治維新は一般に薩・長・土・三藩の下士層が聯盟・提携・して成し遂げた仕事であつたといはれて居る。これは、これまでの維新史の通念とさへなつて來て居る事實だ。しかしながら、この通念の中になほ精密な辨識を要する問題の含まれて居ることは、この編をこゝまで讀んで來られた讀者には、すでによくお分りになつて居ることと思ふ。すなはち、一概に薩・長・土・三藩の下士層といはれるものの中、ねばり強く、長・土・二藩の下士層と折衝し、公・武・合體主義で固まりきつて居た藩主及びそれをめぐる重役層を引ずつて、岩倉具視を中心とする舉兵討幕計畫に合流させた西郷・大久保・有村・吉井・伊地知・税所・大山(綱良)等の諸士は、官職上の下士ではあつたが、身分上の下士ではなかつた。

これを要するに、西郷にしても、大久保にしても、官職は卑かつたに違ひないが、身分は一所持・寄合・小番・などいはれた上士と何の變るところもなく、戦場の功でもあれば、いつでも、さうした階層にまで取立てられることの出来る家柄の出であつた。また家國非常の場合には、隨分主君を代表する使者ともなつて幕府の執政とも、參政とも、面談の出来る身分であつた。兵庫・生田の森なる勝

海舟の海軍所で、西郷と勝とが初めて對面をした時、勝は西郷に向ひ、

『拙者はこれ幕臣の最下層に屬するものであつて、この天下の非常時にも身分の墻に支へられ、閣老^らどいふ人には、如何なる場合にも、對面して直接に時局を論じ、國策を獻することは出来ない地位に置かれて居る。(註)しかるにあなた方の背後には、島津公といふものがあつて光つて居る。いつでも島津公の御使者といへば、閣老も引見して、その獻策に耳を傾けなければならぬ筈だ。いま時何をまご／＼しておいでなさるか。拙者かもしれないあなた方の立場に居れば、もうとくに閣老に對面して、大いに時局を談じ、國策を獻じて居る。』

と喝破して、まづ西郷の肚臍をぬいたといふことである。これは、勝の門弟として兩雄の初對面を物蔭から窺ひ、萬一の場合にそなへて居た陸奥宗光の實話である。陸奥のこの懷濟談によつても知られる通り、大久保や西郷は、もし藩主が破格の拔擢を以て命すれば、いつでも使者として閣老に面接し、大いに時局を論じ、國策を獻することの出来る身分であつたわけだ。

(註) 幕府が身分の墻壁を撤廢して、人材の爲に言路を開いたのは、慶喜が鳥羽・伏見の一戦に敗れ、大阪から軍艦・開陽丸に乗込んで江戸城に竄入し、泥繩式に四部制の政治機構を立ててから後のことだ。勝が陸軍總裁の資格で、直接將軍に面謁して物のいへたのは、將軍が慶應四年一月六日大阪を脱出してから、四月四日東海鎮撫使の先鋒が江戸城に入らるまで、僅に三箇月足らずの間のことであつたわけだ。お芝居を見

て日本歴史を研究して居る人もあるやうだから、ちよつと注意をして置く。

五八

薩藩の下士は何故長藩及び土藩の下士と反が

合はなかつたか

だから長藩の下士層と、土藩の下士層とは、いつでも隔意なく打とけて、計畫の遂行・時局の收拾、その他につき折衝を重ねて居るが、長・土・兩藩の下士層は、そのいづれもが薩藩のいはゆる下士層に對して完全な諒解を遂げることがむづかしかつた。坂本龍馬と中岡慎太郎(迂山)との奔走によつて辛うじて成立した薩・長・聯盟にしても、薩藩側の氣分が、長藩側の氣分と何かしらそぐはぬところがあるために、幾たび決裂を見んとしたか分らぬほどだ。しかもそれが、すべて薩藩側下士層(實は上士層)の氣位があまりにも高すぎることに基因して居ることは、少しく維新史の表裏に通ずるものひとしく認めるところであらう。現に木戸(桂)などは、薩藩の傲慢な、しかも煮えきらぬ態度に腹を立て、幾たびか交渉を打切らうとして居る。

かやうに薩藩のいはゆる下士層が、長・土・兩藩の下士層と肌合ひかねた半面には、自藩の重役層(上士層)とは極めて容易に一致することの出來た事實のあつたことを見逃してはならぬ。長州下士層

の俗論黨征伐はあまりにも明かな下士層維新であり、土藩に於ける野根山の獄またあまりにも明白な上士層の下士層尅殺であつたにも拘らず、薩藩の内部には断じてさうした相尅關係が起つて居ない。長・土・兩藩に於ける上士層と下士層との對立は、紛れもない一種の階級闘争であつた。身分の相尅であつた。しかし、薩藩の内部に於けるいはゆる上士層と下士層との對立は、同一身分階層内の利害の衝突であつて、一種の御家騒動であり、朋黨比周であり、學閥争ひであつた。薩藩内部の黨争に對し、上士・下士・のことばを用ふるのは、そもく誤解の生ずる元であつて、著者としては成るべくこれを避けることに努めたいと思ふ。しかし、從來の慣例に従ひ、便宜上或る場合にはこれを踏襲することもあらうが、その場合は、薩藩に關する限り、身分の上下を意味するのではなく、官職の上下を意味するのであるといふことを知つて置いて戴きたい。

第三章 薩摩藩内部組織の革新運動から日本國

内部組織の革新運動へ

徳川時代に頻發した御家騒動中の最大傑作

五九

薩藩に於ける上士と下士との利害の衝突は、由來久しいものであつたが、その表面に現はれた最初の事件は、藩主・齊興の寵妾・お遊羅の方からむ御家騒動であつた。

この御家騒動は、世が世なれば、仙臺・筑前・越後・等各藩の間に頻發した御家騒動と同じく、尾緒をつけて講釋師の張扇で叩き伸ばされ、かれらの飯の種となつてしまつたに相違なかつたのだが、それが幕末に於ける國家の超非常時局を前に見て發破し、實質上藩内の政策上の争ひでもあり、思想上の争ひでもあり、延いては佐幕主義と尊王主義との對立を促す重大な原因となつたために、伊達騒動・黒田騒動・越後騒動・と同列に講釋師の張扇で勝手に叩き伸ばされ、叩き曲げられることだけは免れて居る。この騒動は、人も知る如く、國家老・島津將曹しまつを始めとし、調所笑左衛門・吉利伸・伊集院平・二階堂靜馬・などといふ同藩の門閥家が相謀つて、藩主・齊興の嫡子・齊彬の家督を廢し、寵妾・お遊羅の方の腹である普之進かしのと(久光)を立てようとしたことから起つたものである。

この騒動の起つた時、世子・齊彬はすでに四十一歳であつたが、久光派の支吾によりまだ齊興から家督を譲られては居なかつた。しかし、その天稟の將器である重厚篤實の資質と、穩健著實の進歩主義的意見とは、幕府の閣老間に信賴頗る篤く、藩の内外を擧げてこの人の公・武・合體主義的國策指導力に傾倒するといふ有様であつたが、齊興は久光派の策謀に制せられて、容易にその家督を譲らう

とはせず、天下の輿望を空しくしつゝあつた次第であつた。こゝに久光派といふのは、國家老・島津將曹を首領と戴く重役層及びそれに追隨する一派で、齊興の寵妾・お遊羅の方と結んで、齊彬の家督を廢し、庶子・普之進かしのとの嗣立を企てたものである。そも／＼島津將曹等の一派が、齊彬の進歩主義的意見を危険視し、その聰明叡智を以て島津家の安泰に害ありと見たのは、その由來するところ頗る遠く、且つその根基するところの甚だ深いものがあつた。將曹一派は主として重役層である。さらぬだに薩摩は邊陲の地にあり、遠く鎌倉幕府以來、中央政府の政令の外に超立して、いはゆる「他國もの」の越境を嚴重に警戒し、従つて、他藩との間に行はるべき通商・貿易の門戸を鎖し、嚴重に鎌倉以來の自給自足制度を維持して來たものであるから、その士流は剛健林茂でもあり、原穀擊實でもあつたには相違ないが、井蛙の十海を知らず、壺中に在るものの壺形を解せざるとひとしく、日本全國の文明の流れ、人心の動きといふやうなことにかけては全く盲目であつた。薩藩のためにこの宿弊を見て取つたものは、二十五代の英主・島津重豪しげたかであつた。かれは薩藩の文化を日本の各藩と駢馳せしめ、薩藩の經濟力を日本の各藩と平行せしめんがために、幾百年來の傳統政策である薩摩の鎖國主義を棄て、貨幣經濟に基調する新しい近代的都市文化を薩摩に導入して、大いにわが藩の人心を開發し、經濟力を増さうと企てたものだ。かやうな進歩主義的政策は、純然たる農奴層の實質をもつて居た水吞

百姓や、農奴層以上の卑賤階層として取扱はれて居た町人や、武士の最下層に班せられて居た卒及び陪臣にとつては、大なる恩恵であつたに相違ないが、實際上鎌倉時代以来の地頭であり、農奴の産出する農作物を唯一の収入として生活を立て、その富の力を持って藩内に幅をきかせ、諸武士の上に臨んで居た重役層にとつては恐ろしい脅威であつたに相違ない。そこで薩藩には、二十五代の英主・重豪の時から、薩摩の開國・進歩・主義を是とする江戸・大阪・詰の諸役人と、これを非とする國元重役層との間に、激しい黨争が生じ、それが延いて藩校・造士館の教課問題に波及し、大正・昭和の交に見た大學騒動に似た紛擾を惹起したことさへあつた。しかるに、齊彬の進歩主義は、正しくその曾祖父にあたる二十五代・重豪の思想を源流とするものであつて、藩地の百姓・町人・若しくは卒及び陪臣層には非常に歓迎されたけれども、島津將曹一派の守舊派、すなはち重役層には事毎に支吾せられ、排斥せられて居たものだ。さてこそ齊興の頽齡に及ぶにつれて、世子廢嫡運動が火の手を揚げ、その勢焰を昂めつゝあつた次第であつた。

島津家に於ける革新派と現状維持派との經濟政策上並に 思想闘争上の對立

島津將曹等、守舊派の世子廢嫡運動に反對して奮起したものは、江戸家老の島津壹岐・物頭の赤山頼負・鹿兒島奉行、近藤隆左衛門等で、これに和漢の學者として知られた高崎五郎右衛門(温恭)を始め國學者で京都藩邸の留守居を勤め、幕王の志の篤かつた山田市郎左衛門(清安)・中村忠左衛門・土持泰助・大久保次右衛門・山口不及・山内作次郎・脇岡五太夫・有馬一郎・奈良原助左衛門、松川龍阿彌・關勇助・有川十右衛門・等が加擔し、島津將曹・調所笑左衛門・等の頑迷重役層を除いて世子・齊彬の地位を絶對安泰のものにしようと企てた。これら改革派の中、高崎五郎右衛門が後の御歌所、所長・高崎正風の父であり、大久保次右衛門が本書の主人公・大久保利通の父であつたことはいふまでもあるまい。以上述ぶるところによつて明かなる如く、薩藩の御家騒動は、單なる家督争ひでなく、薩藩そのもののために行はれた開國主義、すなはち商業立國主義と、鎖國主義、すなはち農業立國主義との争ひであり、江戸家老及び大阪・京都の留守役は前者を主張し、國家老及びそれに追隨する頑迷固陋の保守主義者は後者を支持し、一般の下士層は殆ど舉つて前者に加擔したものである。

この御家騒動は、世子・齊彬を支持する改革主義者があまりにその功を急ぎ、保守主義者の暗殺を企てたために、かへつてかれらの乗ずるところとなり、島津壹岐・島津清太夫・を始めとして、高崎・近藤・山田・中村・土持の七人は切腹を命ぜられ、大久保・山口・山内・脇岡等は流刑に、有馬

・奈良原・杉山・關・有川・等は蟄居謹慎を命ぜられて、全く革新主義者の收斂に移つたけれども、その壯烈な革新主義・進歩主義・の精神は、當時まだ二十三歳の青年で、赤山靱負からその悲痛淋漓なる切腹間際の教訓を聞いた西郷や、二十歳で父・次右衛門と生別の哀苦を嘗めた大久保を、大に發奮興起させたものだ。この時から西郷と大久保とは、その先輩達の志を繼いで、隠然下士層の子弟を結束し、英主・齊彬のために、その穩健なる革新主義・進歩主義・の陣頭に立つて戦ふこととなつたのであつた。かくて島津將曹一派の頑迷な保守主義者は、島津壹岐一派の革新主義者を一網打盡して、完全に一時の勝を制することが出来たが、この時に當り、世子・齊彬が閼老・阿部伊勢守正弘から受けて居た信頼は非常なもので、藩主・齊興は忽ち將軍家の干涉に遭つてその地位を退き、世子・齊彬に家督を相續させねばならぬこととなつた。さうして島津將曹一派の頑迷固陋な保守主義者が當然その勢力を失墜しなければならぬ時が來た。

島津家・近衛家・及び徳川家の血統的三角關係

すでに島津家の鼻祖・忠久が、後鳥羽院の建久年間、薩摩・大隅・日向・三箇國の守護職として入國した前後の事情を物語つたくだりで詳しく述べて置いたやうに、島津家は、その初代から近衛家との

間に血統上及び經濟上の最も緊密な關係があつた。前に島津家二十五代の英主としてその治績を擧げて置いた重豪の時には、その女・篤姫が一橋家の世子・家齊に嫁し、ついで家齊が入つて十一代將軍となることとなると、篤姫は更めて右大臣・近衛經照の養女となり、表向に輿入をして將軍の御臺所に直つて居る。また齊彬の祖母、すなはち齊宣の正室も家齊の女である。降つて安政三年、將軍・家定の御臺所が薨して、その繼室を迎へることになると、閼老・阿部伊勢守正弘は、豫て互に深く肝膽相照して居た齊彬と謀つて、島津氏の一門・島津安藝の女・篤姫を近衛家の養女に直して本丸に入れたので、將軍家と島津家とは重ね重ねの姻戚となり、阿部の公・武・合體主義的經綸は、薩摩藩を中心として、水戸老公・齊昭・越前侯・松平慶永(春嶽)・尾張侯・徳川慶勝・肥前侯・鍋島閑叟・筑前侯・黒田長溥・土佐侯・山内容堂・宇和嶋侯・伊達宗城・等、諸藩主の隔意なき支持を得て、著々その歩武を固めて行きつた。

殊にこの時に當り、阿部正弘の經綸に大なる希望あらしめたものは、薩摩侯・齊彬が前に述べた如き稀に見る重厚篤實の英主であつた上に、その穩健著實なる進歩主義的識見が嶄然時流を抜いて居たことであつた。かれはかくして幕府の信頼と期待とを一身に負うて居た傍ら、近衛家を通じて朝廷に接近し、折に觸れ事につけて、物質的にも、精神的にも、怠りなく勤王の志を寄せ參らせ、孝明天皇

からも深大の御信任を受けて居た。かくして齊彬は天下の諸侯に率先して朝府と幕府との楔となり、時局は實に薩藩を中心として何の故障もなく進展して居たのである。すなはち外交問題を如何に處理すべきかといふ一事に關しては、閣老・阿部伊勢守と水戸老公との間に尙ほ多大の距離があり、必ずしも意見の一致を見たわけではなかつたのであるが、阿部の公・武・合體主義といふことについては、この八大諸侯間に完全に意見の一致を見て居たのである。前記八大諸侯に閣老・阿部伊勢守を加へて當時の人が九明侯と稱へた。長州侯・毛利慶親(敬親)はこの中に數へられなかつたけれども、その天下屈指の大諸侯たる利害關係から推して考へても、誰に遠慮も氣兼ねも要らぬ無責任な浪人者や、徒士・足輕・輩と組んで輕々に尊王討幕論の先鋒として起つなど思ひも及ばぬことで、その公・武・合體論に不賛成でなかつたことは、後にその長臣・長井雅樂といふものを江戸に上せ、安藤信正・久世廣周・かど、時の閣老の間に説かせたことによつてもそれと知られる。たゞ幕府でも阿部正弘が世を去り、薩藩では齊彬が死に、霸氣滿々たる久光がその子・茂久(忠義)に後見として薩藩の實權を掌握してからは、各藩との關係がとかく圓滑を缺き、延いて薩・長・の間に激烈な競争を惹起し、果は元治元年六月、禁闕九門の衝突となつて、薩州は一時會津の友藩となり、幕府反動政治の爪牙たらんとするの奇觀をさへ呈したのであつた。

第三篇 西郷・大久保・兩雄の生立及びその 維新史への登場

第一章 大久保家の格式及び甲東の少年時代

鹿兒島城下なる甲突川東岸一劃の下士長屋

諺に「英雄、英雄を知る」といはれて居るが、まことにその通りだ。勝海舟が、慶應三年、幕末の形勢を書いた手記の中に、いま上國にありて各藩の事を執るものを見るに、

薩藩 西郷吉之助(隆盛)・大久保市藏(利通)・伊治地正治・吉井幸輔(友實)・村田新八・中村

半二郎(桐野利秋)・小松帯刀(清廉)・税所長藏(篤)

萩藩 桂小五郎(木戸孝允)・廣澤兵助(眞臣)・伊藤俊輔(博文)・井上聞多(馨)・山縣狂介(有朋)

・前原一誠・山田市之丞(顯義)

高知藩 後藤象二郎・板垣退助

佐賀藩 副島二郎(種臣)・大木民平(喬任)・江藤新平・大隈八太郎(重信)

以上數輩に過ぎない。但しこの中で、いよく大事を決するといふ場合に立至り、指導者の地位に立つて歴史を作るものは、西郷・大久保・及び桂の三人で、他は或はこれを翼賛し、或はこれを輔佐するの器であるに過ぎまいといふ意味のことがいつてある。勝の炯眼は、まことに金的の鬮星を貫き、後に維新の三傑と呼ばれたものの働きを事前に豫言して誤らなかつたのであつた。しかもこの三傑の中、西郷と大久保との二人が、鹿児島市の西を流るゝ甲突川のほとりに劃定された加治屋町と呼ぶ下士長屋から生れ、王政復古・明治維新の大舞臺に、轡を並べて華々しく躍出したのは、まことに奇觀といつてよい。こゝに下士といつたのは、前に詳しく述べて置いた、薩藩に於ける官職上のそれをいふのであつて、決して長藩や土藩に於けると同じ身分上の下士ではなかつた。すなはち、西郷の家も、大久保の家も、これを鹿児島市の城下に居住することを許されなかつた本格的の下士、すなはち外城じやうの士から見ると、歴たる上士の階層に班するものであつて、風雲一會、生命の重きに接すれば、どんな樞要な地位・役柄・にも収立てられることの出来る身分・家柄・であつたことは、こゝでいまい度讀者の注意を促して置く必要がある。

加治屋町の三崎童

大久保利通は、幼名を正助といひ、後に市藏(また一藏に作る)と改め、最後に利通と稱した。その號を甲東といつたのは、甲突川の東岸に人と成つたことから起つたものである。遠祖は藤原氏、父は次右衛門、世々薩藩の士格であつた。甲東は、南洲に後るゝこと四年、天保元年八月十日を以て前記加治屋町に呱呱の聲を揚げた。父・次右衛門は、諱を利世といひ、子老と號した。母は蘭醫、皆吉風徳の二女、富久と呼んだ。父・次右衛門は、琉球館の附役を命ぜられ、禪學に參し、氣概のある士であつたから、お遊羅騷動の場合には、いふまでもなく齊彬公の擁護派に與し、一黨が一網打盡されて義に逸る高崎五郎右衛門以下の士が切腹を命ぜられた時には、次右衛門もまた沖ノ永良部島えらぶじまに流謫された。切腹を命ぜられたものに次いでその情の重かつたことがわかる。

大久保の家は、上士層中の下層に班し、家計も裕かではなかつたので、少年時代、十分の教育を受けることは出来なかつたが、薩藩ではもとより城下の士に重きを置き、その子弟の教養には相當力を入れて居たので、南洲も、甲東も、その家柄の低く、家計の困難であつた割合には、比較的高い文武の教養を受くことが出来た。南洲の家と甲東の家とは僅かに一・二町を隔てた同じ加治屋町の中に

あつたので、まだ前髪を垂れて居た時代から日夕互に相往來し、長沼嘉兵衛と併せて町内の三時童を以て稱せられたほど、その氣品・性行・が他の群童と異り、人々の注目を惹いて居たものだ。この三時童の中、長沼嘉兵衛の夭折したのは惜しむべきことで、もし天壽を全うしたならば、維新の三傑或は維新の四傑であつたかも知れり難いといふ人さへあつたほどだ。

大久保甲東の素養

甲東や、長じて後は、吉井幸輔・有村俊齋・伊治地龍右衛門・税所長藏・大山格之助・等と深く交り、互ひに相許す仲となつた。この中で、西郷・有村・及び甲東・の三人は、當時天下の正學として一般に弘通して居た朱子學よりも、むしろ好んで陽明學に心を馳せ、伊藤猛右衛門に就いて『近思錄』もしくは『傳習錄』等の疑義を質し、また無參和尙に參して禪學の妙諦を修めた。人も知る如く、朱子學と陽明學とは、もと宋學といふ一つの幹から岐れた二つの太い枝であつて、必ずしもその哲學的根柢を異にして居たといふわけではなかつた。たゞ朱子學が格物致知を建前とし、森羅萬象、有らゆる事物を究明し、體得して、その中から道を見出すべしとするのに對し、陽明學は、精神の修養を第一義とし、各自にそなはる良智の力を修養鍊成することにより、大悟一番、天地の眞理を一氣に把握

し、これを實行に移すべしとするにあり、その趣意が全く禪學とその根柢を同じくするものがあつた。南洲といひ、甲東といひ、その持つて生れた性格は個々であり、隨つてその行實の上にも全く相反するところがあつたやうに打見られるものの、その生涯を通じて常に生死を超越し、一身の安危を度外して、その主義、その理念の前に猛進する膽力と氣魄とのあつたことは全く同じで、その修養が兩人とも、年少禪門に參し、陽明學に學んで鍊成し得た良智の力によつたものであることは、何人も異議のないところであらう。

齊彬の襲封と筑前侯の兩童推薦

かくて、甲東は弘化年間十七・八・歳で藩の御記録所書役に取立てられた。ところが、この役儀は嘉永三年、父・次右衛門が高崎五郎右衛門の獄に連累し、沖ノ永良部島に流謫となつたために、召上げられて、全く流罪人の遺族として暗い、冷たい歲月を送らねばならぬ身の上となつた。甲東この時二十一歳であつた。かれが冷厳深沈、時に或は血も涙もない人であるかにさへ見られた特殊の性格は、その天稟に出たこと、もちろんであつたとはいへ、かうしてかれの青春の情熱を奪ひ去つた長い、陰慘な生活が、何ほどかかれを驅つてその境地に立至らしめたこと、疑ふべくもない。かやうにして、か

れは極めて冷靜嚴肅の人と成つた。愼思熟慮の人と成つた。いかなる場合にあつても昂奮せず、激動せず、焦燥せず、妄信しない。常に事物の表裏を觀察する最も鋭い批評家であり、機に應じ變に處して苟も拘泥せず、大局を遠觀して、舉措必ず當を失せざる最も偉大な政治家であつた。従つて、南洲の如きも、事物の本質を把握し、時局の大勢を遠觀する力に於いては、到底甲東の敵でなく、一藩の籌畫に於いても、天下の經綸に於いても、常に甲東の意見に従ひ、その指導の下に歩を運んだ形が多分にある。

いはゆるお遊羅騒動のち、一藩を擧げて上・下・互ひに相疑ひ、朋輩互ひに相隔て、形勢の轉た暗澹たるものがあつた時だ。甲東はその同志と謀つて、藩侯の親戚にあたる福岡藩主・黒田長薄によつて君側の奸を一掃し、世子・齊彬のために謀つてその正當の家督權を擁護すべき運動を起した。この運動は、幸ひにして大いに黒田侯の同情を贏ち得たばかりでなく、前にも述べて置いた通り、當時幕府の中樞勢力であつた阿部伊勢守正弘を始め、水戸老公等みな齊彬の重厚篤實な人となり傾倒し、その穩健著實な時局の指導方針に推服して居た際として、甲東等の目的は、その翌嘉永四年一月を以て見事に貫徹せられ、薩藩二十七代の主・島津齊興の引退とともに、世子・齊彬はめでたくその封を襲つたのであつた。齊彬の襲封と同時に、南洲・甲東・等の重用さるべきは蓋し自然の順序である。黒田

長薄は書を齊彬に寄せ、言を盡して南洲及び甲東の人物を稱揚し、これを登用してその經綸に參畫せしむべきを薦めた。甲東はその父・次右衛門が沖ノ永良部島に流謫された時、年僅かに二十一歳で、父に代り三人の妹を養つて行かねばならぬ悲惨な境涯に置かれた。役は罷められる、迫害は来る、殆どその日その日の食ひものにさへ困つた。同じやうに困つては居たが、西郷家の方にはまだ幾分ゆとりがあつたので、甲東は時に或は西郷の家に押しかけて行つて、一飯の馳走に與つたこともあつたからであつた。

南洲出仕直後の過失、甲東最初の出遊

高崎一派に對する斷獄のあつた時、西郷は僅かに二十三歳であつたが、かれはその年の暮に近い一日、銃を肩にして山に入り、あなたこなたと獲物を索めつゝ別け行く内、一匹の野猪に遭つて見事にこれを仕止めた。ところが、その時日はすでに西山に没し、山路の暗きこと一寸先も分らぬほどで、流石のかれも全く途方に暮れ、枯木を集めて焚火をし、その明りを頼りに歸途を急ぐのであつたが、かれはその地域が藩の禁獵地であつたことば何も知らなかつた。さうしてかれは藩の禁獵地を犯した上に放火の大罪までも重ねたこととなり、藩廳に喚出されて大島に流謫の斷罪を受けたのであつた。

これより先、南洲は十五歳で郡方の書役を拜命し、筆刀織かにその口を糊して居たのであつたが、ここに至つて遽にその朋友・甲東と地を顛倒し、大島の片ほとりなる西の磯といふところに、形ばかりの小屋を結び、朝夕茫洋たる海波を眺めつゝ、功名の念ひに燃ゆる青春の血を、豫て習ひ覺えた坐禪の修養にやつて、纔にその胸中閤々の情を打消さねばならぬ惨めな境遇に置かれたのであつた。

甲東は黒田侯の推薦を俟つまでなく、豫てその胸中深く藏して居た藩政改革案を、文書に認めて藩主・齋彬の許に呈出し、その嘉納するところとなり、間もなく徒目附として御召出になつた。これが安政五年一月のことで、甲東時に二十九歳、齋彬はその襲封した時が四十三歳、この時が五十歳であつた。これより先、大久保一家は、齋彬が襲封した安政元年七月を以てその罪を赦され、翌安政二年三月には、父次右衛門も沖ノ永良部島(鬼界ヶ島)から喚戻された。これより先、大島に流謫中であつた西郷南洲が赦されて鹿兒島に歸つたのは、齋彬の襲封した嘉永四年十一月のことであつたが、安政四年十月には西郷が藩命で初めて上方に上ることがあつたので、大久保も同行して熊本に赴き、長岡監物と會つて天下の形勢につきいろ／＼と聽くところがあつた。これが甲東の足を藩外に踏出した最初で、甲東二十八歳の時であつた。間もなく藩主・齋彬東上することがあり、南洲はこれに扈從して江戸に入つたが、この時こゝに齋彬の襲封で根を絶つことの出来なかつた御家騒動の餘燼が又ぞろ焦臭い煙

を揚げて來た。それは藩主・齋彬の子といふ子が、悉く天折して定まる世子の無いのを理由とし、一時聲を潜めて居たお遊羅黨が、再び久光を擁立して薩藩二十九代の藩主たらしめようとする陰謀を凝らし始めたことであつた。

島津家お家騒動の再燃

齋彬の聰明叡智はすでに世に隠れなく、夙に水戸派の志士とも深くその志を通はせて居たので、一方に關老・阿部伊勢守正弘の厚き信頼があつたとはいへ、若し形勢が一變すれば幕府から一敵國として睨まれる危険は十分にあつたわけであつた。そこがお遊羅黨の附込むところで、かれらは頻りに小刀細工を弄し、老公・齋興の心を動かし、齋彬の引退を早からしめようとして劃策したのであつた。

この時、水戸に居た有村俊齋(海江田信義)及び西郷南洲等は、この陰謀を聞くと大いに憤慨した。藩公は尙ほ壯齡にて在はする。今日何の必要があつてその世嗣の問題などを議に上すか。かれらの奸策こそ斷じて粉碎しなければならぬといふのが、その一致した意見であつた。有村・西郷等は、これを機會として藩内に鬱積して來た悪氣流を一掃し、奸佞邪智の徒を剿滅するに若かずとし、こゝに再び高崎・赤山・等一黨の直接行動が蒸し返されたのであつた。この時にあたり、たま／＼有村俊

齋が藩命を帯びて歸藩を命ぜられたのを好機とし、西郷はこれに託し藩地にある大久保と膠合せ、東西一時に事を擧ぐべきを謀つた。甲東はこの時有村・西郷・等の同志と行を共にせず、尙ほ薩摩に錢つて居たのであつたが、有村が歸藩して早々甲東と密室に會し、南洲から託された大事を打明けてその同意を求められると、甲東は沈吟やゝこれを久しうした後、容をあらためてきつぱりと言切つた。

『おいは不同意だ』有村はいふまでもなく大久保が一議に及ばず南洲の提案に賛成して來るものと信じ切つて居たので、甲東のこの反對には全く意外の感に打たれざるを得なかつた。有村が語氣鋭く詰寄つてその理由を質すと、甲東は泰然自若として徐ろに答へるのであつた。

『今日、藩の内外に充滿して居る空氣を察すると、最も愼まなければならぬのは左様な輕舉ちや。』

と答へ、滔々として幕府内部の情勢から、藩内に鬱積して居るお遊羅黨の勢力について述べた後、飽くまでも隱忍持重を主張して、聊かも動ずの色がない。そこで有村は甲東の氣先を轉換させるために話頭を轉じて一旦その席を立ち、夜を徹して甲東の説服策を考へたが、どうも名案が浮ばぬ。とつおいつ苦心の末、漸く案出したのが、藩士の歸依篤き祖廟・大忠公の御神籤をとつて事を決するの策であつた。

大久保持重して有村・西郷の勸誘に應ぜず

當時薩藩では何か藩士の去就進退に迷ふやうな大事件に遭遇すると、大忠公の祖廟に詣でて神裁に問ひ、これを神聖犯すべからざるの聖斷として奉行するの習慣があつたので、有村は翌朝東天の尙ほ白み切らぬ比、弟・雄助を伴ひ、大忠公の靈廟に參詣して、神官から御神籤を請ひ受けた。果然御神籤は有村の策を可とするの意を示した。かれは勇躍して直ちに甲東の居を訪れ、大忠公の神裁を楯として熱烈に斬奸の急を叫んだ。

しかるに甲東は依然として頭を縦に振らない。御神籤の示すところは、大體に於いてよしといふに止まり、その事の前後を決し緩急を計るのは、これを人間の良智に訴へ、人事を盡した後でなければならぬ。『おいは何としてもおはん達の輕舉に與することは出来ぬ』といひ放ち、飽くまでも同意しない。流石の有村も、甲東のこの冷嚴な態度にはいたくその感情を害し、『もうよろしい。おはんはおいどもの朋友でもない、同志でもない』といひ放ち、席を蹴立て、去つた。大久保が事の利害を察し成否を計るに聰明で、しかもその所見を守るに強硬なる概ねこの類で、後に西郷との間に到底近寄ることの出来ぬ深い溝渠を生じ、兩雄相尅するの悲劇を生んだのも、その原因は畢竟この邊にあつたわけ

だ。もとより聰明叡智の藩主、齋彬が有村・西郷等の輕舉に與すべき道理がない。かれは嚴に有村・西郷・一派の妄動を戒飭し、御家騒動の禍根を根絶する策として急速に久光の子・茂久(後の忠義)を養つて嗣子とした。この明君の名策が實行に移されて未だ半歳ならざるに、齋彬は病んで俄に殞落し、中央の政情もまた急變して、井伊掃部頭直弼が阿部伊勢守正弘に代つて閣老の地位に就き、嚴峻苛辣なる鐵血政治の大鉈を眞向上段から振りかぶり、安政の大獄はその親藩であると、譜第であると、將た又外藩であるとを問はず、苟も尊王攘夷を口にする志士・浪人・と何ほどかの關係をもつたものの上に、寸分の假借もなしに打下されたのであつた。この戰慄すべき安政の大獄も、薩摩藩と近衛家との間に結ばれて來た五百年にわたる姻戚關係及び幕府と島津家との間に結ばれて來た重ね重ねの姻戚關係に對しては、何ほどか遠慮會釋せねばならぬところがあつたに違ひない。それにも拘らず西郷南洲はこの大獄の網に驅立てられて、その身を置くにところなく、僧・月照と相抱いて薩摩潟の波に投ずるのやむを得ざる窮地にさへ陥つたのであつた。

甲東の冷靜な見通しは、心憎いばかり時局の圖星をさした。救上げられて大島に配流された西郷が二度の憂き月日を絶海の荒磯に送り迎へする間こそ、幾回幾轉の難局を経て鍛冶され、鍊成されて來た大久保の冷嚴な人格と明哲な叡智との役立つべき新しい局面が展開して來た。新藩主・忠義に後見

として立つた後見・久光と近衛忠熙との固き提携になる文久維新の大舞臺がそれであつた。

第二章 大久保利通の青年時代

大久保を中心とする革新派青年の脱藩聯盟成る

薩藩二十數代の君主中、空前の明主と仰がれ、幕末宇内の重望をその双肩に負うて立つて居た齋彬が、その滿腔の經綸を超非常時國家の上に施すに遑なくして遽かに殞落すると、藩内の人心は又も擧つて慌しい疑懼の色を呈して來た。時は安政大獄の眞最中で、各藩の志士及びそれと關係のあつた浪人で、少しでも尊・攘・主義の色彩ありと認められたものは、慈悲も容赦もなく片端から羅織されて居たし、内には先々代・齊興以來、幕府盲從主義を固執して、一途に家國の無事・無難・をのみ冀ふ島津將曹一派の現状維持派があり、齊彬の卒去を奇貨措くべしとして、齊彬取立の革新派に對する返撃の態勢を顯著にして來るものがあつたので、藩内革新派は手を拱いてかれらのために乗ぜられるのを待つわけに行かなかつた。さしも沈勇剛毅の大久保甲東も、この時ばかりは焦燥の色が濃く、この上は遂

逖徒らに日を曠くしてかれらの毒手の身邊に加へらるるを待たずともなく、奮然脱藩して天外浮浪の客となり、誰に遠慮も氣兼ねいらぬ自由の立場に立つて、君國の爲に盡すべしとの決意を固むるに至つたのであつた。

前にも述べた通り、甲東は、西郷と有村とが江戸に在つて同志を語らひ、藩内の現状維持派に對し高崎・赤山等の遺志をついで直接行動に出ようとしたのに對し、大にその輕舉を戒めはしたものの、もとこれ肝膽相照らした同志の間柄である。その根本の主義・思想に至つては毫末の相違もあらう筈がない。甲東がこの期に及び一歩進んで、西郷・有村等の急進主義者に接近し、脱藩を決意するに至つたのは寧ろ當然の歸趨であつたといふべきだ。すなはち甲東は、まづその決意を有村に告げ、同志とともに急遽京都に馳上つて、關下に伏奏し、討幕の勅命を請ひ得てその勤王の宿志を貫徹するの途に出づべき旨を語つた。有村は、いふまでもなく雙手を擧げて賛成した。奈良原喜左衛門・仁禮平助(景徳)・江夏蘇助・奈良原幸五郎(繁)・税所長藏・高崎五六・有馬新七・大山格之助・樺山愛次郎・橋口壯助・伊地知龍右衛門・森山桃園・村田新八・兒玉雄一郎・有村雄助・岩下佐次右衛門・有村次左衛門・吉中仲助・樺山三圓・吉井仁左衛門等約百名が立ちどころに甲東を中心とする脱藩同盟に馳せ加はつた。かくて甲東は、これら同志の中核に居て、着々脱藩の準備を整へ、特にその運動費の

調達につとめるのであつた。當時薩摩藩に森山桃園と呼ぶ素封家があつて、最も熱心な革新主義者の一人であつた。かれは常にいつた。自分が平生金穀を貯蓄して儉素自ら持するのは、一旦國家有事の日に備へんがためである。もし皇家の御大事に報ずるためといへば、産を傾け家を虚くするもまた惜しむところはないと。すなはち大久保から運動費調達の相談をうくるに及び、欣然としてその需めに應じ、約百名に上る同志のために、その兵站部の任を引受けてくれた。同志はこの報に接すると、いづれも聲を吞んで快哉を叫び、腕を扼してその進發の機會を待つのであつた。

誓紙にもひとしき藩主側の慰留書

この切迫した情勢は幾もなく後見・久光の知るところとなつた。久光は情報に接して大いに驚き、その小姓役・兒玉雄一郎に茂久の小姓役・谷村小吉を添へて、次のやうな密書を甲東等一味に傳へた。方今世上一統動搖不容易時節にて、萬一時變到來之節者、順聖院様(齊彬)御深志を貫き、爲國家可抽忠勤心得に候。各有志の面々深く相心得國家の柱石に相立、我等の不肖を輔け、不汚國名、誠忠を盡吳候様偏に頼存候。仍て如件。(※は著者註)

安政六巳未十一月五日

誠忠士面々へ

この親書に接した甲東の恐懼は察するに餘りある。なぜかといへば、封建時代の格式からいつて、一藩の主君及び後見職から、臣下それも藩士中官職上最下層に班する面々に對し、かやうな優渥な誓詞にも似た親書を賜はるといふことは、全く前例のないことであつたと思はれる。まづこの親書を吟味するに「順聖院様御深志を貫き」云々とあるのは、新主・茂久とその後見・久光とが、今後執行すべき國政の大方針を、先代・齊彬の經綸に置いて、聊かも違背あるまじき旨の誓詞に當つて居るのである。また「各有志の面々深く相心得國家の柱石に相立、我等の不肖を輔け」云々とあるのは、大藩の主君としては如何にも謙虚な申され分で、心あるものの眼を以て讀めば、恐懼身を措くところなき程の文字であること必定だ。殊にその宛名に、「誠忠士面々へ」とあるのは、君主側が脱藩聯盟の誠忠を十分に認め、その壯烈な志圖を嘉納されて居ることが昭々として明徴されるので、この御親書に接して、まづ襟を正し頭を下げたものは發頭人の大久保甲東であつた。ところが、約百人に上る同志の面々は、いづれも年少血氣の逸男である。すでに兵站の用意が整ひ、大事を決する瀬戸際に立つて

は、いまさらその志を譲すべくもない。大久保の血を吐くやうな説得にも拘らず、かれらは藩主の慰撫を手ぬるしとして、いつかな甲東の説諭に服せず、喧々囂々、明日にも京都に向つて進發すべしと意氣込んだ。これには甲東も大いに手古摺り、遂には勵聲一番、

脱藩の發頭人は斯く申す大久保だ。かかる優渥なる御説にも拘らず、藩主の意に逆つて遮二無二にその初志を貫徹しようとするのは、今となつては事甚だ没義道となつた。その故に、自分は姑く諸君の隱忍を求め、時機の到來を待つべしといふのぢや。斯くまで事理をわけての御諭旨にも拘らず、何としても聽容られぬといふならば、まづこの大久保の首を刎ねてから事を決行して貰はう。

と叱咤した。この一喝に遭つて、さしも血氣に逸る面々も漸く冷靜に歸し、脱藩の擧を思ひ留まつたのであつたが、如何なる危急の場合にも常に深沈莊重にして、苟も大局の見通しを誤らず、臨機應變、宜しきを制し得ることこそ、甲東の生涯を通じての獨壇場であつた。

久光の斷乎たる決意を看破した大久保の聰明

甲東が、薩藩の實際上の主權者である久光の最も深厚な信頼を博するに至つたのは、この前後から

のことと思はれる。もし主君側のかやうな優渥な慰撫・戒飭にも拘らず、血氣に逸る面々が押して脱藩しようとしたならば、もとより高邁剛毅の久光である。そこにはそれ相應の用意があつたであらうし、後に伏見寺田屋の二階を朱に染めて、一藩の規律のあるところを示された有名な椿事は、すでにこの時を以て發破して居たものに相違あるまい。優渥・懇篤を極めた主君の慰諭・戒飭の後ろに儼然たる一藩の規律を守る節刀の光の潜んで居たことを看破したのは、さすがに甲東であつた。

甲東の脱藩聯盟は、久光の慰諭・戒飭に遇つて解散したが、かれは決して根柢からその志を變へたものではなかつた。その後、甲東はしばしば久光に進言して、その入浴の氣運を促進せんとし、或る時は税所長藏の兄・吉祥院によつて密書を久光に致し、また或る時は名を挿花に託して、海江田信義をその側近に薦むるなど、畫策するところ頗る多かつたが、久光は時機尙早として受付けなかつた。だが、甲東はこんなことで追々久光からその人物・力量を知られ、間もなく小納戸役に拔擢せられ、ついで側役に進み、藩政の機務に參畫する地歩を築くことが出来た。

第四篇 文久維新と大久保利通

第一章 南洲・甲東の兩雄駢馳して維新史に登場

久光驪然島津將曹一派の現状維持派を卻く

萬延元年三月三日、大老・井伊直弼が水戸浪士の襲撃をうけて、櫻田門外に横死してから後は、幕府の威令が最早諸侯の間に行はれない。直弼の後には、安藤對馬守信正・久世大和守廣周の兩人が代つて幕政の樞機に任じ、國家空前の難局を打開して行くこととなつたが、天下の諸侯はもとより、諸士・諸浪人に至るまで、全くその内兜を見透し、何人の眼にも、將軍政治の斷末魔が、刻々に迫り來りつゝあることが感知せられるのであつた。

久光もさすがに人傑あつた。かれがその子・茂久の後見として起ち、内には大久保甲東等革新派の

青年を慰諭してその脱藩の企圖を抑制し、外には幕府に對し、深くその公・武・合體的經綸を韜晦して、井伊の鋭い檢察の眼を避けて居たのであつたが、井伊横死の後にはもはやその公・武・合體主義の積極的經綸を韜晦して居る必要はない。既に親書を以て大久保甲東を首腦とする革新派の青年約百人の脱藩を抑制した行掛りもあり、長・土・兩藩下士階層の緊密な提携による進出に對處する必要もあり、まづその手始めとして島津將曹一派の守舊派を薩藩の政機線上から驅逐した。實をいふと、島津將曹一派の守舊派はこれまで久光により井伊の強力政治に對する風よけとしてのみ利用されて居たわけだ。しかるに井伊が横死し、その役目が時效にかゝると、久光はすぐに革新主義者の中から小松帶刀を拔擢し、中山中左衛門とともにこれを執政の地位に置き、同時に加治屋町組から大久保一藏と伊地知貞馨とを御側役として拔擢し、藩政の樞機に參與させることとした。小納戸役から一躍して御側役に進み、藩政の樞機に參與することとなつた大久保の出世は、もとより一藩の矚目するところであつた。この時から薩藩の國策には必ず大久保のいぶきが通ひ、久光の一舉一動には、必ず大久保の姿が影の形にそふ如く相從ふのであつた。

この改革と同時に、罪を赦されて大島から召還された南洲は、久光入洛の道中檢分役といふ形で、京都に向け先發を命ぜられることとなつた。久光が守舊派の島津將曹一派を卻けて、小松・大久保・等

を登用したことは京・攝・の間に集まつて、大事決行の最後の希望を薩藩に繋いで居た、全國各藩の志士・浪人・の間に激しい衝擊を與へた。島津久光の政策は、前に大久保甲東等の一黨に誓つた如く、先代・齊彬の經綸を一步も出づるものでなく、穩健著實な公・武・合體的經綸をいよ／＼實行に移さなければならなくなつただけのことである。ところがその經綸の第一著手として行はれた藩政の改革が、京・攝・の間に集まつて、薩摩藩の奮起を、今か／＼と待構へて居た全國各藩の志士・浪人・には、如何にも薩藩の新政權により、先代以來の生ぬるい公・武・合體的經綸が揚棄され、久光がいよ／＼意を決して、攘夷・倒幕・の旗擧げに乗出す準備であるかのやうにとられた。この情報は逸早く薩藩新政權の手に入つた。久光は、その入洛を決行するに先だち、先づ人を派して、その入洛の途を壅塞して居るこれらの障礙物を清掃することの必要を感じた。その道中檢分の役目を負はされて出發したのが西郷南洲であつた。

南洲三たび徳之島に流され、甲東初めて京都に入る

南洲は久光の内命を承けて、まづ下關に赴き、しばらく上國の形勢を偵察して居たが、この地で藤本鐵石・安積五郎・平野二郎・等の熱血兒と相策謀して、一舉の計畫を進めて居た有馬新七・橋口謙藏・

等薩藩同志の消息を耳にし、うか／＼と大坂に踏入ると、いつの間にかかれらの熱烈な氣焰にあてられてしまつて、鎮撫使が一變して煽動使となつた形となり、いつの間にか何といはれてもその辯明の餘地のないやうな立場に陥つて居る自分を見出すのであつた。人の熱誠に動かされ易く、その特殊の智能の前に、おのれを虚くして聽従する美質は西郷の天稟であつて、かれが諸浪士の間にも最も人氣のあつたのはその爲である。しかし、西郷のこの資質は、必ずしも君側に侍して國政の樞機に參與し、補弼の大任を完うする上に適當なものではなかつた。

西郷のこの時の行動が主君・久光の激怒を買つたことはいふまでもない。かれは三たび徳之島に流され、ついで沖ノ永良部島に移された。

ミイラ取りの使命を承けて發した西郷吉之助が、ミイラとなつて徳之島に流されたので、そのあとには伊地知貞馨が更に命を奉じて京都に入り、轉じて江戸に出で、久光上洛の準備工作に當ることとなつた。伊地知について中山中左衛門も京都に發遣せられたが、久光はそれに満足せず、更に大久保甲東を簡派し、近衛公について公卿間の情勢を窺ひ、且つその準備工作を完成させることとした。この際、久光が甲東に附して近衛公に呈した文書を見ると、「天朝の御危殆實に燒眉の念にして、被_レ爲_レ惱_二歎_一慮_二候_一御儀、此節中山へ詳細の御左右にて、悲涙涕泣に堪奉らざるの次第に候」とあり、また

「和宮様御無理に申下し奉り候者、一朝一夕の奸汚に無_レ之、御下向被_レ爲_レ成候上は、掌中の物にて、中々勅意を恐れ處置を改め候は、思ひも寄らぬことにて、至憂此事に候」とある。同じ文書の中で、久光は更にその赤賊を吐露して次のやうにいつて居る。

一 不肖の我等たり共、苟も王臣として難_レ奉_レ忍_レにより、皇國復古御大業被_レ爲_レ在度奉_二誠願_一候、就ては京地御十分の御守護不_二相備_一候ては、假令非常の御聖斷被_レ爲_レ在候ても、戊午の覆轍_一（安政五年井伊大老の強力政治）を踏候様にては、反て奉_レ増_二御難題_一、甚だ奉_二恐入_一候に付、一回御發舉の上は、必勝の利を謀り、興後無_レ疑算を盡し、其上の處は、臨機應變の處置に出で候様有_レ之度奉_レ存候。

なほ久光はこの文書の中で、その典側の護衛として人數五百人を召連れ出立の後、更に兩日を置き、て守衛の人數五組三百人、更に兩日を隔てて四組二百四十人を小倉・下關に出張させ、藩船・天祐丸を以て海上輸送の便をとる旨の計畫までも言上して居る。こゝに久光の甲東に託して近衛公に召出した文書が、和宮御降嫁の一件に觸れて居るので、これは何人にもよく知れ渡つて居ることであるが、順序としてこゝに一言その説明をして置くこととする。

和宮親子内親王の關東御降嫁

九〇

井伊が櫻田門外に横死した後、安藤對島守と久世大和守とが代つてその幕政の樞機に任じたことは、前にも述べて置いた通りであるが、安藤は阿部伊勢守正弘の故智を學んで、それよりも更に一步を踏込んだ公・武・合體主義の實際策に乗出した。すなはちそれは人を通じて將軍・家茂のために皇妹、和宮親子内親王の御降嫁を奏請し奉り、朝廷に於ける公・武・合體派の諸卿と策應して強ひて勅允を得たことであつた。初め關東からこの重大な使命を帯びて上洛したものは、前將軍・家慶の老女・姉小路（橋本いよ）であつた。これは姉小路が和宮の御生母・橋本氏と親交があつたからである。しかるに、朝廷に於いては幕府のこの奏請を御聽許あらせられず、姉小路の周旋も竟に空しからうとしたのを、關白・九條尙忠・侍從・岩倉具視・等の奔走があり、幕府は更に寵妃・右衛門内侍について内奏し、竟にその御聽許を得ることに成功したのであつた。これが萬延元年十一月のことで、幕府は京都の所司代をして厚く采納させ、且つ親王家及び縉紳家に贈金してその意を迎へた。この舉は天下の諸武士・諸浪人・の過激な尊・攘・論を緩和し、且つ諸藩の倒幕主義者をして間に乘する餘地なからしめんがために行はれたことであつたが、その實際は却つて反對の結果を齎した。和宮御降嫁のことが一たび

世に傳はると、各藩勤王の志士は憤激身を措くところを知らず、諸浪人と謀つて和宮の御輿を道中に奪ひ奉らんとするものさへあり、物情騒然として時局は刻一刻と悪化して行くばかりであつた。この和宮御降嫁強請の一件が、封建的既成勢力（現状維持派）による改革理念、すなはち公・武・合體主義に基調する文久維新の企畫を蹴飛ばして起上つた封建的中間階級、すなはち各藩下士階層（身分的）の舉兵討幕聯盟を促す契機となつたことは、後の伏線として次に詳しく述べて置く必要がある。

長藩の重役層を代表する永井雅樂の策動

長州藩主・毛利慶親とて、薩摩藩主・島津齊彬と同じく、封建的舊體制に於ける一大勢力であつた關係から、その現状維持派の端くれであり、急激な改革に同意の來ぬ立場に居たものであつたことは、深く穿鑿するまでもないことだ。従つて誰に遠慮も氣兼ねも要らぬ各藩脱走の下士連中や、主もなく家來もなき無責任な浪人共の班に伍し、輕々に舉兵論など高唱されるものでなかつたことは、前にも述べて置いた通りだ。たゞ阿部伊勢守正弘が臺閣に主班としてその昔の政治理念である公・武・合體主義の實施に乗出してから、常に薩摩藩主・島津齊彬を顧問として經綸を進め、齊彬の死後同藩の政權が後見・久光の手に移つた後も、引續きこれを朝府と幕府との楔子として働かせて居るのを見ては、

幾分不愉快であつたに相違ない。井伊直弼が横死し、安藤信正が代つて公・武・合體的經綸を繼承し、和官御降下のごとで、痛く志士・浪人・の激昂を買ふに及ぶと、長藩はその幕府の困惑に乗じ、家老・長井雅樂を起させ、江戸に出て大いに閹老・久世大和守に説き、政府の經綸を薩藩樞軸から、長藩樞軸に移さうとして努力した形跡が著しい。

すなはち、長井雅樂は藩主父子の同意を得て江戸に出で、閹老・久世大和守に説くに、宇内の形勢から開國のやむを得ざるの事情を以てし、その國策の基調として大に公・武・合體論を提唱し、大和守の意を動かした。大和守としてはもとより渡りに舟である。こゝに於いてか久世大和守と長藩との提携が成り、前年伊勢守によつて進められた、薩藩を樞軸とする公・武・合體政策が、こゝに更めて長藩を樞軸として推進されるに至つた。この時長藩の要路にあり、長井の策を支持した上士階層の代表者は周布政之助であつた。長井は大和守の内示を承けて京都に引返すと、頗る長文の開國論を朝府に奉り、九條を始め、中山・正親町・三條・の諸卿を動かして朝議を一變させようと取掛かつた。

長井のこの舉に對しては、各藩の尊王・攘夷論者が擧つて反對であり、殊に長藩の下士階層を代表する久坂玄瑞の如き、口を極めて長井の奸惡を罵り、書を土佐藩の同僚・武市平平太に寄せ「今や天下の諸侯頼むに足らず、公卿頼むに足らず、草莽の志士糾合、義擧の外には逆も算無之」と諷刺した。

久坂のこの一語には、今日のいはゆる既成勢力、すなはち現状維持派の因循姑息に對する憤激の情が横溢して居るのを掬ふことが出来る。かやうな長井雅樂の藪から棒の策動は、從來長藩こそわれらの味方であるとひたすら望を繋いで居た天下の志士・浪人・をして、この上は薩藩を頼むの外ないとなゞ一縷の望みを新たに薩藩主に後見役として政治上の實權を握つた島津久光の上に掛けることとなつた。かれらが島津久光の入洛を早天の雲霓の如く待望し、その擧兵・討幕・の日の目睫の間に迫つたことを妄想して喜んだのも、一つには長藩に對する失望の程度が大きかつたからと想像せられる。

南洲、久光の公・武・合體主義的經綸に失望

しかるに久光の眞意は忠實にねばり強くその異母兄・齊彬の政策を踏襲し、日本のために皇室中心の公・武・合體的新體制を樹立するにあつた。久光は大體長州の長井雅樂が試みて失敗した道を逆行つたものだ。すなはち雅樂はまづ幕府を説き、閹老・久世大和守の内示をうけて朝議を動かさうとしたのであるが、久光は反對にまづ朝廷に獻策し、朝廷の命令によつて幕政を改革し、公・武・合體の實を擧げようと掛かつたのであつた。そこに長井雅樂の改革と島津久光の改革との間に横はる大きい距離が窺はれる。すなはち、長井雅樂が幕府中心の公・武・合體的新體制を畫策したのに對し、島津久光は

近衛家を介し、皇室中心の公・武・合體的新體制を畫策して居たのだ。

久光は甲東が京都から齎した復命で、朝廷の御動靜と堂上公卿の間に磅礫して居た大體の空氣とを突止めることが出来る、文久二年三月十六日を以て鹿兒島を出發し、中山中左衛門・小松帶刀・及び大久保甲東等を輿側に隨へ、四月十六日を以て無事京都に到着した。従ふ者一千人、武步堂々、實に天下を曠しうするの概があつた。

こゝで敘述を少しく前に戻し、大島から赦されて鹿兒島に歸つた後の西郷南洲の思想及び行動につき再検討を加へて置く必要がある。南洲が赦されて鹿兒島に歸り、その名を大島三左衛門と改めて、いよ／＼乾坤一擲の快學を試みようとして起上つたのは、文久二年二月十二日のことであつた。南洲は大島から歸ると、直に藩の家老・小松帶刀の邸に招かれた。その席には中山中左衛門を始め、久光取立の重臣達が顔を揃へて居た。この席で南洲は、久光の眞意が先君・齊彬の遺策を奉じ、朝廷を中心として諸侯を結束し、朝命を奉じて幕府に迫り、その政治機構の大改革を斷行させ、越前侯・松平春嶽を政事總裁に据ゑ、一橋慶喜を將軍後見職に補さんとするにあることを確めることが出来た。南洲はこれを聞いて、聊か意外の感に打たれざるを得なかつた。かれによると、後見・久光のこの畫策は、實質上阿部内閣の公・武・合體の經綸と殆どその揆を一にするものであつて、先頃毛利慶親によつて採

用された長井雅樂の籌畫と大體に於いて擇ぶところのないものだ。その異なるところは百尺竿頭一步を進めて具體的に方策を示して居ることと、あくまでも皇室を中心とし、佐幕主義の舊殻を擺脫して居ることとに過ぎない。これがもし先君・齊彬の時代であつたならば、最も進歩した、かなり急激な改革意見であるとすべきであつたかも知れぬが、井伊大老の反動的鐵血政策の埒場の中を経て來た今日にありては、むしろ因循姑息な一種の妥協政策に過ぎない。その徒勞に歸すべきは火を賭るよりも明かであると、南洲は早くも久光の計畫の危險を看て取つた。そこで南洲は、小松帶刀等の重役連を諫めて久光の上洛を阻止させようとしたが、その意見は用ひられなかつた。

甲東兵庫の濱に南洲を待受け糶死せんとす

久光はその上洛の途次、肥後に至つて、京・攝・の間に嘯集呼應して、久光の入洛を一日千秋の思ひで待受けて居る諸藩の志士・浪人・どもが、その驕輿の伏見に達するを待つて一舉に大事を決しよう、火の玉のやうになつていきり立つて居る一觸即發の情報に接したので、有村俊齋（海江田信義）に命じて、急遽京・攝・の地に入らしめ、具さにその状況を探らせることとした。すでにして久光の驕輿が進んで姫路にあつた時、有村は一觸即發の危機を孕んで居た京・攝・の情報に加へて、ミイラ取りが

ミイラと化したつたと同様な西郷の言動についても詳細に言上に及んだ。久光は有村の情報に接すると、赫然として激怒した。元來下關で待受け、その命を請うて徐ろに行動に入るべき筈の南洲が、君命を無視して大阪に入つたことさへ不埒であるのに、京・攝・の間に放浪して居る諸浪士に取圍まれ、推されてその首領となるとは何事ぞと、怒り心頭に發したのも無理はない。轎輿が兵庫に着くと、久光は直に急使を南洲の許に發して、即刻出頭せよとの嚴命を傳へた。

何事が起つたかと南洲は、久光の滞在して居る兵庫に赴くと、大久保甲東が道にかれを待受けて君側の事情を告げ、久光の憤激がその極度に達して居る有様を物語り、今度こそ死刑か切腹か二者その一を免るまいと告げ、哄然天を仰いで嗟嘆した。や、暫くして甲東は南洲に告げていつた。

『事ここに至る。悔いて及ぶべきでない。士たるもの須くその最期を潔くすべきぢや。おいは夙におはんとその志を同じくし、君國のために最善の力を盡して今に及んだものぢやが、今となつて君一人を殺すに忍びぬ。こゝで刺し違へて一緒に自決しようぢやないか。』

と。さすが磊落不羈の南洲も、甲東の友情厚きこの言葉を聽いては、黙々として一語の答ふところなく、その炬の如き兩眼からは、熱涙の滂沱として溢るゝを見るのみであつた。南洲はやがて重き口を開いて甲東に告げた。

『おはんの志はいつの日に忘れらう。たゞ兩人がこゝで刺違へて自決したならば、おいの志は誰がこれを繼いでくれるぢやらうか。おいの身から出た錆は、おい一人でこれを引受けるのが當然ぢや。おはんは生きてこの上とも一段の勇氣を奮ひ、どうぞおいども同志の志を達成することに努力してくれ。』

と。南洲と甲東との間に深い溝渠が生じ、その情感の疎隔が到底取返すことの出来ぬものとなつたのは、果していつ頃からのことと見てよろしいであらうか。それこそは蓋し南洲傳の著者も、甲東傳の著者も齊しく惱まされて來たむつかしい問題だ。西郷が戊申の役、奥・羽・の戡定を了へ、東京に凱旋して功を奏した時、全國各藩から貢進された叡臣と才幹とを統べ、新たに生れ出た近代國家、日本のために、或は政治機構の整備に、或は金融機關の創設に、或は教育及び教學機關の樹立に、或は陸・海・國防の充實に、夙夜營々として渾身の精力を傾けて居た岩倉・大久保・木戸・等の施設するところに快からず、卒然として中央を去り、郷里・鹿兒島に歸つてその舊主に奉仕する決意を示した時は、すでに兩雄の決裂が表面に現はれたものと見るべきであらうが、それに先づ僅に六年、すなはち、文久二年三月、同じ兩雄が兵庫の海岸に相抱いて人事の不如意を嘆歎し、刺し違へて死なうとした前掲の場合までは、まだお遊羅騒動以來固く血盟してその志を同じくし、行動を共にして來た水も

もらさぬ情誼のしつかりと保たれて居たことがはつきりと察せられる。

三箇條から成る文久維新の勅策と大久保の獻替

文久維新の主役であつた島津久光の思想並にその實際的經綸論は、攘夷即行・舉兵討幕・一本槍の志士・浪人・どもから見ると頗る生ぬるい、齒痒いものに思はれたこと當然であるが、講つてこれを二百五十餘年の泰平を維持して來た徳川幕府の根本法の上から考へると、まさに幕末維新史の上に一新時期を劃すべき思切つた急激の行動であつたといへる。如何となれば、大名が幕府の命令によるにあらずして兵を率ゐて入洛し、策を朝廷に獻するさへあるに、直接に禁闕の警護を命ぜらるゝといふに至つては、徳川氏の根本法の上から見てどういふものであるか。いつの頃からか世に傳へられて來た『公武法制』は、文獻史學の上で偽書であるといふことに決定して居るやうであるが、偽書としてその中に書いてあることが二百五十餘年の江戸時代を通じて實際に行はれ、諸大名の中一人これを無視して三條橋を打渡り、闕下に伏奏して、直接大命を拜し奉るといふやうな行動に出づるものはなかつた。しかるに文久二年四月、久光が入洛參内して直接公・武・合體主義の主張に基く具體策を獻じ、その御嘉納を得たといふさへあるに、親しく禁闕の警護を命ぜられたといふに至つては、これを徳川

氏の根本法の上から見てどういふことに當るか。かゝる場合のことを嚴重に制規してある『公武法制』が偽書であらうとなからうと、實際の上からいつて、これは明かに幕府の紀綱の崩壊したしるしでなくして何であらう。この間にありて久光の傍を離れず、朝廷及び幕府に對する折衝の機密を掌つて、肝膽を摧いたものは大久保甲東であつた。この際甲東が五月五日を以て初めて岩倉具視と面會し、互に丹心を披瀝して天下の事を談じて居ることは注意して置いてよいことだ。甲東はその日記にこの時のことを記して「拙者岩倉家へ參殿御目見被^{おまじ}仰付^{おほせ}、段々押切つて建白仕候」とある。明治新體制の樹立に於ける推進力そのものであつた岩倉と大久保との交感がこの時を以て始まつた。越えて五月二十日には甲東小納戸頭に進められ、五月二十二日には久光に扈從し、勅使・大原左衛門督重徳を奉じて江戸に下ることとなつた。この時久光が幕府に授けるために持下つた勅旨は三策から成つて居た。その第一は、將軍が上洛して朝廷遵奉の道を盡し、攘夷即行の實を示すと同時に、下、萬民和育の基を啓くこと、第二は、豊公の故典に則り、沿海の五大藩主をして幕政を輔佐せしめ、環海の武備を保鞏すること、第三は、一橋慶喜を以て將軍の後見職とし、松平春嶽を擢んで政事總裁に任ずることであつた。この三策は、必ずしも久光が入洛、參内して奉つた意見のみでなく、長州侯及び公卿間のかねての意見をも併せ用ひたものであつた。すなはち、第一策は水戸の主張にかゝるものであり、第

二策は岩倉具視の發案、第三策は久光自らの主張するところであつた。後年、岩倉が甲東に贈つた『草裡鳴蟲』の中に、この三策を決した裏面の消息が次の如く述べられて居る。

三事策、其第一は長州の説、第二は朝議、第三は即ち貴藩（薩州）の説。是れ秘中の秘なるを以て堀をして大意を起稿せしむるに當り、尙出處を言はず、實は微慮に成ると爲せり。當時貴藩は一・二・三策を以て不可とすと雖、強て之を記載せしは抑故あり。朝議第二策は其意、幕府の例規を破り威權を殺ぐに在り。彼れ若し肯せず、勢ひ強大を張る時は一の貴藩、或は抵抗し能はざる慮あり。臨機力を出さしめんが爲め長州の説乃ち第二策を加へたり。一藩尙ほ力の足らざるを恐れ、海岸五大藩に頼らんと欲し、東に伊達、西に島津、南に山内、北に前田、中國に毛利、都て五藩と記せり。然れども文辭瑣雜に過ぎ、稗史野乘を讀むに似たりとて、遂に五大藩云々の文に改めたり。素より貴藩一次の東下、幕吏直に奉行すべしとは夢想だも及ばず。或は幕吏激怒勅使を逐ひ、貴藩を幽するが如きものあらん。是に於て詔書云々を以て自餘四藩に依頼して義舉せしめんと計策なりき。故に其始め苦心焦慮尠なからず。

これで島津久光が勅使・左衛門督大原重徳を奉じて江戸に出府し、三箇條からなる幕府の改革案を提出した前後に於ける朝・幕・間の空氣が、どんなに切迫したものであつたかを察することが出来る。

水野越前守が天保改革で企畫した參觀交代制度の釐正

もちろん、この時久光が幕府に致した献策は、上記三策に限らず、朝廷御賄料の増加、水戸黄門贈位のこと、彦根侯の封邑十萬石を削り、間部詮勝・安藤信正・を追罰すること、諸侯參觀の期をゆるめ、その妻子を國に返すことなど、すべて二十六箇條からなる思切つた改革綱領の披瀝であり、その中には將軍一代中に必ず一度は上洛して天機を奉伺し、國策を稟申して勅裁を仰ぐべしとする箇條も含まれて居たのであるが、しかし久光としては當時急速に將軍の上洛を促したわけではなかつた。これの献策の大體の精神は、曩に長州の長井雅樂によつて行はれた献策が、幕府の爲現狀維持を基調としたものであつたのに對し、朝廷を中心とする公・武・合體的新體制の樹立により舉國一致、上下その歩調を齊しくして當面の國難を打開すべしとするにあつた。この皇室を中心とする公・武・合體的新體制の樹立を主張し、勅使を擁してこれを幕府に迫つたことは、久光としては随分思切つた行動に違ひなかつたが、寺田屋の事變があつてのち、久光が勅使を擁して江戸に下向して居る間に、京洛の空氣は完全に一變し、久光が江戸から引返して來るまでには、その一觸即發の情勢が久光の豫想以上に出でて居たのであつた。

久光のかやうな強壓に對し、幕府はこれを拒むべき術もなく、勅使の前に恭しく聖旨に副ひ奉るべきを奉答に及んだ。久光の得意や想ふべきである。たゞこゝで特に讀者の注意を喚起して置きたいことは、久光が勅命を奉り幕政改革の具體案として幕府に強制した條項の一つに、諸侯參觀の期をゆるめ、その妻子を國に歸すことを承認させた一條のあつたことである。この一條は曾て水野越前守忠邦がその天保改革の最も重要な綱領の一として實行に移さうとしたもので、それが荻生徂徠の『太平策』に盛られた封建病理學說に基くものであることは、水野氏に家學として深く信奉されて居た徂徠學の流に關して知るものひとしく認めるところであらう。徂徠はその曾て將軍の諮問に應じて答申した『太平策』の中で、徳川氏の天下を病ましめる最も重大な原因の一つとして、參觀交代制度による土地經濟の崩壊を痛論して居る。すなはち參觀交代制度は神祖の大道術であつて、神祖が亂世を統一し、殺伐な人心を綏撫・教養・する上には、既に十二分の効果を擧げたものであるが、今はその大道術が全く時効に屬し、この制度の結果として天下の富が滔々として諸都府に於ける大町人の手に歸し幕府存立の根柢をなす土地制度が年々崩壊の歩度を早めつゝある事情を指摘して、時弊の圖星を指して居る。この參觀交代制度の餘弊に關する徂徠の意見は、その後水野越前守によつて取上げられ、天保改革の最も重要な綱領として實行に移されようとしたものであつたが、その下準備として發令され

た諸大名の飛地整理で脆くも蹉跌し、島津久光を樞軸とする著者のいはゆる文久維新に至つて、遂に實現を見るに至つたものである。著者は一家の史觀から、島津久光と近衛忠熙との提携によつて行はれた道次の改革を『文久維新』と呼び、次に來た山内容堂を樞軸とする『慶應維新』とともに、明治維新に到達する二つの段階の最初のものとして居る。

長・土・兩藩の提携で根柢から覆へされた

薩藩中心の文久維新

久光のこの華々しい成功を見た長藩及び土藩が何條默視すべきであらう。長藩の家老・福原越後・久坂玄瑞・大阪の留守居・宍戸九郎兵衛等は、久光がまだ京都を發せぬ前から朝廷に迫り、薩藩と同じく京都警護の命を拜せんことを請ひ、岩倉をして密に近き將來に於いて、必ず龍虎相搏つゝの慘劇を招來せんことを憂慮せしめた程であつたが、毛利慶親は、勅使一行の京都を發せんとする前日、すなはち文久二年六月六日を以て江戸を去り、道を中仙道にとつて上洛の途についた。

同年八月には、土佐藩主・山内豐範も兵を率ゐて京都に入り、島津・毛利・の二氏とともに京都警護の命を賜はらんことを請うて勅允を得た。かやうにして岩倉の憂慮した薩・長・正面衝突の機は漸く

熟しつゝあつたのである。

島津久光に機先を制せられてからの長藩は、頗る焦燥の氣味であつた。文久二年十一月には、朝府にあつて長藩の勢力を代表して居た中納言・三條實美が勅使に任じ、副使・少將・姉小路公知とともに攘夷決行の勅命を奉じて關東に下向することとなつた。その警護として長藩と土藩とが任命をうけたことはいふまでもない。前に勅使・大原重徳を擁する薩藩の後見役・島津久光の關東下向があつて、幕政改革の大綱と對外的方針とはすでに決定し、今はただ著々これを實行に移すばかりの段取となつて居たところへ、その漸進主義的政綱を根底から覆す攘夷決行督促の勅使が踵を接して江戸に入つたのであるから、幕府の狼狽・惶惑・や推して知るべきである。これはいふまでもなく久光の他藩を出し抜いて行つた幕政の改革に對し、長藩にありてその下士階層の勢力を率ゐ、急進的國內改革案と對外強硬策とを支持する福原越後・益田右衛門介・久坂玄瑞・桂小五郎・等が躍起となつて、内に公・武・合體主義のいはゆる俗論黨(現狀維持派)を克服し、外には尊・攘・主義の諸武士・諸浪人・と氣脈を通じ、且つ土佐藩の急進論者・小南五郎右衛門・武市半平太・の徒と遙に相策應して朝廷に迫り、形勢を一轉させた結果であつた。久光はその公・武・合體主義に基調する幕政の改革に成功し、得々として京都に歸つて見ると、その留守中に朝府の空氣は一變し、長藩は既に上士階層と下士階層とを擧げて繼

夷即行・擧兵倒幕・の急進主義に一致した形があり、もう生ぬるい公・武・合體政策などに、耳を傾けるものは殆ど一人もないといつてよいやうな緊張し切つた空氣が、輦轂の下を支配して居るのを眼のあたりに見るのであつた。

大久保初めて重役層の下位に班す

さしも機略縦横の久光も、今は手を下すべき術も知らず、幾もなく小松・中山・及び大久保甲東・等を伴ひ、悄然として國に歸つたのであつた。その鹿兒島の城下に入つたのが文久二年九月九日であり、この時甲東三十三歳、御用御取次見習に任ぜられ、初め・薩藩に於ける重役層の下位に班したのであつた。

文久三年正月になると、久光と入違ひに、前年勅使・三條實美の下向に際し、勅使に對する奉答で決まつて居た將軍上洛の先發として一橋慶喜・松平慶永・がまづ入洛する。三月にはそれについて將軍・家茂も朝覲した。四月十一日には天皇が男山八幡宮に行幸あらせ、祠前に於いて將軍に攘夷の節刀を賜ははることとなつた。堀田や井伊の在職中こそ慶喜も慶永も熱心な攘夷即行論者であつたものの、自分が責任の衝に立ち、國家の存亡を雙肩に負はされて見ると、攘夷即行などいふ過激無謀な學がお

いそれと出来るわけのものではない。それもこれも要するに、長藩の薩藩から出し抜かれた憤懣の餘洩であつて、難きを幕府に強ひ、事端を紛糾させて、薩藩の先代・齊彬以來の傳統政策である公・武・合體主義を一舉に覆し、舉兵・討幕・の名義を得ようとするにあつたことはいふまでもない。

第二章 薩・長・土・三藩下士階層聯盟の由來並に

その勤王倒幕運動

麻布の長州空屋敷で三藩勤王志士の密會

島津久光と近衛忠熙との提携によつて推進められた公・武・合體的新體制樹立運動、すなはち文久維新が、三條實美を戴く長・土・兩藩の急進主義、すなはち幕府に難きを強ひ、舉兵・討幕・の名分を見出さうとする攘夷即行主義によつて覆されたことは、やがて各藩の重役層が幕末の政治舞臺から一步後退し、長・土・兩藩の下士階層聯盟がそれに代つて花道からせり出したことを意味するものであつた。すなはち著者は、こゝで敘述の筆を回らし、長・土・兩藩下士階層聯盟の由來とその發展とにつ

いて物語らねばならぬ。

そも／＼攘夷即行・尊王倒幕・主義に基調する薩・長・土・三藩下士階層聯盟の起りは、これを文久元年八月、江戸麻布なる長州の空屋敷で、同藩の久坂玄瑞（義助）・土藩の武市半平太・薩藩の樺山資之（三四）・三士の間に締結された盟約に徴すべきであらう。この聯盟の成立を告げて間もなき九月二日、武市は同志・大石彌太郎を伴ひ、更に久坂を麻布の長州屋敷に訪ねた。折柄そこに薩州の樺山資之が來合せて居り、三人連れ立つて周布政之助の屋敷を訪ねると、折よくそこに桂小五郎も來合せた。そこでこの數人が車座となつて盛んに時勢を談じ、この國家空前の難局を打開して、皇室を中心とする新政治機構を打樹てるためには、各藩の有志が區々たる私情に囚はれて居たのでは何事もなし得ない。須く各藩の同志を結束し、一致協力、以て國難克服の目的を達成すべきであるといふことに意見の完全な一致を見、拂曉に至つて散會したが、この九月二日の會合で、前の攘夷即行・尊王討幕・聯盟が更に強化されたわけであつた。九月二日、武市が大石と相携へて麻布なる長州屋敷に重役・周布政之助を訪ねた時は、皇妹・和宮親子内親王の關東御降嫁に關し、國中の輿論が沸騰し、志士といふ志士、浪人といふ浪人が腕を扼し、唇をそらして幕府の大不敬を難詰して居る最中であつたので、その夜周布の宅に會合した同志の中にも、全国各地の志士・浪人・と氣脈を通じ、和宮御降嫁の

御輿を途上に要して奪還し奉るべしと息巻くものさへあつた。しかるに武市半平太はこの暴舉には反對で、切々と久坂・樺山の兩氏を説きてその持重を求め、この際は各自國に歸つて藩侯を説き、藩論を取纏め、明年機を期して三藩一時に京都に入り、尊王・倒幕の大旗を擁して立たば、天下靡然として風從、大事一朝にしてなるべしと主張した。久坂も樺山もひとしく武市の説に服し、すなはち相ついで藩地に歸り、同志を糾合し、藩論を決定し、藩主をめぐる重役層を動かす仕事に取掛つた。

武市半平太歸國して勤王倒幕の同志を募る

この誓約に基き、武市は河野萬壽彌等同志を伴ひて九月四日江戸を發足し、二十五日高知に歸省した。この行武市は、さきに八月中久坂・樺山・と三人鼎座の上にて認めた誓約書でもあり、同時にわが藩の同志に示す檄文でもある悲壯淋漓たる宣言書を懷中にして歸つたが、二十五日高知に歸着すると、直にそれを平井善之丞・山川左一衛門・谷守部(干城)・佐々木三四郎(高行)・等數人の同志に内示し、その賛成を得て、これを土佐七郡の同志に檄し、その結束を促したのであつた。この飛檄に應じて武市の麾下に集つた同志は、その大部分が輕格、すなはち下士階層の子弟であつて、今その主なるものを挙げると次の如き面々であつた。

間崎哲馬(滄浪)・望月清平・北添信摩・高松太郎(坂本龍馬の姪)・河野萬壽彌・中岡愼太郎(迂山)・楡垣清治・平井收次郎・坂本龍馬・大石彌太郎・門田爲之助・吉村寅太郎・島本仲道・河野敏鎌・小畑孫二郎・同孫三郎・土方久元・宮地宣藏・澤村惣之丞・那須信吾・安岡嘉助・大石團藏・等約百九十餘人、

かやうにして武市は、まづ同志の結束に成功し、ついで政府の首脳部を動かす仕事に取掛つたのであつたが、この時の内閣は深尾弘人執政の下に、薩摩の藩主・島津齊彬等と並んで公・武・合體主義の雙擘といはれた老侯・山内容堂の信任最も厚き吉田東洋を首班とし、朝比奈泰平・市原八郎右衛門・由井猪内・野内太内・等の開國・進取・主義者で固めて居た際であつた。殊に山内容堂から絶對の信任をかけられて居た吉田東洋は、人物・識見・ともに一世の雄で、その傲岸不屈の資性は、固苦しい土佐流の宋學で固まり、大義名分論の一本槍で突進しようと身構へて居る輕輩、武市づれのいふことに耳を傾けさうな筈がない。半平太は衝天の意氣で歸國したが、幾もなく重役層の公・武・合體主義と、下士層の尊王・倒幕・主義との間には、到底近寄つて提携することの出來ぬ深く且つ廣い溝の横はつて居ることを發見せねばならなかつた。この點は武市と相前後して藩地に歸つた、長藩の久坂玄瑞・薩藩の樺山資之が、それ／＼その藩の重役層に接して感じた失望と全く同じものであつた。

武市一派の吉田東洋暗殺、長藩下士階層政權との聯携

そこで、東洋の傲岸な態度に憤激し、重役層の現状維持的因循姑息に憤慨した武市一派は、非常手段に訴へて吉田東洋を斃すこととなり、同志の中から那須信吾・安岡嘉助・大石圓藏の三人が選ばれて刺客となり、文久二年四月八日の夜、東洋の下城を高知の帯屋町に要して暗殺したのち、小南五郎右衛門と策應して、東洋の姪で、その後継者と目せられて居た後藤象二郎を逐ひ、竟に土佐藩の政權を把握した。これより先、土佐藩では容堂が安政の大獄に連累して隠居謹慎を命ぜられ、執政・小南五郎右衛門が追放せられて、容堂の世子・豊範が起ち、深尾弘人を執政とする吉田内閣によつて著々開國・進取・主義の實際的經綸を施行して居たものだ。

ところが、この時薩藩ではすでに島津齊彬が世を去り、後見・島津久光が幼主を輔佐し、兵を率ゐて上洛し、諸藩を出し抜いて京都の警護を命ぜられ、勅使・大原重徳を奉じて江戸に下り、幕政に大斧を下さうとして居る際であつたので、土佐藩でも小南・武市・内閣は手を拱いて薩藩が公・武・合體主義の新政機構に樞軸たうとして居る形勢を傍觀することが出来ず、直に新藩主・豊範を促し、兵を率ゐて入洛し、立運れた長藩と氣脈を通じて、薩藩による新體制企畫を根柢から覆さうとするの舉

に出たことは、前に述べて置いた通りだ。上述の如く、土佐藩に於ける尊・攘・主義の香宿・小南五郎右衛門を載く輕格出身の武市半平太が、新藩主・豊範を擁し、長藩下士階層の攘夷即行・尊王倒幕・運動を援けて、薩藩の後見・島津久光によつて九分通りなし遂げられた文久維新を覆すことが出来たのは、公・武・合體主義の大御所ともいふべき老公・容堂が、安政の大獄に連累してなほ隠居謹慎中であつたし、容堂の懐刀として曾て最も熱心に且つ放膽にその公・武・合體主義的經綸に參畫して來た後藤象二郎が、吉田東洋の横死した時から難を避けて江戸に出で、帆船・南海丸に乗込んで航海操船の術を習つて居たために、何人も立つて小南・武市・の行動を支吾するものがなかつた。しかるに、さうして武市が腹一ぱいに藩政を執行し、長藩の急進主義を支援して薩藩に一と泡吹かせて居た得意の時代は短かつた。なぜかといへば、老公・容堂は、島津久光が勅使・大原重徳を奉じて江戸に入ると入れ違ひに、蟄居謹慎を解かれ、文久二年八月十五日には召されて將軍に謁し、翌文久三年正月十一日には幕府から貸下げられた筑前藩の汽船・大鵬丸に搭乘して品川灣を發し、二十五日には早くも京都に入り、越えて三月二十五日には小南・武市・等長藩の舉兵・討幕・計畫に左袒した一味の一網打盡を期しつゝ、非常な意氣込みを以て歸國の途について居たからだ。かくて容堂の高知に着いたのは文久三年四月十二日で、高知にはその日から大目付・後藤象二郎を檢事總長とする大獄の旋風が捲起つた。そ

れは安政の大獄の規模を土佐一藩に限つた大悲劇で、尊・攘・黨は一人も残らず、或は斬罪に、或は永牢に、或は切腹に處せられ、野根山に立籠つた殘黨二十二人も完全に尅殺されて、後藤一派の重役層が一藩の政權を回復した。

長藩重役層の代表・長井雅樂の公・武・合體主義運動

島津久光の關東下向に先つ一步、安藤對島守信正によつて、ひた押しに推進められて居た、皇妹・和宮親子内親王御降嫁の一件が、天下の志士・浪人・を憤激させ、物情恟々然々たりし眞最中、長藩の長老・長井雅樂が關東に下り、關老・久世大和守に説き、公・武・合體論に基調する開國主義を主張し、幕府から朝府に働きかけて公・武・合體的新體制の樹立を劃策したことは前に述べて置いた通りであるが、この長井の行動は、藩主・慶親父子も初めから承知の上のことであつた。しかるに、長井雅樂と入れ代りに勅使・大原重徳を奉じて江戸に下つた島津久光が、長井の劃策した、幕府を中心とする公・武・合體主義的經綸を根柢かから覆し、朝廷を中心とする公・武・合體的新體制の樹立に成功するを見た長州藩主・毛利慶親父子は、憤懣おく所を知らず、俄に公・武・合體主義的經綸を一擲し、尊・攘・主義一本槍の重役・福原越後・國司信濃・益田右衛門介・等急進主義者の主張に耳を傾けることとなり、從つ

てこれらの重役層に率ゐられて居た桂小五郎・久坂玄瑞・高杉晋作・山縣狂介・品川彌二郎・大村益次郎・等下士階層の英才を左右に具して、猛然攘夷即行の大詔渙發を關下に伏奏し、薩藩の公・武・合體的新體制計畫を根柢から覆さうとかがつた。慶親父子の奏請によつて京都の空氣が一變すると、長井雅樂は當然の結果として全くその立場を失つてしまつた。かれは幾もなく藩地に護送せられて自殺し、周布政之助は江戸にありて罪を得、京都に竄入して密かに形勢の推移を窺つて居たが、慶親父子が罪を得て輦轎の下を逐ひ立てられるに及び、その浪居に自殺して果てた。

生麥事件と大久保利通

男山の行幸によつて攘夷即行の期日は五月十日と宣布された。長州では血氣に逸る尊・攘・派の藩主がその勅命を奉じ、十日の夜から馬關海峡通過の外國船艦に對して砲撃を開始した。七月二日には英艦七隻が生麥事件の撫恤金と下手人の引渡しとを要求して鹿兒島市の市街を砲撃し、越えて八月五日には、米・英・佛・蘭・四箇國の聯合艦隊十八隻が、馬關に押寄せて砲臺及び市中に砲火を浴せかけ、事實上攘夷の不可能事であることを教へた。

こゝに生麥事件といふのは、これより先、島津久光が左衛門督・大原重徳を奉じて江戸に下り、幕府

を屈してその勅旨を奉戴させ、文久二年八月二十一日、得々として江戸を發し京都に歸らうとする途上の出來事であつた。久光の轎輿が武州・生麥村にさしかゝると、たま／＼その附近を遊歩中であつた英國の將校三人が鞭をあげて久光の行列を追驅し來り、咄嗟、その供先を横斷しようとした。この時久光の輿側から一人の從者が血相かへて躍り出で「外夷、無禮は許さぬぞ」と一喝すると、抜く手も見せずこれを切つて捨てた。この從者こそは、薩藩に劍を以て知られた奈良原喜左衛門(繁男の兄)であつた。これが世にいふ生麥事件で、英國と幕府、幕府と薩藩との間に外交交渉が纏れ、それが延いて日本の開國を促す上に大きい力となつた有名な事件である。英人側の記録によると、奈良原喜左衛門のために切り捨てられた英國人は、東洋漫遊の目的で日本に渡來し、その頃すでに横濱に居留して居た從兄弟の家に交寓し、この日、日本の大諸侯・島津氏の行列があると聞き、金紋挾箱の偉觀を見物して本國への土産話にしようとして、同勢四人、船を浮べて川崎と鶴見との間に漕ぎよせたが、行列はすでに遠く過ぎ去つた後であることを知ると、いづれも馬に飛乗り、一鞭あてて行列を駆け抜けようとしたのだとある。輿側にあつてこの異變を眼のあたりに見た大久保甲東と小松帶刀とは、閩藩の若者等が吹きすさぶ攘夷熱に身内の血を沸らせて居る折柄とて、如何なる大事に及ばんも計り難しと見て取り、通例神奈川驛に駐まる豫定を變更して程ヶ谷驛まで急行し、そこに宿泊することとした。

かくして久光の轎輿は、無事程ヶ谷驛に到着したが、奈良原・有村等の猛者連は、外夷もしこの變報を耳にせば、必ず大擧して横濱から逆襲し來るであらう。この上はむしろわれより進んで居留地を襲撃するに若かずと主張し、行列の喧囂は言語に絶し、殺氣は野毛山の空を覆ふの概があつたが、甲東は徐ろに一同の逸るを制し、切々その輕舉妄動を戒めて、漸く大事に至るなきを得た。果然嚴重なる抗議は、英國代理公使・ジョン・ニールから幕府の當局に對して提起された。

英國東洋艦隊の鹿兒島砲撃と大久保等の思想的轉向

英國側は軍艦數隻を横濱に回航させ、島津家を責めて下手人を嚴罰に處し、外人保護不行届の償金・英貨十萬ポンド及び被害者遺族扶助料一萬ポンドを支出せよと要求した。これに對し幕府は再三折衝の末、かれの恫喝に屈して、やむなくその要求を容れたが、薩藩は言を左右に託して幕府の要求に應じない。遂に七隻からなる英國東洋艦隊が、文久三年七月二十八日、最後通牒を薩藩に致すと同時に、行動を鹿兒島灣頭に起し、八月一日から同月二日に亘り、猛烈な砲火を鹿兒島市内に送つた。これが先に擧げた英艦の鹿兒島砲撃事件である。この役、薩人またよく應戦し、英の旗艦・ユラルス號に多大の損傷を與へ、英人をして舌を卷いて日本人の支那人と同一手法を以て料理し難きを覺らせた

のであつたが、問題は終結を告ぐるに至らずして、結局横濱に於ける最後の談判となり、薩藩からは高崎五六（正風男）及び重野安繹の兩人が委員となつて折衝にあたり、遂に遣族扶助料、七萬ポンドを英政府に支拂つて纔に事を解決した。この時まで薩藩の若者達の胸奥に劫火の如く燃えさかつて居た攘夷論は、この痛烈なる實物教訓の前に、俄然變調を來さざるを得なかつた。このことがなくとも、薩藩には、外國の事情に曉通し、攘夷即行などいふ暴論の到底行はるべくもないことを知つて居るものがないでなかつた。たとへば、五代友厚の如き、寺島宗則の如き、英艦鹿兒島砲撃の際は船奉行として、藩の購入した汽船の管理に任じて居たが、たゞ／＼その拿捕するところとなつて、横濱に携行された。薩藩では、五代・寺島・の平生の言動に徴し、これはつゞき英艦に内應したものであるとして、嚴重にその踪跡を探索し、賣國奴を以て處分しようとした程であつた。島津久光といひ、大久保甲東といひ、必ずしも攘夷即行の急先鋒といふではなかつたが、少くとも攘夷に反對するものでなかつたことは明かである。しかるにそれが、このことあつて後、俄にその所見を變へて來た。島津久光は、元治元年三月、その第二の上洛に際し、斷々乎として攘夷の到底行はるべきでないことを主張し、徳川慶喜及び閑老諸公の意見に反對し、家茂將軍が鎖國攘夷の到底實行し難きことを千萬承知しつゝも、再び入洛して勅令を拜受したことをいたく痛撃した。それは當時朝廷から、密に宸翰を以て

攘夷のことにつき御下問があつたのに奉答した文書の上のことである。ついで兵庫開港問題の起つた時にも、久光は率先時勢に順應する御處置が願ひたいとて、越前・宇和島・及び土佐・諸藩を促して、その解決を朝府に建言して居る程である。さうしてこれらの場合、薩藩と朝府、及び諸藩との間に奔走して、一般の氣先を少しづつ開國論の方に向けることにとめたものは、大久保甲東その人であつた。

薩・長・兩藩の正面衝突、京都御所九門の兇變

前來述べて來た通り、薩藩は先代・齊彬以來この時に至るまで、終始一貫して穩健な公・武・合體主義に基調する超非常時對策を堅持し、幕府の進歩主義者に對する一大支柱であつたことに變りはなかつたのであるが、さりとて攘夷の一段となると、決して全國諸藩の志士及び浪人とその根本主義を異にするものではなかつた。たゞ薩藩は、あくまでも穩健著實を旨とし、全國諸藩の志士及び浪人達は往々にして過激に流れ、極端に趨り、難きを強ひて幕府に迫るの傾きがあつた位の相違でしかなかつた。ところが、生麥事件の紛糾から起つた英艦の鹿兒島砲撃は、必ずしも薩藩側の慘敗に終つたわけではなかつたが、その恐ろしい實物教訓は、さしも血氣に逸る薩藩の若者達に、攘夷即行などいふ空

論の到底行はるべきでないことを如實に示した、そこで薩・長・土・三藩のうち、薩藩がまづ攘夷即行論に對して驟然その態度を改めてかゝることとなつた。さうしてその結果は、島津久光と近衛忠熙との結合の上に推進められた文久維新の挫折から、さらぬだに接近しかけて居た薩藩と會藩との提携をいよ／＼固くすることとなつた。かやうして、京都を逐はれた長藩の攘夷即行派と、京都に占據して禁闕の守護を命ぜられて居た薩・會・兩藩との正面衝突は、到底回避され難い勢ひとなつて來た。文久は第四年目の二月で元治と改元になつた。文久四年正月、薩・會・兩藩の同盟に對して、憎惡の業火に燃える攘夷即行派の家老・福原越後・國司信濃・益田石衛門介・等が各自兵を率ゐ、相前後して上洛、嵯峨・山崎・の間に屯して朝廷に嗾訴し、藩主父子竝に七卿の御赦免を請うてやまなかつたが、元治元年七月十七日に及ぶと、君側の奸を除くと聲明して、遂に薩・會・兩藩の守兵の屯する皇居に對して進軍を開始し、こゝに忌はしい『九門の兇變』を惹起して居る。この戦闘は長藩側の惨敗に歸し、來島・久坂・眞木・等有爲の士が多くこれに斃れ、京都に於ける長藩の勢力は一木一石の末にいたるまでも掃蕩されてしまつた。毛利慶親父子は、福原越後以下の重臣を捕へ、上書して罪を謝し奉つたけれども、御聽許なく、その官符は松平の姓とともに褫奪され、同時に江戸の藩邸は破却されてしまつた。朝府に於ても有栖川宮熾仁親王以下七十餘人の公卿は、長人を庇護したりとの理由を以て

幽閉せられ、幕府の奏請した長州征伐の議は直に勅允となつた。先代・齊彬以來の光輝ある薩摩藩の公・武・合體主義は、今や事實上の佐幕主義となり、會津藩と協力して、各藩下士階層の間に磅礫をつあつた尊・攘・主義を尅殺しようとして、虎視眈々たりし現状維持派の爪牙たらしめるの危険にさへ瀕したのであつた。

南洲の赦免運動に於ける甲東の立場

かやうな情勢の下にあつて、薩藩尊王の大義を泥土にゆだね、反動的佐幕主義の爪牙たらしめんとする危険から救つたものは、いふまでもなく大久保甲東と西郷南洲とであつた。

これより先、南洲は、後見・久光の激怒に觸れ、三たび流竄の身となつて沖ノ永良部島に生がひのないう月日を送つて居たが、久光の苦心畫策になる文久維新の經綸が、一朝にして長藩の爲に覆されたことを眼のあたりに見ると、久光を始め閩藩の要人が、つく／＼と人材の必要を感じるやうになつて來た。殊に長藩のさうした勢力が久坂玄瑞・桂小五郎・等數輩の下士によつて培はれて居る現状を眼のあたりに見せられては、さしも聰明自ら用ふる久光も、痛切に新材材の必要を感じ、心ひそかに西郷の上に想ひを馳せざるを得なかつた。

かうした氣運が熟するにつれて、薩藩有識者の間に、死を決して南洲の赦免を諫争しようとする一つの熱烈な團體が起つた。その牛耳をとるものは黒田嘉右衛門（清綱）・伊地知龍右衛門（正治）・三島彌兵衛（通庸）・柴山龍五郎・永山彌一郎・等の面々であつた。これらの人々はいづれも南洲赦免運動の連判狀に血判し、死を以て後見・久光の宥免を請はうと乗出した。しかもかれらは、いづれも直接・久光に咫尺して諫争するの機會と便宜とをもたなかつたので、もつばら久光の近習役である高崎正風によりその熱意の上達を望むこととした。この場合、家老・小松帶刀は南洲と莫逆の間柄ではあつたが、前に南洲が久光の赫怒に觸れて三たび流罪に處せられた時、その判決書に署名した責任もあつた高崎正風のやうに、久光に對して自由にその赦免を請ひ難い事情もあつた。大久保甲東は側役で、まだ南洲の判決書に連署する程の地位ではなかつたが、かれと南洲との間に結ばれた斷金の交りは、あまねく人の知るところであつたので、大久保が南洲の赦免に口出しすることは、却つて久光の誤解を招き、逆効果を來す虞れがあつた。そこで高崎が衆に代つて、身を挺し、決死の覺悟で久光に諫争することとなつた。かれは機會ある毎に久光の面を犯し、しばしば南洲赦免のことに言及した。しかも侯の怒りは一朝にして解け難く、高崎が苦諫を重ねるたび毎に一層の不機嫌を増すのみであつた。しかるに高崎は、屈せず弛まず、或は先君・齊彬公の明鑑をいひ、或は南洲に對する薩藩の人望を説き、

又或は山階宮を始め奉り、全國諸藩の志士及び浪人の間に於ける南洲の聲望を擧げ「先君の御鑑識が曇つて居たと思召さるるや」とまで威儀を正して極諫するに至つた。かやうに口を極めて西郷の人物を稱揚し、久光の反省を求めることが却つて公の心火に油を灌ぎ、逆効果を來すの虞れあることに氣のつかぬ高崎ではなかつた。しかも日一日と切迫して來る天下の形勢、京洛の局面を思ふと、誠忠無比の高崎としてぢつとして居ることが出来なかつた。最後は屠腹して諫争する決心であつたから、かれは幾たびも久光の面を犯すことを恐れなかつた。久光もさすがに尋常一様の殿様ではなかつた。高崎が死を決しての諫争に漸くその心が解け、顔色の變りかけて來たのを見て取つた小松・大久保の兩人も、こゝぞと左右から久光に説き、遂に南洲赦免のことが聽許となつた次第であつた。藩廳は直ちに吉井幸輔・西郷信吾（從道）を召還使として帆船・胡蝶丸に乗せ、沖ノ永良部島に發遣した。西郷の赦されたのが、元治と改元の御沙汰があつて間もない、二月二十二日のことであつた。

第一次征長役に於ける南洲の殊勲

南洲が鹿兒島に歸つたことを聞くと、久光は直にこれを京都に召しよせ、命ずるに軍賦役を以てした。この時から南洲は、小松帶刀・伊地知正治・吉井幸輔・等と薩藩を代表して内外の樞機に參與す

ることとなつた。それが九門の兇變の發破する少し前のことで、久光は南洲に軍賦役を命ずると間もなく、五月九日、鹿兒島に歸つた。

元治元年九月二十一日、尾州侯・徳川慶勝は征長總督に任ぜられ、各藩の幹部を大坂に召集して軍議を開いた。南洲は薩藩を代表してその會議に列し、極力長藩の處分を寛大にすべきを説き、且つ自ら使して幕命を奉ぜしむべきをいつた。尾州侯がよくその説を容れたので、南洲は吉井幸輔・稅所篤の兩人及び二名の從者を伴ひ、單身飄然として大坂を發した。この時、尾州侯は南洲に護衛を附すべきを勧めたが、南洲は固くこれを辭し「談判の秘訣は、赤心をかれの腹中に置くにあり」といつて卒然侯の許を辭した。かくて南洲は、十一月二日を以て廣島に着し、進んで周防の岩國に入り、長藩の一門で宗家の顧問役を勤めて居た吉川監物に面會して、長州を説服することに取りかゝつた。

この時、南洲が吉川監物に就いて長藩に提出した媾和條件は、

- 一、朝廷に嗾訴を敢てした三家老に切腹を命ずること。
 - 二、山口に構築された新城を破壊し、萩に退去して謹慎の意を示すこと。
 - 三、三條以下五卿（七卿の中二卿はすでに去つて不在）を動座移轉せしむること。
- の三箇條であつた。さうして長藩が無條件でこの三箇條を容れるならば、征長軍は旗を卷いて東歸す

るであらうといふにあつた。吉川監物は、南洲の幹旋を多とし、直にこれを毛利慶親父子に説いて受諾させた。南洲の使命は、かくして立派に成し遂げられた。これは必ずしも長藩が征討軍の威力を恐れたからばかりではなかつた。この時長州は、英・米・佛・蘭・四國聯合艦隊の馬關砲撃に遭遇し、上下恐慌の眞最中であつた上に、藩内には俗論黨（重役層）がなほ相當の勢力を占め、さしも驚蹇な下士層も、遮二無二に和議を排して戦争を主張することが出来なかつたわけである。そこで南洲は小倉に渡り、副總督・松平春嶽に面會して、長州が無條件で和議を受諾した顛末を報告に及んだが、たまたまその一箇條である五卿動座の件に關して、長州に異論が生じ、危く決裂を見んとするに至つたので、南洲は筑前藩士・月形洗藏・早川勇平の兩士を伴うて馬關に引返し、そこで高杉晋作と會見した。長藩下士階層の猛者達は、南洲が來たと聞いて、今ぞ報復の時至れりとはかり、眈を^{まなこ}決して今にも事を擧げようとする勢ひであつたが、南洲は少しも動ぜず、諄々として大義名分を説き、かれらを感じさせた。五卿の從者中、土佐藩下士階層の士・中岡慎太郎・土方楠左衛門（久元）等もみな南洲の人格と誠意とに感激し、結局五卿が自發的に動座を申出るに至つたので、事は圓滿に解決した。この時、南洲が高杉晋作と會見し、薩・長・兩藩の傳統的皇室中心主義を説いて、兩雄が互に相反噬するの結果、徒らに反動佐幕主義者の乗ずるところとなり、時局を逆轉させることが君國の一大事である。

とを説破したのが、やがて薩・長・聯合の素地をなしたことは、何人も疑ふものはあるまい。だが、この素地の上に躍出して薩・長・兩藩の間に斡旋し、明治維新の基礎である薩・長・聯合の盟約を締結させたものは、五卿の從者の一人である中岡慎太郎と、同じ土佐藩下士階層出身の惑星であつた坂本龍馬との兩人であつた。

坂本龍馬・中岡慎太郎の登場

翻つて、これを京洛の局面に見るに、元治元年七月、九門の戦が薩・會・聯合軍の完全な勝利に歸して後、土佐藩下士階層政權の控援を失つて完全な孤立に陥つた長藩は、やがて來るべき幕府の征討軍をその四境に引受けて最後の戦を賭する前に、その準備として、藩主父子をめぐる現状維持的俗論黨、すはち重役層を根こそぎ叩きつけて、全藩の結束を固くする必要に迫られて居たわけであつた。これはちやうど土佐藩で老公・容堂が蟄居謹慎を解かれると同時に、後藤象二郎を檢事總長の地位に推して斷行した下士階層尅殺と正反對の行き方であつた。わが維新史に於いて最も注意を要するのは、各藩に於けるこの間の出來事と、それ／＼のもつ意義とでなければならぬ。一方、九門の戦に於ける勝利者である薩・會聯合軍の側を見るに、これはまた新たに來り加はつた容堂の公・武・合體主

義政權を中心とする土佐藩の勢力により、いよ／＼その強力政治斷行の準備が整ひ、何時でも兵を進めて、現状維持的俗論黨征伐に成功した長藩の下士階層政權を打倒し、再び文久維新を蒸し返す態勢が完備して居たのであつた。もしこの情勢がその儘に進み、薩・會・土・三藩同盟の基礎の上に文久維新が蒸し返されたとしたならば、それは初めに島津齊彬・同久光・山内容堂・近衛忠熙・等あたりの企畫した公・武・合體主義的新體制と比べて、著しく幕府側に傾いた改革が出來上つて居たに違ひない。なぜかといへば、九門兇變後の三藩同盟には、長州の代りに會津藩が一枚加はつて居たし、それだけでなく、文久三年以來長藩の薩藩に對して執つた必要以上の敵對行動は、薩藩を驅つて少しづつ右へ／＼と逐ひやつて居たからである。

すなはち、九門兇變以後は、薩・長・兩藩の正面衝突が必死の勢ひとなり、その危機が目睫の間に迫つて來て居た。ところがこの時にあたり、土佐藩から意外な「いたづら者」があらはれて、行詰つた時局を意外な方向に轉換させた。その意外な「いたづら者」こそ、坂本龍馬と呼ぶ土佐藩下士階層出身の自然兒であつた。

坂本龍馬は、土佐藩の下士階層に屬し、初めは尊・攘・主義一本槍の武市半平太等と志を同じくするものであつたが、朱子學の中でも一段と頑固な南學系統の教養で骨組せられ、生なかな上士の到底

及びもつかぬ窮屈な行儀・作法・でしつけられて居る半平太とは、とかくそりが合はず、なにかにつけて衝突しがちであつたので、早くから脱藩して、名詮自性、雲龍の奔騰して天に昇るが如く、天馬の翼を驅つて空をかけるが如く、無軌道に奔放に日本國中を漂流して、その人の主義・理念・には頓着なく、その人の地位・立場・をも問はず、有らゆる方面の偉人・傑士・と交遊して、その思想・行動・を己れの養ひとして攝取して來たものである。龍馬は、前述の如く、薩・長・兩藩下士階層の反目が日一日と激化し、その正面衝突が目睫の間に迫りつゝあるのを見、同じ土佐藩の下士で、自分と前後して脱藩し、京攝・の間を放浪して居た中岡慎太郎なる人物と、殆ど時を同じくして、息詰るやうな局面を打開し、薩・長・下士階層の間を調停して、その關係を文久元年八月現在の姿に取戻さうとかゝつた。坂本・中岡・の兩士は、薩・長・の現に見るやうな反目が、遂に三藩勤王の傳統的大義を没却し、その幕府の頑迷派をして漁夫の利を得せしむるに終るべきことを憂へ、熱心に兩藩の間に奔走し薩藩の小松・大久保・西郷・等に説き、長藩の桂・高杉・等を宥め、遂に下士階層を中心とする薩・長・聯盟を復活させることに成功した。すなはち、慶應元年一月二十三日、小松・大久保・桂・坂本・の四人が京洛なる西郷南洲の寓居に會して、六箇條からなる盟約を締結した。これより先、西郷は、元治四年二月を以て久光からその罪を赦され、九門の兇變に先だつこと四箇月、すなはち三月十七日を

以て京都に馳上り、薩藩の下士階層を代表して目覺ましい活動を開始して居たものだ。かれが青蓮院宮に謁を請うて、その公・武・合體主義に失望し、轉じて岩倉村に岩倉具視を訪ひ、互に相許すに至つたのはこの前後のことであらう。

薩・長・聯盟の成立と際どい土佐藩の立場

かゝる間にも坂本龍馬・中岡慎太郎・の斡旋によつて復活した薩・長・下士階層聯盟の電撃装置は、いよ／＼その埋没工事を終り、遂にそのスイッチを入れるばかりに準備が整つて居た。しかしいよいよスイッチを入れる瞬間になつて見ると、そこにまだ完全に清掃しきれぬ現場作業が残されて居た。それは何であるかといへば、山内容堂を背景とし、後藤象二郎を首班とする土佐藩の公・武・合體的新政權の始末だ。一體薩・長・下士階層聯盟の成立したのは何人の力かといへば、これは一から十まで坂本龍馬と中岡慎太郎との盡力によるものであつたこといふまでもない。その坂本にも、中岡にも脱藩當時の事情はともかくも、今となつては十分に後藤新内閣の息がかゝつて居た。殊に龍馬にいたつてはその點が著しく、長崎以來完全に後藤の人物と手腕とに傾倒し、海援隊の經費の如き、殆どそのすべてが後藤の手から支給されて居るといふ有様であつた。薩・長・下士階層聯盟の舉兵討幕計畫

がいよ／＼スイッチを入れようといふ間に迫つて、後藤象二郎一世一代のべてん立に妨げられ、容堂の書卸した慶喜の大政奉還を前提とする慶應維新のために幾日かの席を譲らなければならなかつたのもそのためであつた。

これより先、後藤は老公・容堂の蟄居謹慎が解け、これを高知に迎へて新内閣を組織すると同時に、自ら検事總長の地位に立つて、小南・武市・一派の一網打盡に取りかゝり、野根山の斷獄を最後として過激な攘夷倒幕主義者を完全に尅殺してしまつたのであるが、容堂はこの大獄の後、大いに後藤の身邊を憂慮し、命を授けて難を上海に避けさせ、舉兵討幕派のほとぼりが冷めるのを待つて、これを長崎市の土佐藩商法所の留守居に任じたのであつた。

後藤はこゝで坂本龍馬と相識り、互ひに肝膽相照らし、龍馬のためにその海援隊の事業を援け、これに藩費を給して土藩のために大いにその開國進取主義の實際的經驗に資さうとした。とかくする内に京都の情勢が切迫を告げ、薩・長・下土階層聯盟復舊の幹旋者である龍馬から、かれらの間に舉兵討幕の密謀が熟し、その舉兵の期日の切迫しつゝあることを知つた後藤は、驚いて起上り、龍馬と携へて長崎を去り、京都河原町なる土佐藩の藩邸に入つたのが慶應三年六月十四日のことであつた。象二郎は龍馬の幹旋で、直に薩藩の小松・大久保・西郷・等と會見し、土佐藩も是非その舉兵討幕計畫の

一員に加へて貰ひたい。それには容堂を説得して來る必要がある。その間暫く舉兵の期日を延ばして貰ひたいと、巧みにかれらを欺いて納得させた後、急遽高知に歸り、容堂に調して事情の切迫を告げ、すつかり大政奉還の筋書を作り上げた上で京都に引返した。後藤は京都に引返すと、前の約束は忘れたかのやうな顔で、慶喜に大政を奉還させる別の切札を、西郷と大久保との前に投出すのであつた。實に人を喰つた御家老さまだ。

後藤のべてん立を寛假した小松・大久保の包容力

後藤から思ひもかけぬ大政奉還の建白に關して相談を持ちかけられた、西郷と大久保との憤激は察するに餘りある。しかし後藤は、その得意の辯舌で、大政奉還の建白を舉兵討幕への第一段階として力説したものであらう。西郷も大久保も、幕府と併せて土藩撃つべしとは、いきまかなかつたけれども、たしかに後藤のべてん立のために空しく舉兵の期日を遷延させられたことを憤つたに違ひない。しかし薩藩側では、小松がまづ後藤の雄辯に魅せられて大政奉還の建白を承認し、ついで大久保も溢濫ながらこれに賛成した。ひとり西郷は最後まで頑張つたが、遂に黙つてかれらのなすが儘に任せるといふ態度に落ちた。この後藤の公・武・合體主義的べてん立に對する西郷と大久保との態度に見ても、

小松帯刀・大久保甲東・兩人の尻には、まだ先君・齊彬以來の公・武・合體主義の殼が頑固にこびりついて居て、完全にそれから脱却することの出來ずに居た事情がはつきり分る。そこへ行くに西郷ひとり、業に已に久しい以前からさうした薩藩傳統の頑固な殼を綺麗に拂ひ落して居た。これを要するに小松も、大久保も、王政復古最後の場面までまだ先君・齊彬以來の公・武・合體主義の殼を尻にくつつけたまゝ働いて居たのであるが、西郷ひとりとはさうした頑固な傳統の殼を完全に拂落して、薩・土・兩藩下士階層の徹底した尊王倒幕の理念に融込んで居た事情がよく分る。死なば諸共と堅く誓つて、互に相扶掖しつゝ生死の境を乗り越えて來た西郷・大久保・兩雄の間に、一髮の罅隙の生じたのは、恐らくこの頃からと見るべきではあるまいか。畢竟するに、薩・長・の不和といふものは、長藩によつて代表せられる身分的下士階層の勢力と、薩藩によつて代表せられる官職的下士階層の勢力とが、渾然融合しようとして融合しきれなかつたところに起つて居たのだ。小松や大久保は、官職的下士階層の行くべき當然の道を辿つて明治維新政府の樞機を執り、桂は井上・山縣・伊藤・等の後進を率ゐ、身分的下士階層の進むべき當然の道を進んで明治維新の皇謨に參畫したわけだ。この兩者のすれもつれつして行く複雑な局面の間に立つて、西郷たゞ一人が官職的下士階層本來の教養からも完全に脱却することが出來ず、さりとて身分的下士階層の勢力ともしつくり融合ふことが出來ず、その中間にあつ

て独自の道を歩んだために、西南戦役と呼ばれる、大きい悲劇に行き當らなければならなかつたわけだ。

第三章 維新前夜に於ける大久保利通

第二次征長役に於ける大久保の殊勲

一方で坂本・中岡・兩氏の斡旋により、一觸即發の危機にまでとりつめて居た薩・長・兩藩の感情が漸くにして緩解を來し、兩藩の間に尊王倒幕の大義を基とする聯盟の密約が成立しようとして居た際、他方會津・桑名・の兩藩を左右の翼とする幕府は何をして居たかといふに、これはまた西郷南洲の斡旋で一旦解決を告げた長藩を追究し、あくまでもこれに膺懲の鞭を加へ、再び立つことの出來ぬ程の制裁を下さうといふので夢中になつて居た。かれらは長藩の下士階層が、そのいはゆる俗論黨征伐の名の下に重役層を尅殺した行爲を以て、自我の面上に泥塗られた如き憤懣を感じ、それを名として無謀にも長州再征の師を起したのであつた。すなはち慶應元年五月二十五日、將軍・家茂は天下の

諸侯に號令し、自ら大兵を率ゐて大坂に下り征西の兵を勅した。

大久保甲東、閻老坂倉勝靜を讒弄して出兵を拒む

これより先、甲東は南洲と謀り、天下の大藩が時局に對して一致の歩調をとり、以て國難を克服すべき大方針を定め、その第一着手として、甲東自ら吉井友實・税所篤の兩人を率ゐ、まづ筑前に赴き、こゝで土佐藩の士中岡慎太郎と會見し、更に久留米及び筑前の兩侯に謁して尊王の大義を説き、長州の處分等、舉國一致の體制樹立を阻む一切の難問題を、至公至平に取捌くべき策を決しつつあつた。この時上國では、すでに將軍の征西準備が整ひ、閻老坂倉勝靜が薩藩の出師を督促するためその重役の出頭を求めつゝあつた。甲東は薩藩重役全員の推すところとなり、身を挺して坂倉閻老の召喚に應じ、やがてその面前に出頭した。坂倉の曰く、

『本日貴殿の御出頭を煩はしたのは餘の儀でない。すでに御承知の如く、長藩儀、再三朝意を蔑ろにし奉り、幕命を輕んじ、天下の紀綱を紊る段、不届至極に付、再征の儀仰出されたるころ、貴藩を始め大藩に於いて未だ出師の實を見ず。隨つて小藩の諸侯もみな逡巡躊躇の色あること現に見らるるが如くでござる。貴藩儀は三百年來當將軍家とは事の外親密の間柄にもあり、

率先出師して長藩の驚蹙を制し、以て宸襟を安んじ奉り、速かに幕府の威嚴を重からしむるやう御盡力願はしむ』

坂倉のこの語を傾聽して居た甲東は、遽かに聾者のふりして、閻老の言葉がはつきりと聽取れなかつたもののやうに、さつとその顔色を變へて答へた。

『はて何と仰せられまするか。弊藩何の犯せる罪あつて御討伐を蒙むる次第でありませうや。さあれ、公儀に於いて一たび御討伐と決定の上は止むことを得ませぬ。仰せの趣、確かに藩主に相傳へ何分の措置を執らすることと仕りませう』

と答へさま、甲東は卒然として座を立つた。坂倉は慌てて甲東の袂をとらへ、

『これは驚き入つたる御聽違へかな。如何に耳遠ければとて餘りに卒爾も甚だし。膝を進めてとつくりと御聽き下され』

と、更に聲を大にして、薩藩の出兵を要求した。甲東は初めて聽取し得たもののやうに、儼然容を正し、

『すでに各藩に對して御布達のありましたにも拘らず、その何れも躊躇して發せざる色のありまするは、察するところお上に於いて名なき戦を押切らうと遊ばされるからでござりませう。將軍

家と弊藩とが特別親密の間柄であること、正しく仰聞けの通りではありませんが、名なき戦のためには理由なく兵を出せよとあつては、恐れながら御辭退申上げるの外はござりませぬ。』かくて甲東は、聾者の體を装ひ、さんぐに板倉を醜弄した末、遂にはつきりと幕命を峻拒してしまつた。この時南洲はすでに歸つて藩にあつたが、書を甲東に送り、

この度の應接振り、名義凜然として天下の耳目を洗刷し、わが薩藩をして高視闊歩せしめ、俯仰愧づる所なき近來の快事、感謝の至りに候。

とまで激賞した。幕府の長州再征は、大久保の這個政治家的手腕に打碎かれて滅茶々となり、防・長・の四疆を壓して迫つた幕軍は隨所に潰敗したばかりでなく、その結果が薩・長・土・藝・等各藩の結束をいよゝ鞏固にし、幕府自滅の期を早めたことは何人も疑ふものはない。

將軍・徳川慶喜の大政奉還

間もなく將軍・家茂、大坂城に薨じ、慶喜が入つてその職を襲つたが、形勢は急轉直下の勢ひで發展し、幕府側には新知識も多く、軍艦・兵器・も足りて居たのであるが、何もの力もよく狂瀾を既倒に回すことが出来なかつた。

こゝで話が薩・長・聯盟側の消息に戻る。急遽高知に歸り、老侯・容堂に謁して土佐藩の一舉参加を納得させて來るといふ口實で、擧兵の期日を延期させた後藤象二郎のべてん立が分ると、西郷も、大久保も、一たびは火のやうになつて怒つた。しかし大久保が小松とともに後藤の雄辯に魅せられて、一步步々大政奉還の建白を順序として認めることに傾いて行つたことは、前に述べて置いた通りだ。ひとり最後まで後藤のべてん立を許すことの出来なかつたのは西郷であつた。土佐藩の中でも、中間慎太郎の如き、板垣退助の如きは、初めから熱心な擧兵討幕主義者であつたから、心中ひそかに後藤の建白を喜ばなかつたのであるが、坂本龍馬は前に述べて置いたやうに、長崎以來全く後藤と同心一體で、例の河原町の下宿の一階に陣取り、後藤のスポークスマンとして極力その大政奉還運動を援助して居た。この際かれは、『十段目は鐵砲玉』といふ標語を工夫し、血眼になつて詰寄せる火の玉のやうな擧兵討幕主義者の眞向から、その標語を釣瓶打ちに浴せかけ、われ／＼の大政奉還運動も結局は煙硝臭いところに落ちて行くに違ひない。今はその鐵砲玉を正義化する當然の順序を履んで居るところなのだと強調しつゝ、かれらの憤激を緩和することにつとめて居た。

後藤はこれより先、若年寄・永井玄蕃頭（尙志）とは、長崎で相會つてよく時局を談じ、具さにその人物・識見・を認めて居たので、まづ永井を説いて大政奉還の止むを得ざる所以を悟らせ、永井を通

じて關老・板倉周防守を説き、十月四日、神山・福岡・寺村・等四人連署の建白書を呈出して、將軍にその執達を依頼した。その結果、十月十三日、二條城に於ける歴史的大會議となり、後藤の大雄辯は見事にその効を奏して、將軍・慶喜は惜氣もなく二百五十六年の軍職を投出すこととなつた。

僅々數十日間で覆へされた慶應維新

尤も二條城で後藤が將軍に面接して直接利害を説いたといふことに關しては異説があり、それによると勝海舟の談話筆記なども、全部信するに足りぬといふことにもなるが、何れにしてもこの局面に於ける主役が後藤であつたことを打消すことは出来ない。かれの雄辯機略の目覺ましかつたことは何人も認めるところだ。後藤のためにその舉兵討幕計畫を覆された薩・長・下士階層聯盟は、越えて慶應三年十二月九日の夜、小御所會議の席上で再び山内容堂及び後藤象二郎の合作にかゝる公・武・合體的慶應維新を覆した。

すなはち文久維新と明治維新との間に横はる慶應維新は、徳川慶喜が關下に伏して大政奉還の勅允を得てから、小御所會議に至る僅々數十日間でその終焉を告げて居るわけだ。この數十日間こそは、行政の責任が幕府舊機構の上にもなく、それに代るべき朝府の新機構もまだ成立つて居ず、全く無政

府状態にあつたといつてよい。この時にあたり、鎌足以來の梟雄として許される岩倉具視を洛北・岩倉村なる幽居から立たせ、新政府の中堅として廟議に千鈞の重きを加へしめたものは、一に大久保甲東の力であつたとせねばならぬ。當時同志の一人であつた井上毅が、後に記した回顧録の中に次の一節があつた。

同志中、大久保は殊に深く岩倉と交り、しばし行きて之を訪ひ、その身邊の護衛なきを慮り、毎夜武士を遣はして之を護らしめられたれど、岩倉は當時之を知らざりしといふ。

既に述べた如く、岩倉具視は堂上公卿の末班から飛出した偉材であつて、天資聰明敏達、才氣膽略群を抜き、初め熱心な公・武・合體主義者として九條尙忠の懐刀となり、關東なる安藤對島守信正と相策應して皇妹・和宮親子内親王の御降嫁に斡旋し、文久元年十月には内親王の御降嫁に扈從して關東に下り、關老に説くに安政の大獄に連累した青蓮院宮あそらんのみやを始め奉り諸卿の罪を赦すの議を以てし、その内諾を得たとある。この間に於けるかれの行動は、明かに公・武・合體主義の域を越え、佐幕主義の境にまで深入りしたものであつて、文久維新とともに青蓮院宮がその幽禁を解かれ、近衛・三條・鷹司の諸卿が地位を復するに及び、その走り過ぎの責を負はなければならなかつたことは當然の成行であ

つた。九條尙忠・久我建通・千種有文・富小路敬道・等の諸卿の失脚とともに、岩倉もまたきびしい勅勘の身となつた。文久二年九月二十五日には洛中の住居を禁ぜられ、その采邑・愛宕郡岩倉村に蟄居しなければならなかつた。さうして文久三年正月十三日には更に、謹慎を命ぜられたものだ。和宮一件に與つたかれの行動に對する主上の御憎しみが如何に深かつたかを察すべきだ。

大久保甲東と岩倉具視との通謀

しかるに、さうして一旦朝府に於ける幕府の走狗とまで睨まれた岩倉具視ではあつたが、これはまた世にいふ『公卿悪』(公卿悪の悪は倫理的の悪を意味せぬ)の典型的人物で、洛外なる采邑・岩倉村に蟄居中、各藩重役層の公・武・合體主義を一足飛びに飛越し、薩の西郷・大久保・小松、長の桂・廣澤・山縣・品川・等と通謀して擧兵討幕の計畫を進めて居たのであるから、その人物の尋常一筋縄で行くものでなかつたことを知るべきだ。この岩倉と最も深く相許したものは大久保甲東であつた。岩倉はその勅勘を蒙つた初め、身に綿衣を纏ひ西賀茂なる靈源寺に竄入し、ついで松尾の西芳寺に移り、更に洛北なる岩倉村に屏居して息をこらして居たものだ。この岩倉村の屏居といふのは、三間から成る茅屋で、纔かに雨露をしのぐに足る程のもの、當時は老僕ただ一人の仕ふるものがあつたのみで、勅王の浪士達は岩倉を呼んで奸物となし、幾たびかこれを斃さうと企てたこともあり、その身邊は頗る危

險を傳へられて居たものだ。大久保の心入れで薩藩の士藤井良節がまづこれを訪ひ、ついで香川敬三・大橋愼三等の至るに及び、その身邊は漸く安全となり、従つてこの梟雄が再びめまぐるしい政機線上に立現はれて華々しい活躍を演ずる氣運は動いて來た。大久保甲東が最初岩倉と相識つたのは文久二年、島津久光に扈從して上洛した時で、その際勅使・大原重徳の携行した勅書は岩倉苦心の末になつたものとされて居る。だが、岩倉の蟄居を解かれ、公然參朝することの出来る身となつたのは孝明天皇崩御の翌年、すなはち慶應四年三月のことであつた。それまで洛北に幽居中の岩倉は、多くの場合合同村なる柴田某の家で密に各藩の志士と落合ひ、密議を凝らして居たもので、坂本龍馬を始め品川彌二郎・大久保甲東・黒田清隆・木戸孝允・廣澤兵助・西郷南洲等の諸雄またしばしば岩倉村を訪ひ、この梟雄と回天の謀をめぐるした。この間岩倉は、密に中御門中納言經之を通じ、大原重徳以下の朝臣に説き、同志を糾合して堂上公卿の間にも擧兵討幕主義の一黨を組織し、いはゆる暗中飛躍を怠らなかつたので、自分は洛北・岩倉村に幽居しつつも、その氣脈は常に朝府に通つて居る。一朝の幽禁を解かれ、岩倉村から歸つて廟堂にその姿を現はすに至ると、電光石火、内には三條實美と聯携し、外には京洛の擧兵討幕主義者と策應し、小御所會議の一夜、一氣に土佐藩の老公・山内容堂及びその懐刀である後藤象二郎を樞軸とする慶應維新の劃策を覆した。まことに疾風迅雷、耳を蔽ふに

違なからしむる物凄い手腕とはこれをいふのであらう。

第五篇 明治維新と大久保利通

第一章 新體制草創期に於ける大久保の三大功業

戊辰戦役の兵火を約束した大久保の強硬意見

慶應三年十月十四日、徳川慶喜が大政を奉還するに至り、朝廷は直ちにこれを允可遊ばされたけれども、ついで征夷大將軍の職をも辭せんと申出づるに及んでは、そこに聊か躊躇の色があつた。由來朝府には、永年に互り幕府との間に頗る緊密な關係を結び、それと歩調を一にして進んで來た公卿の一派があつて、政權は永くこれを幕府に委ね置くを却つて朝廷の御爲として居たからである。この時に當り、幕府譜第の諸侯は多く朝府の召命に應ぜず、將軍の大政奉還は、虎視眈々として政權を窺つて居る二・三・外様大名の策謀に出たものであつて、われ／＼は飽くまでも幕府の爲にかれらの非

望を打ちひしがねばならぬといふ意氣込で燃え立つて居た。しかし當時は京都も大阪もまだ嚴重に幕兵で固めて居たので、朝府は容易に新政治機構の組織に著手することが出来なかつた。十月十四日、慶喜の大政奉還で一たび出鼻を挫かれた舉兵討幕派の巨頭・岩倉具視が、この時突如召命を拜して京都に入った。それはまことに十一月八日のことであつた。かくてその月の末には、かねて岩倉一派の舉兵・討幕・主義に加擔して居た藝州の兵が先づ京都に入り、長州の兵もついで攝津の西ノ宮に上陸した。

すでに兵備が整つたので、岩倉具視は、西郷隆盛・大久保利通・の兩士と謀り、中山忠能・正親町・三條實愛・の二卿をして密に維新の大號令を奏請させた。

慶應三年十二月八日、薩摩・土佐・安藝・尾張・越前・の兵は、嚴重に宮門を警護した。この日、岩倉具視は、初めて参内し、天顏に咫尺して聖旨を奉戴した。毛利公父子の官位は舊に復せられ、速かに兵を率ゐて入京し、非常の改革に際し、全力を擧げて皇諱を翼賛し奉るべきの御沙汰を賜はつた。果然、王政復古の大號令は、翌九日を以て、次のやうに渙發せられた。

徳川内府、従前御委任の大政返上、將軍職辭退の兩條、今般斷然被聞食候。抑癸丑以來未曾有の國難、先帝頻年被惱宸襟候次第、衆庶所知に候。依之被決叡慮、王政復古國威挽回の御基本被爲

立候間、自今攝・關・幕府等廢絶、即今假に總裁・議定・參與・の三職を置き、萬機可被爲行、諸事神武創業の始に原づき、緝紳武弁・堂上地下・の別なく、至當の公議を竭し、天下と休戚を同く可被遊叡慮に付、各勉勵奮來驕惰の慣習を洗ひ、盡忠報國の誠を以て可致奉公候事。

この大號令中、攝・關・廢止の一條は、いふまでもなく朝廷自體の政治機構改革を意味し、その組織を藤原氏の攝・關・職設置以前の王政に復することを意味したものであり、幕府の廢絶はいふまでもなく、賴朝以來、統治の大權が武門の手に移つて居たのを、斷然朝廷の手に回收することを意味したものである。維新の皇諱が、まことにこの時を以て確立したといふべきだ。

しかし朝廷が、徳川慶喜の奏請にかゝる大政奉還の願意を容れ、同時に征夷大將軍の職權をも御回收遊ばされることに御内議の決定を見るまでには、内面的に幾多の委曲を経て居たことはいふまでもないことだ。そも／＼大政奉還の議は、十五代・慶喜の時を以て始まつたことでなく、十四代・家茂の時にも一たび頭を擡げたことがあつたものだ。家茂が征夷大將軍の職を拜辭致し度しとの情願を提出した時には、朝廷にまだ確乎たる御準備がなく、従つてそれを御允許あらずべき御決意が立たなかつた。すなはちその際は、各藩合同、舉國一致して國難に當るべきを以て家茂の辭意を御慰諭遊ばされたのであつたが、大久保甲東は、その頃からひそかにこれを以ての外のことと考へて居た。かれ

は、近き將來に於いて、若し再びこのことがあつた際には、電光石火、耳を掩ふに追あらせずして、願意御嘉納の勅答に及ぶべきであるといふことを、寄り／＼同志の間に通じ、その準備を怠らなかつたものだ、かれは、慶喜が大政奉還の奏請を執行するに至つた頃から、朝廷に蟠る幕府派の公卿と譜第諸侯との間に、やがて組織さるべき新政府の機構に關して必ず異議が起り、王政復古の大精神を徹底的に具現する上に由々しき故障の生ずべきことを見透して居たので、さういふ場合には乗るか反るか、かの關頭に立ち、一戦を賭してまでも、御新政の機構の上から封建的舊勢力を一掃することの必要を確信し、それにつき、再起の岩倉卿に上書して次のやうな強硬意見を吐露して居た。

今般以御英斷、王政復古之御基礎被召立度御發令に付ては、必ず一混亂を生じ候やも難圖奉存候得共、二百年の慣習に汚染候人心に御座候へば、一たび干戈を動かし候て、反て天下の耳目を一新し、中原を定められ候御盛舉と相成候へば、死中活を得るの御着眼最も急務と存じ候。

この意見書こそは、曩に述べた土佐藩の老公・山内容堂の懷刀として、舉兵・討幕・の間際に至り、得意のべてん立ちで、西郷・木戸・大久保・等の舉兵・討幕・主義に基調する王政復古の計畫を土臺から覆した、著者のいはゆる慶應維新の計畫を、更に根こそぎ打倒さうとする最も重大な根本方針の樹立を意味するものであつた。さうしてこの大久保の建議こそ、鳥羽・伏見・に於ける朝・幕・兩軍

の衝突から北陸・奥羽・と延焼して、蝦夷地の一角に及び、纔に鎮火した戊辰戦役の火の手を約束するものであつた。しかも大久保の首唱にかゝるこの強硬意見を翼賛した面々は、西郷南洲・吉井友實・伊地知正治・岩下方平・等同藩の士であつて、その密議討究が京都なる岩下方平の邸で行はれた。王政復古の大號令が渙發せられるまでには、岩倉がこの意見に同意し、中山・正親町・三條・中御門・の諸卿も、その議に與つて居たことはいふまでもない。

小御所會議に於ける岩倉・大久保の立場

大號令宣下の當夜、新たに任ぜられた總裁・議定・參與・の三職が小御所に會して御前會議を開いた。最初に設置された總裁は、有栖川宮熾仁親王であつた。初め總裁局に副總裁・顧問・及び輔弼・の三役を設置することとなり、三條實美・岩倉具視・の兩人が副總裁に任じ、木戸孝允・大久保利通・小松清廉・後藤象二郎・の四人が顧問に任じ、中山忠能・正親町・三條實愛・の兩人が輔弼に任じた。また三職の中の議定には、仁和寺宮嘉彰親王・山階宮見親王・中山忠能・正親町・三條實愛・中御門經之・島津茂久・徳川慶勝・淺野茂勳・松平慶永・山内豊信・の十人がこれに任じ、參與には、大原重徳・萬里小路博房・長谷信篤・岩倉具視・橋本實梁・小松清廉・岩下方平・西郷隆盛・大久保利通・

丹羽賢・田中不二麿・辻維嶽・櫻井元憲・久保田秀雄・中根師質・酒井忠温・毛受洪・後藤象二郎・神山郡廉・福岡孝弟の二十人がこれに任じた。ところがこの小御所會議は、前將軍・徳川慶喜の待遇問題に關し、截然二派に岐れて鎬を削るのであつた。尾張・越前・の兩藩は、土佐藩とともに極力徳川慶喜の優遇を主張し、議定・山内豊信は參與・岩倉具視に迫つて、この會議に、徳川氏及び會津藩の代表を斥けたことの不公平を鳴らし、是れ公議を重んずるの御趣意に悖るものであると痛論した。具視が徐ろにこれを駁して、徳川氏の罪を數へ、その政權の虚名のみを奉還して、依然土地・人民の實力を領有する間は、慶喜の恭順も畢竟信すべきでないと主張し、參與・大久保利通・議定・島津茂久・同・淺野茂勳等これに賛し、論難駁撃、深更に至つて決せず、あはや如何なる不祥事の發破を見んも計られざる形勢となつて來たので、畏くも皇上には議場整理のため暫くの休憩をのらせ給ふに至つた。この論議の席上で、大久保甲東が岩倉説を支持し、慶喜にして若し眞に大政を奉還するの誠意があるならば、速かに淳和・英學・兩院の別當職を辭し、約八百萬石の領地を納めて、退去謹慎の意を表すべきであると強硬意見を吐露したことは當然である。少憩の間、岩倉は密かに一振の短刀を懷らし、『再開の後、容堂等なほ前議を執つて動かさることあらば、事を立座の間に決せん』と、非常の決意がその面上に溢るるのを見て、廣島藩士・辻維嶽が驚いてこれを後藤象二郎に耳打ちし、後藤が

密にこれを容堂及び春嶽に告げて退席させたので、十日の曉に至り、廟議は滞りなく一決した。

辭官・納地・問題の本質

こゝに辭官・納地・といふのは、徳川慶喜は、須くその朝官・淳和・英學・兩院の別當を辭すると同時に、全國五十七箇國にわたる約八百萬石の領土を朝廷に奉還して恭順の意を表し、大政奉還の實を行ふべきだといふ主張で、これは岩倉一派が維新の經綸を行ふ資源を取敢ず徳川氏の八百萬石に求めようとした、新政權最初の財政策であつた。この時、諸大名は概して嘉永・安政・以來の國難に財庫を傾け盡して、その藩政は全く破綻に瀕して居た。朝府の御窮狀はもとよりそれ以上で、畏れ多くも御手許には半金の御貯へさへなき有様であつた。すなはち將軍は大政を奉還し、王政は古へに復したけれども、諸大名にも、朝府にも、維新の經綸を行ふべき財源といつては殆ど何もない。そこで第一に立案された財政策は、徳川氏約八百萬石の領土を沒收して、これを當座の財源に充てるといふにあつた。これは『至當の公議を竭し、天下と休戚を同じく』遊ばされるといふ前掲・大號令の御趣旨に照して考へると、異議の起りさうなことであつた。なぜかといへば、徳川氏はもちろん、大名・小名、一齊にその版籍を朝府に奉還し、新政府の財源をしっかりとした郡縣制度の基礎の上に置いてこそ、

維新の御政道は立つのである。しかるにひとり徳川氏のみを追削し、その領土を没收して新政府の財源に充てるといふことは、たとひ岩倉一派の舉兵・討幕・計畫が覆つた窮餘の策として止むを得ざるに出でたものであつたにしても、天下の人心を悦服させることの出来る正道ではなかつた。

慶永・慶勝の兩公は、命によつて慶喜を二條城に訪ひ、辭官・納地のことを勸告した。會津・桑名を始め諸藩諸藩の兵は、目を瞞らし腕を扼して兩公に迫り、薩・長・の奴隸と罵つて、將に危害を加ふるに出でようとするのであつた。兩公は、薩・長・兩藩が故らに苛酷の朝命を矯め、慶喜を激して徳川氏討滅の名義を得んとしつゝあることを諷し、極力その志を宥め、且つ速かに大坂に下らんことを勧めた。蓋しこの時の情勢として、慶喜が二條城にあつては、到底その部下と薩・長・兵との衝突を避けることが出来なかつたからである。慶喜は泣いて大坂に下つた。そこで諸兵士も皆その後を追つて大坂に下り、京都は漸くにして靜穩に歸した。朝府は更に兩公に命じ、慶喜若し辭官・納地・の二件を承諾するならば、寛典を以て議定に任じ、且つ佐幕の公卿・諸侯・をも朝官に採用すべしと説かせたけれども、慶喜はなか／＼それを承諾しなかつた。すでにして兩公が苦心の結果、慶喜は納地の一事を除き、その他盡く朝府の提出した條件を容れて折合はうとしたが、今度は大久保・西郷・等薩州の代表者がそれを承諾しない。官位は空名であつて、土地は實力である。實力を捨てな

いで政權返上とは何事であるかといふので、また／＼尾・越・土・三藩の士と大衝突を來し、三藩の士はすでに決然袂を拂つて徳川氏と進退を共にしようとするまでに至つたが、結局岩倉具視の斡旋で薩・藝・の方が讓歩することとなり、領地返上の一項を削除して、京都と大坂との確執も、こゝに漸く平和の解決を見るまでに漕ぎつけた。

この息づまるやうな時局の推移を通して、岩倉が幕府側と折衝するに臨み、如何にその空疎な名分の争ひを避けて、財政經濟の實質に重きを置き、徳川氏二百五十餘年の政權を接收しようとして努めて居たかを知ることが出来ると同時に、そこに維新の皇謨を雙肩に負うて、新政の前路に横はる山の如き障礙を戰車の如く凌夷して進ませた、鐵牛の如き大久保の輓引力をも如實に親ふことが出来る。

鳥羽・伏見の戦火

尾・越・土・三藩の斡旋によつて、薩・藝・兩藩と幕府との間に横はつた暗雲もどうやら一掃せられ、時局は無事に解決を見ようとしたが、慶應三年十二月二十五日、江戸の薩藩邸に起つた一事件は慶喜をして遂に薩・藝・兩藩との提携を断念させるに至つたのであつた。前述の如く、土州は初めから公・武・合體論者であつたが、板垣退助の率ゐる急進派は、薩藩の西郷隆盛と結託して討幕を主張

して居た。かれらは平和の手段によつて政權を朝廷の手に收めんとすることの到底朝廷の御爲に不利であることをいふのであつた。これより先、板垣の部下は西郷の斡旋によつて芝の薩藩邸に匿はれて居たが、いよいよ公・武・合體説が實現せられんとするのを見て、慷慨措く能はず、隊をなして市中を横行し、將軍上洛中の江戸留守居役、酒井忠篤の小石川藩邸を襲撃してさんく／＼な狼藉を働いた後、婦女子にまでも危害を加へて薩邸に引揚げた。忠篤大に怒り、二・三・の親藩とともに、十二月二十五日の夜、薩邸を焼打してかれらを江戸市外に驅逐した。この變報は晦日を以て大坂に達したが、會津・桑名・を始め、譜第の諸侯はみな眦を決して江戸の空を睨んだ。濃厚篤實なる慶喜も、遂に時局の收拾し難きを達觀し、討薩表は成つた。進軍の命令は下つた。慶應四年一月三日、會津・桑名・の兵について、姫路・高松・等親藩の兵約一萬人は、鳥羽・伏見・の兩道から進んで京都に迫つた。薩・長・藝・の三藩は、豫て期したることとて踴躍して起つた。井上馨・大村益次郎・等は、維新大業の成否この一擧にありと、尾・越・土・三藩の向背を顧みるに遑なく、兵を鳥羽・伏見・に配備して慶喜の軍を邀撃した。土藩も今は事救ふべからずと見て、官軍に加はつた。戦闘は四日に互つて、幕軍の大敗に歸した。一月六日、慶喜は大坂から軍艦、開陽號に搭乗して、海路を江戸に走つた。松平容保（會津）・松平貞敬（桑名）・板倉勝靜・小笠原長行・等がこれに従つた。

維新創業の五大案件と大久保の推進力

慶喜が大坂城を捨て、海路江戸に走つた後、新政府の差當り處理しなければならぬ問題に次の五事項があつた。

(一) 政體樹立のこと 王政復古の大號令換發と同時に、朝府の新機構として先づ總裁・議定・參與・の三職の設け置かれたことは、前に述べて置いた通りであるが、勤王の列藩をして如何に大政に參與せしむべきかは、まだ未決定のまゝであつた。何れは勤王列藩の代表者を一堂に會し、衆議をつくして萬機を決裁して行かなければならぬこと、すでに久しい以前から勤王志士の抱懐した理想であつたが、今はいよいよその制度を具體的に樹立すべき場合となつた。これを如何にすべきかの問題が第一である

(二) 三職の分課を定めること 王政復古の大號令とともに設け置かれた三職は、中央政府すなはち今日の内閣にも比すべき太政官の職制であるが、尙ほ新國家の行政を敏速且つ圓滿に施行して行くためには、これを各省の事務に分ち、それ／＼その主任官を定め、事務を分擔させることが必要である。その各省としては、神祇に關すること、國內事務に關すること、外國事務に關する

と、陸・海・軍務に關すること、會計事務に關すること、刑法事務に關すること、制度に關すること等がそれである。

(三) 列侯召集會盟のこと これは第一項の政體樹立と關聯する當面の問題であつて、いつ如何なる形式で全國の諸侯を中央に召集し、その朝廷に對する忠誠を誓盟せしむべきか、これも當時の情勢からいつて、喫緊の時務であつたこといふまでもない。

(四) 條約國に對し政體の變革を宣揚すること 安政以來幕府と修好通商條約を締結した歐・米・列國の代表者に對し、從來國交の當の相手となつて居た幕府が倒壊し、征夷大將軍が大政を奉還して、王政復古の大號令が煥發されたる上は、差當り締盟各國の代表者にその顛末を通告して條約を繼承し、かれらをして新政府を承認せしめることは、列侯を中央に召集して、皇室に對し奉り、忠誠を誓はしめることと同時に、行はれなければならぬ喫緊の時務である。

(五) 徳川慶喜問罪のこと すでに朝・幕・間の政權授受が不調に終り、鳥羽・伏見・の間に流血の不祥事を見た上は、速に問罪の師を發して江戸城を接收し、未だその向背を決せざる北陸及び東北の諸藩を鎮定する必要がある。

凡そ新政府の神速に處理すべき喫緊の國務として眼前に横へられたこれらの諸問題を解決するに當

り、一として大久保甲東のその議に與らぬはなかつた。就中、外國事務の處理に關しては、事前から大久保の最も心を砕いたところであつて、その三條・岩倉・等に建言して、一月九日に至り、早くもその主任者の決定を見、著々外國使臣に對する交渉の進捗して行つたことは、全く大久保の經綸の與るところが大きかつたのである。

有栖川宮に拜謁して征東の舉と大坂遷都の急務を言上

しかし、このことよりも大久保独自の獻策に基き、維新劈頭、先づ實行に移されて人心を一新した仕事に、大坂遷都のことがある。慶應四年(明治元年)一月十七日、前掲五項目中の第二項に基き、わが國最初の行政組織である太政官の七官制が定まり、それ／＼その主任官・事務官が任命せられた時、大久保は、一月二十四日を以て總裁局顧問に任ぜられたのであつたが、これと前後して長藩からは木戸孝允、自藩からは老職の小松帶刀が上京したので、大久保は顧問の職を木戸に譲り、自ら參與の地位に退いた。これより先、太政官の七官制が成つた一月十七日、總裁官・有栖川熾仁親王から薩藩邸に御沙汰があつて、大久保利通・西郷隆盛・及び岩下方平・三士の中一人參殿すべしとのことであつた。そこで利通が取るものも取敢ず宮の御殿に參上して拜謁仰付けられると、宮の申されるやう

は、卿等多年皇室のために盡力し、特に本年一月三日以來は、皇國のために粉骨砕心して御新政の進路に横はる幾多の障碍を排除し、遂に今日の光明を見るに至つた。聖上いたく御満足に思召され、余も爲に面目を施し、この上の喜びはない。だが前途は尙ほ遼遠である。更に卿等に御依頼遊ばさるるところが頗る多大である。今後ますます奮勵して皇國のために盡瘁せられんことを望むとて、尙ほ差當りの國務に關し意見あらば遠慮なく申出でよとの御申聞であつた。利通深く感激して對へ申すらく『仰せの程は退出の後、岩下・西郷・の兩士にも申聞け、篤と協議の上、具さに言上し奉ることと仕りませうが、こゝに即座に小臣の視るところを申上げることが許されますならば、今や時局急轉皇室の御稜威空前の重きを加へ、赫々として光被せぬ限もないことは、萬民の瞻仰して祝著し奉るところでありますけれども、將來には尙ほ解決を要する幾多の大問題が横はり、大政の輔翼に任ずるもの一層の決心を要する場合と存じます。古より一時の功を遂げて徒らに安を偷み、大機を失して折角の鴻圖を泥土に委した例たふしも少くありません。冀くはこの機を逸せず、一大英斷を以て天下に號令し、朝敵問罪の義旗を關東に向けて御進發あらせられることが何よりの急務かと存ぜられます。すでに戦ひ勝つことを以て念と遊ばさるる上は、先づ男山八幡宮に親拜のことを仰出でられ、それより大坂に御巡幸ありて、かの地に行在所を定め給ひ、以て官中・府中・累年の積弊を一洗し、人心を新たにすると

同時に、締盟各國との交誼を厚くし、且つ陸海軍の整備に大御心を用ひますならば、朝政の基礎日ならずして確立し、諸般の面目従つて一新するに至るべきこと、期して俟つべきであります。』と申上げた。官には幾たびとなく御首肯遊ばされ、尙ほ熟考の上何分の御沙汰あるべしと對へて御暇を賜はつた。

大坂遷都の建白書

この時、利通が行在所云々と言上して、遷都のことに及ばなかつたのは、要するに當時の形勢が、まだかゝる破天荒の大問題を議する上に尙早の嫌ひがあつたからであらう。だが王政維新の劈頭に當り、天下の耳目を一新し、皇威の普遍を策せんには、非常の英斷を以て遷都のことを決行することが最も効果的である。そもく京洛の地たるや、山間の一小盆地であつて、今後世界の列強と比肩して覇を國際場裡に争はんとする大帝國の首都としては、その規模が頗る狹隘に過ぐる憾みがある。すでに王政復古の大號令も渙發せられ、新國家の第一步を踏出した上は、よろしく帝都を四通八達の大坂に遷し、速に海内を統一して、王政の御規模を確立遊ばさるべきであるとの意見は、かれの久しく抱懐するところであつたが、總裁官に言上するに當つては特に戒慎して遷都の字句を避け、故らに行在

所と申上げたわけであつた。翌十八日、大久保は岩倉及び廣澤の兩人に會つたが、今は腹藏の必要なしと思つてか、滔々と大坂遷都の急務を説いた。岩倉は大に利通の意見に賛成し、更に自分からも總裁官に言上し、且つ三條公にも建言すべしと對へて別れた。そこで甲東は、十九日、更に廣澤とともに總裁官及び三條公の邸に至り、更めて遷都の意見を陳述した。かく遷都の議に關し大久保の執るところは頗る熱心であつたけれども、これは何時の世、如何なる時にありても故障の頗る多い問題であつて、容易に行はるべき形勢もなかつたが、二十三日に至り、遂にそれが公の朝議に附されることと決まつた。二十三日の朝議では、利通が熱心に執つて大坂遷都の議を主張したけれども、衆議は尙ほ容易に動くべくもなかつた。すなはち、これを文章に認めて公論に懸へるの必要を感じ、次の如く認めてこれを岩倉の手許に提出した。その建白書及び岩倉の議定・參與・に宛てた副書は次の如きものであつた。

今日之如キ大變態、開闢以來、未曾テ聞カザル所ナリ。然ルニ尋常定格ヲ以テ、豈是ニ應ゼラルベキヤ。今一戰官軍ノ勝利トナリ、巨賊東走スト雖、巢穴鎮定ニ至ラズ、各國交際永續ノ法立タズ、列藩離反之方向定マラズ、人心恟々、百事紛紜トシテ、復古ノ鴻業未其半ニ至ラズ、纔ニ其端ヲ開キタルモノト云フ可シ。然ルニ朝廷上ニ於テ一時ノ勝利ヲ恃ミ、永久治安ノ思ヲナサレ候

テハ、則北條之跡ニ足利ヲ生ジ、前姦去テ後姦來ルノ覆轍ヲ踏マセラレ候ハ、必然タル可シ。依テ深ク皇圖ヲ注目シ、觸視スル所ノ形跡ニ拘ラズ、廣ク宇内ノ大勢ヲ洞察シ給ヒ、數百年來一塊シタル因循ノ腐臭ヲ一新シ、官武ノ別ヲ放棄シ、國內同心合體、一天ノ主ト申シ奉ルモノハ、斯ク迄ニ有難キモノ、下蒼生トイヘルモノハ、斯ク迄ニ頼モシキモノト、上一貫、天下萬人、感動涕泣イタシ候程ノ御實行舉リ候事、今日急務ノ最急ナル可シ。是迄ノ通主上ト申シ奉ルモノハ玉簾ノ内ニ在シ、人間ニ替ラセ給フ様ニ、纔ニ限リタル公卿方ノ外、拜シ奉ルコトノ出來ヌ様ナル御サマニテハ、民ノ父母タル天賦ノ御職掌ニハ、大ニ乖戾シタル譯ナレバ、此御根本、道理適當ノ御職掌定ツテ、初テ内國事務ノ法起ル可シ。右ノ根本ヲ推窮シテ、大變革セラル可キハ、遷都ノ典ヲ擧ゲラルルニアル可シ。如何トナレバ、弊習トイヘルモノハ、理ニアラズシテ勢ニアリ、勢ハ觸視スル所ノ形勢ニ歸ス可シ。今其形跡上ノ一二ヲ論ゼンテ、主上ノ在ス處ヲ雲上ト云ヒ、公卿方ヲ雲上人ト唱へ、龍顏ハ拜シ難キモノト思ヒ、玉體ハ寸地ヲ踏ミ給ハザルモノト餘リニ推尊奉リテ、自ラ外ニ尊大高貴ナルモノ、様ニ思食サセラレ、終ニ上下隔絶シテ、其形今日ノ弊習トナリシモノナリ。敬上愛下ハ、人倫ノ大綱ニシテ論ナキコトナガラ、過レハ君道ヲ失ハシメ、臣道ヲ失ハシムルノ害アル可シ。仁德帝之時ヲ、天下萬世稱讚シ奉ルハ外ナラズ。即今外國ニ於

ツモ、帝王從者一ニテ卒シテ、國中ヲ歩キ、萬民ヲ撫育スルハ、實ニ君道ヲ行フモノト謂フ可シ。然レバ、更始一新、王政復古之今日ニ當リ、本朝ノ聖時ニ則ラセ、外國ノ美政ヲ歴スルノ大英斷ヲ以テ舉テ給フベキハ、遷都ニアルベシ。是一新ノ機會ニシテ、易簡輕便ヲ本ニシ、數種ノ大弊ヲ拔キ、民之父母タル天賦ノ君道ヲ履行セラレ、命令一度下リテ、天下慄動スル所ノ大基礎ヲ立、推及シ給フニアラザレバ、皇威ヲ海外ニ輝シ、萬國ニ御對立アラセラレ候事、叶フ可カラズ。

一、遷都之地ハ、浪華ニ如クベカラズ、暫ク行在ヲ被定、治亂ノ體ヲ一途ニ居ヘ、大ニ爲スコト有ルベシ。外國交際ノ道、富國強兵ノ術、政守ノ大權ヲ取り、海・陸・軍ヲ起ス等ノ事ニ於テ、地形適當ナルベシ。尙其局々ノ論アルベケレバ、贅セズ。

右内國事務ノ大根本ニテ、今日寸刻モ置クベカラザル急務ト奉存候。此儀行ハレテ、内政ノ軸立チ、百目ノ根本始テ舉ルベシ。若、眼前些少ノ故障ヲ顧念シ、他日ニ譲リ玉ハ、行ハルベキノ機ヲ失シ、皇國ノ大事去ルト云フベシ。仰願クハ、大活眼ヲ以、一斷シテ卒急御施行アラシコトヲ。千祈萬禱シ奉リ候。死罪。

正月

大久保一藏

別紙之通、大久保一藏ヨリ、手元迄差出候事ニ候得共、爲賢考入高覽候也。

正月二十三日

具 視

議 定

參 與

御 中

この建白書にも拘らず、遷都の議に關しては、公卿・堂上・及び諸藩の重臣間に反對の議尠からず、桓武天皇の奠都以來、前後千七十六年を通じ、七十三代の帝都であつた京洛の人心は、もとより舉つてこれを支持したることであるから、流言蜚語さかに行はれ、物情騒然として容易ならざるものあつた事情は、これを察するに難からぬ。

遷都問題で久我と久保との對決

就中、久我建通の如きは反對論の急先鋒であり、二十五日、岩倉具視をその邸に訪ひて、密に申すやう、大久保の提唱しつゝある遷都論は、薩藩の陰謀であつて、主上を大坂に要し奉り、長藩と提携して天下を制せんとするの企てである。後藤象二郎の如きは、表面大久保の議に賛成の意を表して居

るが、内實は夙に薩・長・の陰謀を悟り、表面偽つて同意を表するに過ぎない。藝藩の如きもまたその眞意は土藩と異ならず、内心大に岩倉の提議に快からざるものであると。これを聞いた岩倉は、もとより大久保の眞意を了解して居たので、大に大久保のために、かやうな流言蜚語の行はれることを憂へ、翌二十六日、直ちに大久保を招き、その趣を告げた。利通の申すやう「是れ恐らくは何人か重大事を妨害せんがために構へた流言でありませう。後藤の如きは夙に私の説に同意を表して來たものであつて、決して異議のあるものではありません」と、反復陳述して退出した。この時、たま／＼前に述べた木戸孝允入浴のことがあつたので、利通は相會して眞先にこれを木戸に諮つたが、木戸も大に大久保の提議に賛成の意を表した。二十七日には大久保が木戸と同道で岩倉邸に參入、こゝで久我建通と對決となつたが、久我にはもとより何の根據も信念もないことであつたから、忽ちにして大久保の論破するところとなり、後藤象二郎がこれに關係のないことも判明した。この時まで太政官は九條邸に置かれて居たが、この日更めて二條城に移された。

二條城（太政官）に於ける征東の御前會議

これより先、慶喜が大坂城を棄て、海路江戸に走ると、明治天皇は詔して、慶喜以下二十七人の官

爵を削ると同時に、すでにその勤王の旗幟を鮮明にして居た薩・長・土・藝・因・尾等の諸藩に命じ、高松・松山・大垣・桑名・等、關西及び南海に於ける佐幕色の濃厚な諸藩を追討させようと思はされたが、かれらは戦ひに至らざるに恭順の意を表したので、箱根以西の地は全く皇威に靡き、新政府を支持することとなつた。一月二十七日、三條・岩倉の兩卿は、議定・參與の總員を、新たに太政官の役所と定められた二條城に召集し、徳川慶喜問罪の師を發する件に關し各自の意見を求めた。それは大久保が木戸と相携へて岩倉邸を訪ひ、久我と對決した同日のことであつた。翌日二十八日には、前日その意見を徴せられた議定・參與の全員が再び二條城なる太政官に會して各自の所見を開陳した。岩倉は、二月一日、更めて大久保を招き、徳川慶喜追討に關する方略書の提出を求めた。大久保は直ちに西郷と協議し、速かに親征の議を決し、慶喜を追討し、江戸城を收めて天下の人心を一新しなければならぬと建議した。二月三日には朝議いよ／＼親征と決し、明治天皇親しく太政官に行幸、左の如き布告を發せられた。これが維新後最初の太政官行幸であつた。

今度慶喜以下賊徒等江戸城に通れ、益暴逆を恣にし、四海鼎沸、萬民塗炭に墮むとするに忍び給はず、叡斷を以御親征被仰出候。就ては、御人選を以、被置大總督候間、其旨相心得、畿内七道大小藩各軍旅用意可有之候。不日軍議御決定可被仰出御旨趣有之候間、御沙汰次第奉命馳集るべ

く候。宜諸軍戮力、一同勉勵、可盡忠戰旨被仰出候事。

越えて二月六日、曩に發遣された東海・東山・北陸・三道の鎮撫使を改めて先鋒總督兼鎮撫使となし、薩・長・以下二十餘藩の兵を以てこれに屬せしめ、ついで二月九日に至り、征討諸軍の部署を定めた。すなはち、總裁・有栖川宮熾仁親王を征討總督に拜し、西郷隆盛を總督府參謀に任じた。同時に東海鎮撫使として橋本實梁（參謀海江田武次・木梨精一郎）、東山鎮撫使として岩倉具定（參謀板垣退助）、北陸鎮撫使として高倉永祐（參謀小林兼吉・津田山三郎）、奥羽鎮撫使として澤爲量（參謀黒田清隆・品川彌二郎）、海軍總督として聖護院宮嘉仁親王（參謀鳥田左馬吉）がそれ／＼命を拜し、諸軍一齊に海陸並び進んで江戸城に迫つた。この時にあたり、關西の諸侯は皆先を争つて錦旗の下に馳集まつたけれども、關東及び奥・羽・の地は流石に徳川氏の根據地であつた。三百年の舊恩を思ふ譜第の諸侯は、われもわれもと江戸城に集まり、死力を盡して薩・長・の兵を撃退し、以て幕府のためにその最後の血の一滴までも捧げようといきまいた。しかも江戸城には糧食・兵器・ともに十分であつた上に、オランダに留學した海軍の榎本武揚、フランス式の教育を受けた陸軍の大島圭介等が極力開戦を主張し、その背後にはフランスの暗黙の支援もあつて、士氣頗る旺盛であつた。

江戸では西郷が徳川氏の城府接收

すでにして官軍は、中仙道から、東海道から、また甲州街道から、相前後して江戸城に迫つた。板橋・新宿・品川・の三宿には、薩・長・土・藝・の兵が充ち満ちて、三月十五日には總攻撃が開始せらるべしとの噂で、府の内外は沸き返るやうな騒ぎであつた。市民の家財を負擔して走るものが道に相踏藉し、阿鼻叫喚の聲は到るところに充ち満ちた。二百五十餘年の泰平と繁華とを誇つた江戸の市街も、兩軍の火蓋が一たび切つて放たれば一朝にして焦土と化さうとした。この時にあたり、舊幕臣を擧げての譏誣と中傷とを顧みず、奮然身を挺して媾和の任に當り、慶喜のために寛大な處分を乞ひ、市民を塗炭の苦しみから救つたものは海軍奉行・勝安房（安芳）その人であつた。これより先、大坂から軍艦で江戸に逃げ歸つた慶喜は、大に前非を悔い、恭順の態度を表はして寛大な處置を乞はうとしたけれども、熱狂せる麾下の士が頑としてこれを肯んじない。たゞ勝安房がひとり天下の大勢を遠觀し、蒼生の休戚を思うて媾和に意あるに遭ひ、これを陸軍總裁に任じ、共に力を盡して諸侯を慰諭し、諸兵の輕擧を制すると同時に、一方書を慶永に送つて救解を乞ひ、二月十一日、遂に江戸城を出で、上野の大慈院に入り、閉居謹慎してその罪を待つた。勝安房は、總督府の西郷隆盛が駿府

に入つたと聞いて、山岡鐵太郎を派し、書を送つて請ふところがあつたけれども、一向に埒が明かなかつたので、這回は自身出馬して隆盛と高輪に會見し、慶喜のために寛大の處分を請ひ、江戸市民を塗炭の苦しみから救出されんことを請うた。隆盛これを諾し、官軍の總攻撃は中止された。越えて四月四日には、東海鎮撫使・橋本實梁の一隊が先づ江戸城に入つた。慶喜は命によつて水戸に退き、官軍は城池兵仗を納めて確實に江戸城を占領し、二十一日には大總督官の入城を迎へ奉つた。

京都では大久保が新政府の外交問題に執掌

かゝる間にも京都では、曩に擧げた五項目の中、第四項の趣旨に基く締盟各國の公使に國情の變革を宣告して新政府を承認させ、かれらを皇城に引いて謁を賜ふの議が進捗しつゝあつた。この締盟各國の公使に謁を賜ふ議に關しても、當時まだ國際儀禮の何ものたるかを解しなかつた國民の間には、種々の異論が湧き起ると同時に、列國公使の間にも種々の異論があつて、その實行を見るに至るまでの政府部内に於ける紛議は尋常一様のことではなかつた。これより先、王政復古の大號令を拜し、一月十二日、兵を率ゐて神戸に上陸した備前藩の重臣・日置帶刀の部下と、イギリス公使館附騎兵隊との間に衝突が起り、越えて二月十五日、すなはち外國事務總督・伊達宗城並に東久世通禧が各國公使

謁の件に關し、大坂でかれらと豫備交渉の眞最中、新たに朝廷の御料として沒收された堺浦に、佛國軍艦・チアレキスの乗組員とそこを守備して居た土佐藩兵との間に由々しい衝突が起り、そのために妨げられて、大久保を始め新政府の首脳部が大汗を絞つて決定に漕ぎつけた外使引見謁の儀も、更に延び／＼となつて居たが、二月二十九日(西曆三月二十三日)には、いよいよ締盟列國公使に拜謁を仰付けられることとなつた。この日眞先に參内の序次に當り、馬上でその宿所・知恩院を出でた英國公使・バックスは、三條暖に差しかゝつた時、攘夷黨の朱雀操・三枝翁^{しげむ}の二人の襲撃をうけ、ために騎兵九人・士官一人・が重傷を負ひ、馬・人・とも傷ついて列を亂し、後隊にあつたバックスも危く害を被らうとした大騒動が起つた。幸ひにしてバックスに接待係として附添つて居た後藤象二郎・中井弘の兩人が稀に見る沈勇剛毅の舉措に出で、電光石火、先づ朱雀を斬り、ついで三枝を逮捕したために、公使の身邊は幸ひにして事なきを得たが、一時の憤激は非常なもので、直に兵庫に退き、軍艦に搭乗して横濱に去るべしといきまいた。かやうな大事件の踵を接して突發し來る間にあつて、新政府のために著々外交の大方針を定め、不慮の事件に對しては自ら挺身その解決の任にあたり、寢食を廢して事を圓滿に收拾したものは、わが大久保甲東であつた。

大坂行幸の決行とその眞意義―朝府自體の革新

初め太政官は、親征の大舉を發表すると同時に、行在所を大坂に置き、太政官役所を大坂東本願寺に移すことに内議を決定して居たのであつたが、その後異議が囂々として起り、太政官役所を大坂に移すことは、容易ならざる紛擾を醸すの虞あることを見越すに至つたので、ただ行在所のみを大坂に置くこととした。以て當時京都に於ける一般人心の動搖が如何に甚だしきものあつたかを知るべきである。

三月二十一日、明治天皇にはいよ／＼京都を御發轍遊ばされ、先づ男山なる八幡宮に御參拜、二十三日、大坂西本願寺なる行在所に著御遊ばされた。公卿及び諸藩主の供奉し奉るもの多く、三條實美もまた扈從して大坂に下つた。この間、岩倉はひとり京都に残留して政務を裁決して居たが、大久保もまた京都に居残つて、岩倉と協力して居た。これは大久保が大坂奠都の首唱者であつた機微の關係もあつたからであらう。大久保が大坂奠都を主張した最も主要な目的が、これを機會として千七十年餘年の久しきに亙る歴史とともに、朝府の内部に堆積して居た舊弊を一掃し、聖上をして名實共に皇國・日本の大主權者にて在すべき文武の聖徳を御修養遊ばさるべき典範を規制し奉り、以て皇室の御

稜威を肅振し、天下の人心を一新しようとするにあつたこと前に述べて置いた通りだ。されば車駕が一たび大坂に行幸あらせらるると、利通は直ちに宮中の制度を改革し、綱紀を肅振すべき案を具して三條・岩倉の手許に提出した。案は六箇條から成り、第一箇條には、嚴に宮中・府中の別を立て、府中には巳の刻より申の刻まで必ず出御、萬機を開召され、女人の出入を嚴禁遊ばさるゝこと、第二箇條には、毎日巳の刻に出御、必ず總督以下議定・參與に拜謁を仰付けらるべきこと、第三箇條には、侍讀を設け置かるべきこと、すなはち賢侯の中、宇内の形勢に通曉のものを拔擢、常に御左右に侍らせて御徳器御函養に資せらるべきこと、第四箇條には、御馬術御修練のこと、第五箇條には、式日御指定相成り訓練觀覽のこと、第六箇條には、制度・規則・とも大にその名實を正され候事、の各條項が擧げられて居る。この六箇條の建言で、大久保が如何に御新政の實を調へ、皇基を保鞏し奉ることに、夙夜その肝膽を推して居たかがよく分る。

すでにして車駕が大坂に著御あらせられて間もない三月二十六日には、天保山沖に行幸、初めて海軍の演習を觀覽あらせられた。まことにこれわが國に於ける最初の觀艦式であつたといつてよい。越えて四月五日には、大坂城で各藩陸軍の操練を觀覽遊ばされた。しかもさうした維新匂々の激しい御政務の御暇には、侍讀を召して内外の書籍を講進せさせ給ひ、ひたすら文武の道に御精勵遊ばされる

のであつた。これもとより徽聖文武なる明治天皇の御資質のしからしむるところであつたこともちろんであるが、三條・岩倉・の兩卿を通じて致された大久保の建言を御嘉納あらせられた跡の歴然として蔽ひ難きものを拜察し奉るべきである。

大久保諸藩の士に率先して明治天皇に拜謁仰付けらる

大久保は四月六日、行在所からの召命で京都から大坂に下り、翌七日、行在所に参内して、先づ三條公に謁し、京都市内の情況から、關東及び奥・羽の形勢等に關し委細具陳するところあり、九日、總裁局に於いて親しく拜謁を仰付けられ、有難き御諮詢を蒙つた。大久保はひたすら天恩の優渥なるに感激し、行幸前は京都に於ける人心の動搖甚だしく、治安も深く憂慮される情態にあつたけれども、御發轅後は却つて平穩に歸し、諸藩兵は日夕訓練に勵み、市中は極めて靜謐である旨を言上した後、更に關東の情勢に及び、徳川氏恭順の實も次第に行はれ、人心次第にその堵に安んじつゝある旨を答申して退出した。大久保甲東夙に勤王の志を懷き、西郷南洲と相携へて東西に奔走すること多年、慶應三年十二月九日、王政復古の大號令渙發以後は、常に朝府の要路にあつて國家の樞機に參與して來たといへ、未だ會て天顏に咫尺したることはなかつたのに、こゝに至つて親しくこの特典を賜はり、

全國各藩の士人に率先して拜謁の恩榮に浴したことは、かれとして如何ばかり感激のことであつたか、その心情察するに餘りあるものがある。かれは行在所を退出すると、これを同藩の小松帶刀・木場傳内・本田親雄・及び税所篤の五士に告げ、相伴ひて三橋樓に到り、祝盃を擧げた後、即夜歸京の途に就いたが、たま／＼一空水の如く晴れ渡り、月光澗江の水に碎けて金鱗を躍らせ、心神の爽快をよるに船の進むを覺えなかつたとあるのも道理である。かくて大久保は、翌十日京都に著し、直に太政官に出頭して具さに行在所の情況、坂地の形勢を報告した。初め聖上が大坂に行幸あらせられるや、關東の形勢如何によつては、東海道に御親征の大轟を進御遊ばさるべき豫定であつたが、徳川慶喜のみじくも恭順の意を表し奉り、官軍滞りなく江戸城を收むるの報が至つたので、尙ほ暫く大坂の行在所に御駐蹕遊ばされることとなつた。さうして暫く關東の情勢を御覽遊ばされるに、大總督府すでに江戸城内に移り、勝安房・大久保一翁等の諸士がよく挺身して府内の治安に任じ、奥・羽地方では仙臺・米澤等の雄藩もまた、朝命を奉じて勤王の師を出だせりとの確報に接したので、すなはち車駕還幸の議が起つた。岩倉は人を大坂に派遣して還幸奏請の議を三條等に謀つたが、三條等もまた異議なくこれに賛成したので、先づ大總督府に照會し、車駕の還幸に關して關東の軍機及びその人心に及ぼす影響如何を諮詢することとなつた。この際大久保は内命を奉じ、書を參謀・西郷隆盛に寄せて

會するところがあつた。すでにして總督府の回答が至り、車駕いよく還幸と決し、閏四月七日を以て大坂を御發輦、八日京都に著御遊ばされた。

東京遷都

かくて明治天皇には一旦京都に還御遊ばされたが、越えて七月十八日には更に江戸遷都の大詔が發せられた。今回の遷都は、もちろん江戸城の接收が滞りなく行はれ、江戸内外の人心が全く靜穩に歸し、一般の情勢が頗る順調に進んで居た事情が促した當然の成行ではあつたが、特にこの議を執つて車駕の東幸を促し奉つたものは佐賀藩士・大木喬任であつた。江戸遷都の大詔に『是朕ノ海内一家、東・西・同視スル所以ナリ』とある一節を拜しても、當時の日本が西南の諸藩と東北の諸藩とに分れ、如何に激して相軋つて居たかを察することが出来る。越えて九月二十日、明治天皇には輔相・岩倉具視・議定・中山忠能・等を従へて京都を御進發、東海道を經て江戸に行幸あらせられた。沿道の孝子・節婦・高齢者・が仁露慈雨に霑うたのもこの時である。各地の式内社が厚く奉幣を受けたのもこの時である。かくて十月十三日といふに、車駕がやすらげく東京に著御あらされば、大總督・有栖川宮熾仁親王以下品川に奉迎し、儀表堂々・鹵簿肅々・として江戸城に入御あらされた。江戸城はこの日から

東京城と改稱せられ、こゝに永久の皇居とはなつた。越えて十一月には熾仁親王が東征の功を奏して錦旗節刀を奉還した。十二月には、車駕一たび京都に行幸あらされたが、翌年三月には再び東京に還御となつた。

第二章 版籍奉還・廢藩置縣・て木戸の立てた經綸の

推進力となつた大久保利通

西郷と大久保とは何時から仲違ひしたか

西郷と大久保との仲の割れたのは、一般に征韓論の相對峙した時からとされて居る。しかしそれは本當でない。すでに兩人の生立ちから始まり、前來の記述を通じて述べて置いたやうに、兩人の間には性格の相違もあり、從つてその二代の藩主に仕へて來た態度及び皇室を奉戴して時難を克服して行かうとする經策の上にも相當著しい相違はあつたものの、その年少髻髮の時代から竹馬の友であり、斷金の交り續けて明治維新の際にまで及んだ兩人のことであるから、その感情に行違ひの生じて居

たのは大久保が島津家第二十八代の藩主・齊彬及び同二十九代の藩主・茂久の公・武・合體主義を支持し、渾身の力を擧げてその經綸を輔翼することを惜しまなかつたのに對し、西郷がともすると齊彬・茂久・二代の公・武・合體主義を手緩しとし、長・土・兩藩の下士階級を中心とする學兵・討幕・主義に接近して歩を運ぶ傾向の著しかつた時から始まつて居ると考へることも出来るし、また西郷が征討大總督官・有栖川熾仁親王に參謀として京都を發するまで、兩人が事大小となく相協議し、小御所會議の當夜から鳥羽・伏見・の異變を経て、いよいよ東征大總督官の御進發を見るまで、眉に火のつくやうな喫緊の時務を用意周到に處理して來た關係から見ると、兩人の仲の割れたのは、どうしても西郷が東北鎮定の功を奏して、明治元年十月、(慶應四年九月八日明治と改元)新しき名の東京に凱旋した時からと見なければならぬことになる。これをいづれと決するかは、これまで汗牛充棟も管ならず世に出た西郷隆盛傳も、大久保利通傳も、まだ全く手を觸れて居ない問題であるが、本傳はその解決に何程かの資料を提供したいと思ふ。

初對面から肝膽相照らした木戸と大久保

慶應三年十月十四日、徳川慶喜が大政の奉還を奏請し、朝廷が直にこれを御允許遊ばされてから、

慶應四年一月二十一日、長藩の政權を代表する木戸が遅ればせに入京し、大久保と膝を交へて語り、新政府當面の措施に關し全く肝膽相照らすに至るまでは、大小のことがすべて岩倉具視をめぐる西郷と大久保との協議によつて進められて來たといつて決して過言でなかつたのだ。しかるに一月二十一日、木戸が初めて入洛し、二十五日、大久保が總裁局顧問の地位を木戸に讓つて參與の列に班し、新政府焦頭爛額の急に迫つた問題について談合して見ると、この兩人は不思議に馬が合つた。それかといつて兩人は、もちろんその性格を一にして居たといふわけではない。兩人の間にはむしろ人生の兩面を代表する大きい性格の相違があつたのであるけれども、その性格の相違が却つて國家空前の難局に處し兩人の協力に拍車をかける力の一つともなつた。

木戸はその人物に於いても、識見に於いても、當時一代を空しくする程の大經綸家であり、その行はんとするところは必ず明哲な、徹底した理想・理念・の軌道の上に置かれるのでなければ、その任に在るに堪へぬといつた生一本の性格であり、大久保の叡智は、もとより木戸の理想・理念・を了解するには十分なものがあつた、木戸の眞赤になつて主張するところは、むしろ大久保がいはんとしてひそびれて居たところであつたことが多いのであるが、大久保は經世家といふよりもむしろ政治家であつた。大久保によれば、政治は事を行つて正義とするを眼目とし、事の是非善惡・正邪曲直・を批判

するのが目的でない。理想・理念の上からどんなにそれが是であらうとも、また善であらうとも、行はなければ非となり悪に墮する場合の少くないのが人生である。畢竟するに、政治は善を立て正を貫く仕事であつて、そのためには力が必要である。されば正義を正義として立て通すためには、多少の權變は許されなければならぬ。かやうなところに、木戸と大久保との間には、性格の上にかなり大きい距りがあつたのであるが、明治維新の如き非常の大變革に際しては、木戸の如き經世家によつて、政府の由つて以て進むべき規範を樹て準則を定むることも必要であり、大久保の如き政治家によつて、多少の矛盾・多少の撞着・はこれを忍んでも、力で押通して行くといふ權變も必要である。この兩雄が初めて膝を交へて、明日から施行されなければならぬ御新政の大眼目について協議した時、一見百年の知己のやうに肝膽相照したことは無理もない。

木戸は理念の雄・大久保は行實の雄・西郷は仁徳の雄

西郷に至ると、その性格が兩人と全くその儔を異にするものがあつた。西郷には、自分の理想とか理念とかいつたものはない。また大久保のやうに權變といつた性質のものも、兎の毛で突いた程もない。蕩々逸々として人をその大腹中に置き、また自分を人の腹の中に融込ませるといつた曠世の大偉

材であつた。苟も至忠至誠の人であり、それがその人の肺肝の聲であれば、相手が長藩の人であらうとも、土藩の人であらうとも、越前藩の人であらうとも、紀州藩の人であらうとも、宇和島藩の人であらうとも、それは問題としなかつた。感心してその説に傾聴し、納得が行けば自分が進んでその人の理想なり、企畫なりを實行に移さうとする美點をもつて居た。されば一たび西郷の人徳に接したものは、陶然としてその魅力に酔はされざるはなく、誰でも身命を投げ出してこの人のために盡さうとするに至る。若し西郷が征討大總督官の參謀として東北の軍旅に身を置くことなく、大久保及び木戸と鳩首凝議して明治政府當面の施措を定め、著々諸般新制度の樹立に任じて行くとしたならば、或は明治十年の西南戦役といふ大悲劇も、これを避けることが出来て居たかも知れぬ。

西郷が東北の征途に上るまで、大久保が主となつて岩倉に獻策し、これを實行に移した維新草創の時務を見るに、事大小となく西郷に協議し、その賛成を得て居る。若し西郷が東北の征途に上らなかつたならば、大久保は依然その態度を持續し、西郷に協議せずして木戸と謀り、これを岩倉に獻策するといふことはしなかつたに相違ない。しかるに西郷が東北の征途に上つてからは、戦雲逸々として都鄙の間を距て、加ふるにその果斷専行を必要とする維新草創の時務は、毎日の如くその机上に横へられて解決を要求された。いづれも新政府の威信を増し、基礎を鞏固にして行く上に大切な問題ばかり

りである。これを特使に託して一々東北の軍旅にある西郷に知照し、その賛成を得て實行に移して行くといふことは全く不可能のことであつた。そこで明治元年十月、西郷が奥・羽・鎮定の功を奏して東京に凱旋した時には、政府の要員中にも全く新しい分子が加はり、留守中岩倉・三條・木戸・及び大久保の協議によつて實行に移され、全くその面目を一新した事態も少くなかつた。その最も著大なものは、木戸孝允が先づ發議し、大久保が雙手を舉げてこれに賛成し、すでに實行に移すばかりのところまで準備の整つて居た版籍奉還の仕事であつた。しかしこの仕事が實行に移されたのは、すでに西郷が東京に凱旋し、ついでその郷里・鹿児島に歸り、藩主に仕へて、また中央のことを意に介せざる如く空嘯そらなげいて居た時であつた。それよりも西郷に最も不快の思ひをさせたものは、西郷の出發する時まで、越前藩から徴かされて參與に列し、ついで會計事務局判事を兼ねて居た由利公正によつて切り盛りされた新政府の財政の權が、何時の間にか舞込んで來た大隈重信の手に移り、由利は全く新政府の樞機から疎斥されて居たことであつたと思はれる。

由利公正の財政策に辛く當り散らした長州派

明治政府の財政は、前述の如く、初め越前藩から徴されて參與に列し、ついで會計事務局判事を兼

ねた由利公正によつて處理されて居た。由利の財政に關する知識は、安政五年、福井藩・松平春嶽の招聘をうけて藩政の改革に任じ、専ら西洋文化の紹介と施設とに努めた熊本藩士・横井小楠の啓發による所が大きかつた。革新政府の財政といふことに關心を持つことの最も早かつた土藩の坂本龍馬は、王政復古の大號令の渙發せられる前後、二回まで福井藩を訪うて、革新政府の財政に關する意見を叩いて居る。その初めの訪問は、横井小楠に會ふことが目的であつたが、後の訪問は、由利公正に會ふことが目的であつた。由利が慶應三年、新政府に徴されて參與に任じたのは、坂本龍馬が福井から歸つて、兎刃に斃れる前、岩倉に會つて、大に由利の人物を推薦しておいたからであるといはれて居る。由利が新政府に徴されると間もなく、熊本の横井も徴されて參與となり、制度局判事を拜命した。しかし横井はこの時もう六十の高齡であつた。明治二年正月五日には、横井も退朝の歸途、兎刃の見舞をうけて坂本の後を追ひ、明治政府には由利たゞ一人が残つて、眉に火のつくやうな新政府の勝手元を切り廻して居た。慶應三年、王政復古の大號令が渙發されてから、明治二年、函館の激徒が全く鎮定に歸するまでの明治政府の財政といふものは、實にわれ／＼の想像にあまる苦しい遺蹟であつた。鳥羽・伏見の戦争が官軍の勝利に歸すると、有栖川征討總督官は、直に錦旗を擁して御進發になつたが、この時朝府には一金の貯へもない。大津から、大垣から、兵站部の使は櫛の齒をひく如

く京都に駆けつけて、軍資の缺乏を訴へたけれども、朝府としてはどうしようもない。この苦しい間にあつて、巧みに三井・小野・島田・等京都に於ける絲屋仲間を操縦し、京都・大坂・大津・等各地の町人を納得させて、三百餘萬兩の公債を募り、大坂に急拵への造幣所（後の造幣寮ではない）を設けて二分金を鑄造したり、越前國今立郡五箇村産の厚紙で太政官札を造つたりして、兎にも角にも鳥羽・伏見の戦役から函館の平定に至るあの急場を凌いだ。これは確かに由利公正の功である。

しかし由利がさうして急場を切抜けた間にも幾多の反対はあつたのだ。どんなに貧しい新政府の勝手元であつたにしても、財布の口を締めて居るのは由利である。由利を抱込んだものが自派の勢力を扶植するに都合の好いやうに國軍の金を使用することが出来るのであるから、由利は勢ひ各派の引張風となり、黨争の渦中に卷込まれざるを得なかつた。

もちろん由利の財政策には、岩倉を始めとして西郷・大久保・木戸等の熱心な支持があつた。當時は由利を措いて外に、この難局に當るべき人物がなかつた。しかるに明治元年五月、それは由利が新政府のために苦心慘澹して造上げた三萬兩の太政官札が初めて世に出ようとする頃から、由利の財政策に對する反対派の運動は漸く表面化して來た。當時、由利の財政策に對する反対の急先鋒には武人側に長藩の大村益次郎があり、文官側には肥藩の大隈重信があり、大隈の背後にあつて絲を繰つ

て居たものが伊藤博文と井上馨とであつたことが考へられる。これにはさまざまの事情があつたことと思ふが、由來福井藩は、文久二年、島津久光が公・武・合體主義に基調する幕政の改革に於いて長州藩を出し抜いた時から、薩州藩と提携して時局の收拾に努めて來た關係がある。殊に維新の際、土佐藩が辭官・納地・問題で慶喜の立場を支持した時には、尾州藩と提携して土佐藩に左袒して居る福井藩といふものは、尊王・倒幕・一本槍で進んで來て居る長州藩にとつては、重ねくの政敵である。その福井藩から出た由利公正に新政府の金庫の鍵を握らせて置くことは、長州藩としてはこの上もなく不安であつたに相違ない。そこで長州派はなにかにつけてこつ／＼と由利をこづき廻した。長州派と由利との間が一步疎隔することは、やがて薩州派と由利との間が一步接近することであつた。明治政府草創の際最も困難とされた財政の局に當つて、よくかれが如き功績を擧げることの出來た由利公正が、明治二年、早くもその地位を捨て、政府の樞機を去らなければならなかつたのは、全く長州派の排斥によるものであつた。さうして、たとひそれが偶然であつたにしても、その爪牙となつて由利公正の手から財政の鍵を奪つたものは大隈重信であつた。これを要するに、明治政府に於ける財政の鍵は、最初越前藩から徴された由利公正の手にあり、それが一旦肥藩を代表する、大隈重信の手に移り、更に井上馨の手に轉じて、井上と江藤との正面衝突となつた次第であつた。

西郷は東北の軍旅にありても極力由利の財政策を支持した

西郷が征討大總督官の參謀として京都を發する時には、岩倉も、三條も、大久保も、木戸も、みな心を協せて由利を支持し、まさしく由利財政の黄金時代であつた。西郷は前にも述べた通り、自分の知識・才能・及ばぬ事柄は、虚心坦懐、よくその道の良才に聴き、その人の施設・經綸・を助けるといふ美德の持主であつた。これはその段にくはしく述べなければならぬことであるが、明治政府は明治二年正月、封建の舊制を撤廢する瀬踏みとして、先づ版籍奉還のを行ひ、越えて明治四年、更にそれを徹底的に推進めて、王政復古の最後の斷案ともいふべき廢藩置縣の大改革に到達したのであつたが、それには全國諸藩の動搖に備へるため、薩・長・土・肥・四藩の兵力を中央に集結する必要があり、大久保と木戸とが専ら事に任じ、鹿兒島から西郷を、高知から板垣を東京に召出して、御親兵を編制・せることに努力したのであつたが、その際、西郷は、三度目の勅使をうけ、鹿兒島を發し、東京に出ると直ぐに紀州藩の津田を訪うて、廢藩置縣といふ仕事の本質と、その施設の概要とについて問學するところがあつたと傳へられて居る。西郷はかやうな人であつた。苟もわが才智・力量・にあまることであれば、必ず已れを空しくしてその道の良能を訪ひ、謙抑以てその教へを請ふこ

とを恥としなかつた。それは由利の財政的手腕に對する場合に於ても全く同じであつた。

近畿の間でさへ、由利の發行した太政官札は、通用が圓滑でなかつた。況んやこれを軍資として東北の邊陲に齎し、軍需を足さうとすることの困難は察するにあまりある。しかも西郷は由利の苦境を知り、何とでもしてこの新紙幣を通用させてやらねばならぬといふ誠意から、或る時はその部下に命じ、刀にかけてもこれを通用させずには措かぬといふ意氣込で、大久保・木戸・等との前約を果すことに努めた。それが明治元年の末、奥・羽・鎮定の功を奏して江戸に歸つて見ると、由利は全く中央の樞機から疎斥せられて逆境に立つて居る。さうして木戸と大久保との合作にかゝる版籍奉還の仕事は、まさに實行に移すばかりに準備が整つて居る。さうして大久保の新政府に於ける赫々たる威望に對しては、藩地の子弟の間にも兎角の風評が高かつた。もとより生一本の西郷隆盛であるから、かやうな風評の渦中にあつて木戸や大久保から煩さい相談(事後承諾)を持ちかけられ、複雑な政争の渦中に投ずることは迷惑至極であつたものと見え、『おいどんは故郷に歸る』といひ出した。一旦いひ出してはきかぬ西郷のことであるから、誰もその故郷に歸るといふのを支へ止め得るものはなかつたし、支へ止むべき成規はまだ立つて居なかつた。